帙太重きを以ての故に析て子卷となせるのみ、漢書評林は百十九卷に分つ。漢書成るの當時甚だ其書を重ず、學者諷誦せざるなし、班固は郎と爲りてより後ち遂に親近せらる。時に京師に宮室を修起し、城隍を浚繕し而して關中の耆老猶ほ朝廷の西に顧んとを望む、固は前世の司馬相如が上林子虛賦を作り、吾丘壽王が士大夫論及び驃騎將軍頌を作り、東方朔が客難及び非有先生論を作り終に以て諷勸せしに倣して乃ち兩都の賦を上て盛に洛邑制度の美を稱し以て西賓姪佚の論を折く、其辭後漢書本傳に收む。肅宗雅より文章を好みしを以て、固愈〻幸せらるゝことを得、數〻入て書を禁中に讀む、或は日を連ね夜を繼く、帝行て巡狩する每に輒ち賦頌を獻上す、又た賓戲を作て以て自ら通し後に玄武司馬に遷れり。

章帝の建初四年に詔して諸王諸儒を白虎觀に會して五經を講論して白虎通德論を作らしめ、固をして其の事を撰集せしむ、固は又た典引篇を作りて漢の德を叙述す、典は堯典を謂ふ、引は猶ほ續の如し、漢は堯の後を承くるが故に漢の德を述て以て堯典に續けるなり。其辭に曰く、太極之原、兩儀始分、烟烟熅々、有沈而奧、有浮而清、沈浮交錯、庶類混成、率命人主、五德初始、同乎草昧、玄混之中、隩細越契、寂寥而亡、部者系不得而紀也、厥有氏號紹天闡繹者、莫不開元於太昊、皇初之首、上哉、俶乎、其書猶可得而脩也、亞斯之世、通變神化、函光而來曜、若夫上稽乾則、降承龍翼、而炳諸典謨、以冠德卓縱者、莫崇乎陶唐、陶唐含胤而禪有虞、虞亦命夏后、殺契熙哉、越成湯武、殷肱既周、天乃歸功元首、將授漢劉、(下略)固は後ち事を以て獄に繫がれ獄中に死す、時に年六十一、固が著はす所は典引、賓戲の外、應賓、答賓、賦、銘、誄、頌、書、文、記、論、議等凡て四十一篇あり、班閣蒐集之を收む(漢魏六朝百三名家集漢書班彪班固傳)。

漢書の文章及び躰裁……

劉宋の范曄は班馬二氏を評して曰く、司馬遷班固父子、其言史官載籍之作、大義粲然著矣、議者咸稱二子有良史之才、遷文直而事覈、固文贍而事詳、若固之序事、不激不抑、抗賦而不殺、詳而有體、使讀之者、釐釐而不厭、信哉其能成名也、遷は五十餘萬言を以て三千年の事を叙し、固は八十餘萬言を以て二百三十年間の事を叙す、或は之を以て二氏の優劣を判決せんとするものあれども恐くは非ならん、宋の鮑壁曰く、班固西漢書、典雅詳整、無愧馬遷、後世有作莫能及矣、固其良子之才乎と、明の黃省曾曰く、孟堅之史、每傳一人、則不特功德言語了了無遺、模寫如畫、又且併其形態之狀以鋪張之と、宋の楊万里曰く、太白詩、偶翁劒客之語、少陵詩、雅

士駿人之詞、比之文、太白、則史記、少陵、則漢書也と、固を許する者褒貶一ならず、或は謂へらく漢書の一書多くは古人の成文を潤色して其体裁を整頓せしに過ぎず、即ち史記に載せたる漢代の事蹟は殆んと全文を引用し、昭帝より平帝に至る六世の史料は賈逵、劉歆に取り、復た陳宗尹、敏孟異等と共にせしものなれば固の獨力に成れるもの幾と希なりと、故に固を誹りて剽竊の雄と爲し、創作の才を以て許さゝるものあり、然れども是れ頗る酷評と謂ふべし、固の文は遷の變化縱横なるに比すれば平淡直叙なるに似たれども其の森嚴にして法あるは、特得長所と謂ふべし、史記は私撰に成り、漢書は官撰に成れり、故に後世官撰歴史は多く法を漢書に取るといふ。

左に固の作に成れる匈奴傳贊の一節を掲げん、

書、戒蠻夷猾夏、詩、和戎狄是膺、春秋有道、守在四夷、久矣夷狄之爲患也、故自漢興、忠言嘉謀之臣、曷嘗不運籌策、相與爭于廟堂之上、乎、高祖時、則劉敬、呂后時、樊噲、孝文時、賈誼、鼂錯、孝武時、王恢、韓安國、朱買臣、公孫弘、董仲舒、人持所見、各有同異、然總其要歸、兩科而已、縉紳之儒、則守和親、介冑之士、則貪征伐、皆偏見一時之利害、而未究匈奴之終始也、自漢興以至于今、曠世歷年、多于春秋、其與匈奴有修文而和親之矣、有用武而克伐之矣、有卑

下而承事之矣、有威服而臣畜之矣、詘伸異變、強弱相反、是故其群可得而言也、昔、和親之論、發于劉敬、是時天下初定、新遭平城之難、故從其言、約結和親、略遺單于、窒以救安邊境、孝惠高后時、遵而不違、匈奴寇盜不爲、蓋止而單于反以加驕倨、遂至孝文、與通關市、要以漢女、增厚其賂、歲以千金、而匈奴數背約束、邊境屢被其害、是以文帝中年赫然發憤、遂躬戎服、親御鞍馬、從六郡良家材力之士、馳射上林、講習戰陣、聚天下精兵、軍于廣武、細柳、馮唐、與論將帥、喟然歎息、思古名臣、此則和親無益已然之明效也、(下略)と范曄が固、文贍而事詳といひ、又た贍而不穢、詳而有體といへるもの洵に當れり、後人が班馬を聯稱するは偶然ならざるなり。

白虎通德論……

此書は章帝の時諸儒を白虎觀に會して五經を討議せしめし、時班固之を編著したるものなり、或は單に白虎通と云ふ、凡て四十四篇、四卷、漢魏叢書之を收む、又單行本ありて、普く行はれ、頗る多く諸書に引用せらるゝを見る。其の說く所は經書中の倫理綱常制度儀式等の術語の解釋なり、其の主要なる篇名は爵、號、謚、五祀、社稷、禮樂、封公侯、京師、五行、三軍、著龜、三政、三教、三綱、六紀、情性、五刑、喪服、崩薨等なり、例せば其の情性篇に曰く、情性者何謂也、性者陽之施、情者陰之化也、人稟陰陽、

氣而生、故內懷五性六情、情者靜也、性者生也、此人所稟六氣以生者也、故鈞命訣曰、情生於陰、欲以時念也、性生於陽以理也、陽氣者仁、陰氣者貪、故情有利欲、性有仁也、五常者何、謂仁義禮智信也、仁者不忍也、施生愛人也、義者宜也、斷決得中也、禮者履也、履道成文也、智者知也、獨見前用不惑於事見微者也、信者誠也、專一不移也、といへるが如し、六情とは喜怒哀樂愛惡をいふ、古來仁義禮智の聯語ありしも之に信を加へて五常の目を立てしは班固を以て始とす、世の班固を以て浮華の士にして學なしといふ者は蓋し妄評なり

乙 傳記

第一 韓嬰

史記儒林傳に曰く、韓嬰は燕人なり、文帝の時に博士と爲り、景帝の時に常山王の太傅と爲る、嘗て武帝の時に董仲舒と帝の前に論す、其人と爲り精悍にして事に處すること分明なり、仲舒、難詰すること能はざりしと云ふ、又た詩人の意を推して內外傳數萬言を爲る、其の語頗る齊魯時と殊なり、然れども其の歸は一なり、漢書藝文志には韓詩故三十六卷、韓詩內傳四卷、韓詩外傳六卷、韓詩說四十一卷とあれども歲久しく散佚し、唯韓故二十二卷は新唐書尙ほ著錄せり、而も今日は唯韓詩外傳十卷存するのみ、然れども外傳も隋志より以後は四卷を增して十卷と爲す、蓋し後人の分つ所ならん、其の外傳と名けしは古事古語を雜へ引き、證するに詩詞を以てし、經義と遂條相比附せざる故なり、玉函山房輯佚書には韓詩內傳一卷、韓詩故二卷、韓詩說一卷を收むれども皆な片々たる殘闕の訓詁にして固より其の舊に非るなり、故に今日韓嬰の學識文章を見るは外傳に依らざるべからず、外傳は初卷には二十九則、次卷には三十四則、第三卷には三十九則、第四卷には三十三則、卷五には三十二則、卷六には二十七則、卷七には二十八則、卷八には三十五則、卷九には二十七則、卷十には二十五則を載す、合計三百〇九則なり、中間往々譏議を免かれざる所あれども又た時に特見なしとせず、就中荀子の非十二子篇を引きて子思、孟子を刪去して唯十子を存す、其の去取は特に識ありと稱すべし、今其の文例を錄ねて左に其の一節を摘記せん、

夫當世之愚飾邪說文姦言以亂天下、欺惑衆愚、使混然不知是非治亂之所存者、即是范雎、魏牟、田文、莊周、慎到、田駢、墨翟、宋鈃、鄧析、惠施之徒也、此十子者、皆順非而澤聞見雜博、

然而不師上古、不法先王、按往古造說、務而自切、道無所遇、二人相從、故曰、十子者之工說說皆不足合大道、美風俗、治綱紀、然其持之各有故、言之皆有理、足以欺惑愚、交亂撰鄙卽是十子之罪也(下略。外傳卷四末)、陳明は韓嬰の文を評して嚴整倫古といふ(韓詩外傳序)、嬰の旨とする所は或は理を引き以て事を證す、事を引き以て詩を明かにするに非るに似たりと云へども、而も其の馳騁貫穿して清婉なるは稱して宛然たる聖門の家法たり、左に其の一節を示す。

齊景公遣晏子南使楚、楚王聞之、謂左右曰、齊遣晏子使寡人之國、幾至矣、左右曰、晏子天下之辯士也、與之議國家之務、則不如也、與之論往古之術、則不如也、王獨可以與晏子坐、使有司束人過王、王問之、使言齊人善盜、故束之、是宜可以困之、王曰、善、晏子至、卽與之坐、圖國之急務、辯當世之得失、再舉再覇、王默然無以辯、晏居有間、束徒以過之、王曰、何爲者也、有司對曰、是齊人善盜、束而詣吏、王欣然大笑曰、齊乃冠帶之國、辯士之化、固善盜乎、晏子曰、然固取之、王不見夫江南之樹乎、名橘、樹之江北則化爲枳、何則土地使然爾、夫子處齊之時、冠帶而立、儼有伯夷之廉、今居楚而善盜、意土地之化使然爾、王又何怪乎、詩曰、無言不雠、無德不報(韓詩外傳卷十)。

第二　劉向、劉歆

前漢の劉向字は子政、本名は更生、弱冠にして宣帝の左右に在り通達にして能く文辭を屬するを以て王褒、張子喬等と並ひに進む、賦頌を獻すること凡て數十篇、太傅蕭望之小傅周堪深く向を重んじ、散騎宗正給事中に薦め、侍中金敞と四人心を同くして政を輔け、宦者石顯弘恭の專權を患ふ、後ち蕭望之讒せられて自殺し只周堪親任せらる、向は堪が位に在るを見て復た進まんとを幾がひ且つ其の傾き危からんとを懼れ乃ち封事を上り諫て曰く、臣前きに幸に骨肉たるを以て九卿に備はるを得、法を奉するを職とす、乃復た愚を竭す、竊かに見れば災異並ひ起て天地は常を失ふ、微衰は國の爲めなり、終に言はざらんと欲するも、忠臣は吠吠に在りと雖も猶ほ君を忘れず、惓惓の義なり、況んや重ぬるに骨肉の親を以てし、又如ふるに舊恩の未報を以てするをや、愚誠を竭さんと欲れども、又恐くは職を越えんとを、然れども二恩未だ報いず、忠臣の義一たび愚意を抒べて退きて農畝に就かば死すとも恨む所なけん云云と、向は自ら信を上に得たるを見て、常に顯はに宗室を說へ、王氏及び在位の大臣を譏刺す、其の言多く痛切にして至誠より發す、上も數、向を用ひて九卿と爲

さんと欲したれども輙く王氏の在位者及び亟相御史の爲めに妨けられぬ、故に終に遷らず大夫の官に居ると前後三十餘年、年七十二にして卒す、卒後十三歲にして王莽簒立せり。向か三子皆な學を好む、曰く伋、曰く賜、曰く歆、少子歆最も名を知らる。

劉歆……　歆字は子駿、少より詩書に通じ能く文を屬す、詔を受て父向と秘書を領校し、六藝傳記を讐し、諸子詩賦數術方技、究めさる所なし、向死して後ち、歆復た中壘校尉と爲る、哀帝の時に貴幸せられ復た五經を領して父の前業を卒へしむ、歆乃ち六藝群書を集めて種別して七略を作る、歆及び向始て皆な易を治む、宣帝の時に向に詔しに穀梁春秋を受けしむ、十餘年にして大に明習せり。歆が秘書を校するに及びて、古文春秋左氏傳を見て歆大に之を好む、時に亟相史、尹咸、翟方進に從て受け、大義を質るを以て歆と共に經傳を校す、歆は略ぼ尹咸及び亟相翟方進に從て受け、大義を質問す、初め左氏の傳は古字古言多く、學者は訓詁を傳ふるのみなりしが、歆が左氏を治むるに及び傳文を引て經を解し轉た相發明す是に由て章句義理備はれり。歆も亦た溫靖にして善く謀る、父子俱に古を好み、博見强志、人に過絕せり。歆以爲へらく左丘明は好惡を聖人と同くし、夫子に親見せり、而も公羊穀梁は七十子の後に在り、之を傳聞すると之を親見すると其の詳略同からずと、歆數、以て向を難す、向も非問する能はず、然れども向は猶ほ自ら其の穀梁の義を持しき。歆か親近せらるゝに及び左氏春秋及び毛詩、逸禮、古文尚書を建て、學官に列せんと欲す、哀帝歆をして五經博士と共に其の義を講論せしむ、諸博士多く歆の意と同からず、歆因て書を太常博士に移して之を責む、其書は漢書本傳に在り、其の末に若必專己守殘數同門妬道眞、遂明師失聖意、以陷於文吏之譏、甚爲二三君子不取也、と云へる語あり、當時門戶蔽錮以て察すべし、歆の言甚た痛切なりしかば諸博士皆怨恨せりといふ、是より歆は衆儒の爲に譏られて身安からず、後に律曆を考定し、三統曆譜を著はす、王莽の簒位に及ひて莽の國師と爲り其の節操を汚せり、蓋し歆は學識卓越すと雖も、忠孝の道に於て非議を免かれさる所あり、故に後世歆を重んする者なし、向は純忠至誠、學德兼備實に得易からさるの人なり。

新序……漢書藝文志に劉向、所序六十七篇、新序、說苑、世說、列女傳、頌圖也と、隋書經籍志には新序三十卷、卷一錄とし、唐書藝文志も其の目亦同じ、宋の曾南豐の校書序には今可見者十篇といふ、曾鞏(南豐)と歐陽修(唐書撰者)とは同時にして言ふ所の

卷帙懸に殊なり、蓋し唐書藝文志に載する所は唐時の全本に據りて言を爲し、曾鞏が校錄せし所は則ち宋初殘闕の本たりしならん。今日傳はる所の書は多くは十卷十篇なり、此書は春秋の時事尤も多く漢事は數條に過ぎず、大抵は百家の傳記を採り類を以て相從ふ、故に頗る春秋內外傳・戰國策・太史公書と互に相出入す、宋の高似孫の子略に謂へらく、先秦の古書は脫燼せしも一たび劉向の筆に入りて、採輯遺さず、其の紀綱を正し、敎化に廸り、邪正を辨し、異端を黜け、以て漢の規監と爲す者は蓋し此書にありと、左に文例を彙ねて一節を揭げん、

趙簡子上羊腸之坂、群臣皆偏袒推車、而虎會獨擔戟行歌不推車、簡子曰、寡人上坂、群臣皆推車、會獨擔戟行歌不推車、是會爲人臣侮其主、爲人臣侮其主者何若、虎會對曰、爲人臣而侮其主者死、而又死簡子曰、何謂死而又死、虎會曰、身死妻子又死、若是謂死而又死、君既已聞爲人臣而侮其主者之罪矣、君亦聞爲人君而侮其臣者乎、簡子曰、爲人君而侮其臣者何若、虎會對曰、爲人君而侮其臣者、智者不爲謀、辯者不爲使、勇者不爲鬬、智者不爲謀、則社稷危、辯者不爲使、則使不通、勇者不爲鬬、則邊境侵、簡子曰、善、乃罷群臣不推車、爲士大夫置酒、與群臣飲、以虎會爲上客（說苑卷一、雜事第一）、新序の文勢は反覆回轉

にして旨意懇懇惻惻、寔に諷諭の體を得たり。

說苑……是書凡て二十篇、隋唐志皆な同じ、崇文總目に云く、今存する者は五篇、餘は皆な亡ぶと。曾鞏の校書序に云く、十五篇を士大夫の家に得、舊と合せて二十篇と爲すと、今本は二十篇二十卷なり、新序、說苑各、單行本ありて世に行はる、百子全書等にも之を收む。向の書は議論醇正、儒宗たるに愧ぢず、間、誤謬ありと雖も白璧の微瑕のみ、其の一節に曰く、

師經鼓琴、魏文侯起舞賦曰、使我言而無見遂、師經拔琴而擬文侯、不中、中旒、洪之、文侯謂左右曰、爲人臣而擬其君、其罪如何、左右曰、罪當烹、提師經下堂、一等、師經曰、臣可一言而死乎、文侯曰、可、師經曰、昔堯舜之爲君也、唯恐言而人不遂、桀紂之爲君也、唯恐言而人遂之、臣擬桀紂、非擬吾君也、文侯曰、釋之、是寡人之過也、懸琴於城門、以爲寡人符、不釋旒、以爲寡人戒、齊景公遊於海、聞晏子卒、公乘輿素服、驅而隕之、自以爲遲、下車而趨、知不若車之速、則又乘、比至於國、四下而趨、行哭而往、矣、至伏屍而號曰、子大夫日夜責寡人不遂、尺寸、寡人猶且淫泆而不收、怨罪重積於百姓、今天降禍於齊國、不加寡人、而加夫子、齊國之社稷危矣、百姓將誰告矣（說苑卷一君道）と、劉向の著作は皆な日常行爲の龜鑑に供

するの意に出てたれば敢て奇說を爲さず、醇醇反覆して自ら忠愛懇惻の微旨を表す、但、劉向が五行災異を言ふは往往信すべからざる者あり、

列女傳……劉向が詩書に載する所の賢妃貞婦の以て模範と爲すべき者及び孽嬖亂亡の以て警戒と爲すべき者を編輯したるものなり、凡て八篇、然れども列女傳の今行本は後人の竄入する所と爲り、惡く向の舊にあらず而して其の趣味も亦新序說苑に及はざると遠し。

七略……七略編輯の事は漢書藝文志の初に詳かなり、其要に曰く、成帝の時に及び秘府の書、頗る散佚せしかば、謁者陳農をして又た遺書を天下に求めしめ、光祿太夫劉向に詔して經傳諸子詩賦を校せしめ、又た步兵校尉任宏に兵書を、太夫令尹咸に數術を、侍醫李柱國に方技を校せしめたり、而して一書畢る每に、向輒ち其の編目を疏條し、其の指意を撮錄して之を奏せり、向卒するに及び、帝復た向の子歆に命して父の業を卒へしむ、歆是に於て其の七略を奏す、其の目は輯略・六藝略・諸子略・詩賦略・兵書略・術數略・方技略にして其の數は大凡三万三千九十卷に上れりといふ、蓋し圖書分類目錄の濫觴なり、唐の顏師古の注に云く輯略とは輯は集と同じ、諸書の

總要を謂ふなりと、宋の馬端臨曰、劉歆總群書著七略大凡三万三千九十卷、王莽之亂、焚燒無遺と、然れども班固が劉歆の七略に因て藝文志を爲りたれば、其の存する者蓋し六略にして輯略は復た考ふべからず、七略別錄あり、玉函山房輯佚書之を收む、蓋し七略は焚燒したれども諸書に引けるものを輯めて一書を爲せる者なり、七略の目は備はれども輯むる所は極めて少し、只片片十數葉あるのみ、尙ほ劉向には劉中壘集あり、歆には劉子駿集あり、並に漢魏六朝百三名家集に收む、劉中壘集には賦一篇、疏一篇、疏七篇、上書封事議對の屬五篇、頌一篇、銘二篇、序七篇及び洪範五行傳あり、洪範五行傳は向が王風等の專横を愛へて作れるものなり、尙書洪範に箕子の武王の爲めに五行陰陽休咎の應を陳ぶるを見て、向乃ち上古以來春秋列國を歷て秦漢に至るまでの符瑞災異の記を集め行事を推迹し、禍福を連傳し、其の占驗を著はし、比類相從ひ、各條目あり、凡て十一篇、之を奏す、帝心に向の忠精にして故らに王風兄弟の爲めに此論を起しゝを知りしも、遂に災を免かるゝと能はざりき、劉子駿集には賦三篇、書三篇、議三篇、序及論各一篇あり、雖力頗る勁健にして一句の浮詞なし、班固は贊して曰く、孔子より後ち綴文の士衆し、唯孟軻、孫況、董仲舒、司馬遷、劉向、揚雄

は皆な博物洽聞にして古今に通達して、其言は世に補あり。劉氏の洪範論は太傅を發明して天人の應を著はす、七略は讖文を剖判し百家の緒を綜ぶ、三統歷譜は日月五星の度に考歩し、其の之に推本するに意ありと、又た曰く、豈に直諒多聞、古の益友に非るかと、(漢書劉向傳)。劉向父子の著作は漢代文學に貢献する所少からずと雖も、斬新の思想あるとなし、訓詁的潮流は滔々として漢代の文海に瀰漫し、始んど全著作に浸潤するに至れり、特に韓嬰及び劉向父子の如きは其の尤なる者なり。

丙　詔勅、上書、書牘、

詔勅……詔勅の文とは天子より政令を下すに當りて其の命を傳ふる所以のものを云ふ、虞夏三代の頃には誥若しくは誓といふ、特に周には多くは命と稱せり、秦には命を改めて制と云ふ、漢に至りて命に策、制、詔勅の別あり、而して州郡を戒むるにには勅を以てし、百官に告ぐるには詔を以てし、赦命を施すには制を用ひ、王侯を封ずるには策を以てせり。其の文は莊嚴正大を貴ぶ、今之を前漢諸帝の作に見るに、高祖には入關告諭、爲義帝發喪告諸侯、求賢詔等あり。文帝の詔にして今に傳はれる者十有六篇、景帝には六篇、武帝には二十有餘篇、策賢良制、復策賢良制二篇、養老詔、

置博士弟子詔、賜齊王閎策、賜會稽太守書、罷屯輪臺詔等是れなり。其他昭帝、宣帝より、元、成、哀の諸帝皆な遺篇あり。(古文淵鑑卷十)又後漢に在りては光武の報隗囂手書、賜竇融璽書、明帝に祀明堂詔、巡寶鼎詔等あり、章帝より和、殤、安、順、桓諸帝皆な遺文あり。而して其の最も稱せらるゝ者は武帝の文なりとす。武帝深く意を文學に注き、每に三代を規模と爲せしかば、其の言頗る古雅なる者あり。

上書……臣下より君主に對して事を言ふの文なり、古來より上書と云ひしが、秦に至りて改めて奏といひ、漢に及びて更に分ちて章、表、奏、議の四目を立つ、而して其の事を奏するを、或は上疏とも稱し、或は封事とも稱す、封事は上疏を板に書して之を封鎖して以て進献するものをいふ、西漢に在りては賈山の至言、賈誼の論時政疏即ち治安策、鼂錯の上言兵事書、直農貴粟奏、枚乘の諫吳王書及び鄒陽の獄中上書、嚴安徐樂の上言世務書、司馬相如の諫獵疏、董仲舒の賢良對即ち天人の三策、淮南王安の諫誅閩越書、主父偃の諫伐匈奴書、東方朔の諫起上林苑書、路温舒の上尚德緩刑書、王吉の諫昌邑王疏、匡衡の政治得失疏、蕭望之の入殿贖罪議、劉向の極諫外家封事、谷永の諫陳湯疏、梅福の言王氏書等あり。東漢に在りては朱勃の追訟馬援書、班彪の

乞優答北匈奴奏、桓譚の上時政疏、第五倫の勸成風德疏、奬準の勸興儒學疏、翟酺の諫外戚疏、皇甫規の舉賢良方正對策、蔡邕の上靈帝封事、孔融の肉刑議、應劭の上漢儀疏等あり。而して賈誼の治安策、董仲舒の天人策は其の傑出せる者なりとす。尚ほ上書の作者は數多あれども多くは短篇にして稱するに足る者なし、

書牘……書牘にも亦種々の體ありて一樣ならず、然れども書は舒の義にして其の言を舒べ布きて之を簡牘に陳ぶるものなれば、亦敘事議論相雜はる者なり。前漢に在りては淮南厲王書、司馬遷の報任安書、楊惲の答孫會宗書、劉歆の責讓太常博士書、馬援の與楊廣書、後漢に在りては朱浮の與彭寵書、陳琳の爲袁紹與公孫瓚書等あり。就中司馬遷の報任安書は古今大書牘の祖と稱せられ、漢代第一の名文なり。漢書本傳に之を收む。其他小尺牘は固より枚舉に遑らず。(漢魏六朝百三名家集、古文淵鑑等を參照すべし)

以上に略述したる詔勅、上書、書牘は或は事理を辨ずる者あり、或は情狀を陳述する者あり、或は慰諭する者あり、或は責讓する者ありて、其の文體も敘事と議論を並用し、其の用筆の如きも、其の目的に應じて婉曲を貴ぶものもあり、或は直敘を貴ぶものありて一ならず、而して三種とも古來已に行はれたれども、漢代に及びて其の稍完全なるを致せるが如し。其の文例の如きは皆な省略に從ふ、世にも亦多く行はる、就て見るべし。

吾人は既に議論敘事の二體を述べたり、之に依りて漢代の思想を見る、固より難しとせず、但漢易に於て發したる思想は此に述ぶるの暇なしと雖も、概言すれば漢人の思想は周末諸子の如く深遠ならず、又彼等の如きの活氣なし、多くは淺薄固定にして創唱の材に乏しく刷新の氣象少し、敘事體の文は勿論古來の事蹟變遷を敘して鑑戒と爲すものなれば、斬新なる思想を望むべからざるも、彼の議論文に在りても殆んど稱すべきの卓見妙說なし、既に議論文に於て新想を見るを得ずとすれば、之を韻文に於て求むべきか、是又宇宙の秘奧を探り、千古の眞理を詠ずるの雄筆を望むべからざるに似たり、請ふ之を次節に徵せん。

第三節　韻文

甲　辭賦家

後漢班固賦を論じて曰く、春秋之後、周道寖壞、聘問歌詠不行於列國、學詩之士、逸在布

衣而賢人失志之賦作矣。大儒孫卿及楚臣屈原離讒憂國、皆作賦以風。咸有惻隱古詩之義。其後宋玉、唐勒、漢興枚乘、司馬相如下及揚子雲、皆爲侈麗閎衍之詞、沒其風諭之義、是以揚子悔之曰、詩人之賦麗以則、辭人之賦麗以淫、云々(藝文志)と、夫れ辭賦は騷の一變したる者にして、騷は又遠く詩より來れり、故に屈氏の騷は往々詩の六義を具へて之を出し、必しも六義の一たる賦に止まらざりき、所謂古義あるものなり、然れども漢代に至りては依然として屈氏の流を汲むと雖も、徒らに其名を襲て其の旨趣に遠く、單に賦の義を以て敷陳の意となし、侈麗閎衍、馳騁縱横、遂に以て淫麗なる一新派を開くに至れり。但、憂國の情を述ぶるを騷と名け別に存す、而も甚だ多からず、蓋し漢代の韻文は古詩樂府等あれども、未だ辭賦の如く旺盛ならず、故に漢代には辭賦家ありて詩家あるとなし、隨て辭賦の作も亦頗る多く詩篇の寥々たるが如くならず。

夫れ漢代の辭賦は先づ端を賈に開く、然れども未だ著作多からず、漢志錄かに其の三篇を錄す、賈誼に至りては賦七篇を稱す、弔屈、鵩鳥賦、嗣意抑鬱、倘ほ楚騷の古義あり、是に於てか辭賦稍興り、賈子已に升堂の稱あり。枚乘より以下武帝の世に盛出せし者、司馬相如、東方朔、枚皐、嚴助、吾丘壽王、莊忌夫子等あり、淮南王賦八十二篇、淮南王、群臣賦四十四篇、孔臧賦二十篇、其後ち劉向賦三十三篇あり、揚雄起て辭賦を喜び相如と並び稱せらる、兩漢辭賦の雄は相如を推し揚雄之に亞ぐ、後漢に至りて辭賦の作家倍、出で、班固に兩都賦有序、西都賦、東都賦等、張衡に西京賦、南都賦温泉賦等あり、崔駰馬融、蔡邕、李尤、王逸等亦辭賦遺篇あり、而して當時の家集大抵賦を以て卷首に冠く、啣か以て其の風尚を知るべし。抑も漢代の思想は多くは物質的に偏し、能く高遠なる神韻、幽玄たる眞理を得る者希なり、或は幾神に耽りては神僊の術に迷ひ、或は災異瑞祥を聞きて方士に詭かる、故に辭賦に見はるゝものも亦此等迷妄を脫する能はざるもの多し。然れども支那文學史上辭賦の最も旺盛なりしは漢代を推さゞるべからず、而して漢賦の影響は魏晉六朝の駢對文を起すに至れり。

第一　司馬相如　賈誼の賦

司馬相如初の名は大子、字は長卿、蜀郡成都の人なり。少時好みて書を讀み琴劍を學ぶ。相如七經を受くといふ、又た藺相如の人となりを慕ひて名を相如と更む。貲を納るゝを以て郎と爲り、孝景帝に事へて武騎常侍と爲る、蓋し其の好む所に非ざるな

り、會、景帝は辭賦を好まず、是時に梁の孝王來朝す、而して游說の士、齊人鄒陽、淮陰の枚乘、吳の莊忌夫子の徒を從ふ。相如は孝王を見て之を悅び、因て職を辭して梁に客遊す、梁の孝王は諸生と舍を同じくせしむ、相如は諸生遊士と居るを得ること數歲、此間相如の學大に進む、乃ち子虛賦を著はす、孝王卒するに會ひ、諸士散じ、相如も亦家に歸る、貧にして以て自ら樂とするなし、相如素より臨邛令、王吉と相善し、吉招て曰く、長卿久しく官遊して其の志を遂げず、來て我に過ぎれと、相如往きて都亭に舍す、吉詭て恭敬の狀を爲し、以て人目を悲く、臨邛の地富人多し、而して卓王孫の家最も著はる、令に貴客ありと聞き、具を設けて令と客とを召す、令既に至る、卓氏の客百を以て數ふ、日中に至る　司馬長卿來たる來らず、病みて往く能はずと辭す、臨邛の令敢て食を嘗めず、自ら往きて相如を迎ふ、相如已むを得ず强ひて往く、一坐盡く傾く、酒酣にして臨邛の令前みて琴を奏して曰く、竊に聞く長卿之を好むと、願くは以て自ら娛めと、相如爲めに鼓する一再行、是時卓王孫の女、文君といふ者あり、新に寡居して音を好む、故に相如琴心を以て之を挑む、相如の臨邛に行くや車騎を從へ、雍容閒雅甚だ都やかなり、卓氏に伏み琴を弄するに及て、文君竊に戶より之を窺ひ、心悅び

て之を好し、又た其の當るを得ざるを恐る、宴既に罷し、相如人をして重く文君の侍者に賜うて慇懃を通ぜしむ、文君夜亡げて相如に奔る、相如乃ち與に馳せて成都に歸る、家居貧窮四壁立つのみ、卓王孫大に怒りて之と絕ち、一錢を分たず、之を久しうして文君樂まず、相如に勸めて相俱に臨邛に行き、盡く其の車騎を賣りて一酒舍を買ひ、酒を賣り、文君をして鑪に當らしめ、相如は犢鼻褌を著けて器を市中に滌ふ、卓王孫聞きて之を恥ぢ、門を杜ぢて出でず、昆弟諸父更王孫に謂つて曰く、一男兩女あり、足らざる所の者は財に非ず、今文君は已に身を司馬長卿に失す、長卿故游宦に倦み、貧なりと雖も、其の人材は依るに足れり、且つ令の客なり、獨り奈何ぞ相辱むる此の如くなると、卓王孫は已むを得ずして文君に僮百人、錢百萬及び其の嫁時の衣被財物を與ふ、文君乃ち相如と成都に歸り、田宅を買ひ富人と爲る、居ること久しくして獨人楊得意といふ者狗監と爲りて武帝に侍へる。帝は子虛賦を讀み、之を善しとして曰く、朕此人と時を同じくするを得ざるかなと、得意曰く、臣の邑人司馬相如自ら此賦を爲るといふと、帝驚き召して相如に問ふ、相如曰く是れありき、然れども此乃ち諸侯の事未だ觀るに足らず、願ふ天子游獵の賦を爲りて之を奏せんと、帝乃ち尙

書をして絳札を給せしむ、相如乃ち子虛、烏有、亡是の三人を設けて問難の辭を作る、其の子虛といふは虛言の義にして楚の美を稱說す、烏有先生とは烏有此事也の義にして、齊の爲めに楚の事を難詰す、無是公は無是人也の義にして、天子の義を明かにし、以て折中の談と爲すなり。此の三人を藉りて縱橫の辭を爲し、以て天子諸侯の苑囿を推論す、而して其の卒章に於て之を節儉の旨に歸し、因て以て風諫す。之を天子に奏す、天子大に說び、拜して郎と爲す、其後ち數歲にして會唐蒙使して略西南夷に通し巴蜀の吏卒千人を發す、郡又爲めに轉漕万餘人を發す、軍興法を用ひ、其の渠帥を誅す、巴蜀の民大に驚恐す、上之を聞き、相如をして唐蒙を責めしむ、因て巴蜀の民に喩告するに上意に非るを以てす、後ち人の上書して相如使する時に金を受けしと言ふ者ありたれば、官を失ひて家居する歲餘にして復た召して郎と爲る、相如口吃す、而して善く書を著はす、常に消渴の疾あり、卓氏と婚せしより財に饒なり、其の進みて仕官するにも未嘗て公卿と國家の事に與かるを肯んせず、病と稱して閒居し、官爵を慕はず、常に帝に從て長楊宮に至て獵す、是時に武帝方さに好みて自ら熊羆を搏ち野獸を馳逐す、相如上疏し之を諫む、其文も亦本傳に收む。帝は相如の疏

を見て之を善とす、遂て宜春宮に過ぎり、因て秦二世の陵を見る、相如賦を奏して以て二世の行失するを哀みき。後又た大人賦を爲くる、共に本傳に在り、相如既に大人の頌を奏す、帝大に悅び謂へらく飄飄として凌雲の氣あり、天地の間に游ぶの意に似たりと。相如既にして病みて免じ、茂陵に家居す、天子曰く、司馬相如病甚し、往て從て悉く其書を取るべし、然らずんば後ち散佚せんと、使至るとき、相如已に死し家に書なし、其の妻文君に問ふ、對へて曰く、長卿固より未嘗て書あらず、時時書を著はすも人又取り去る、唯長卿未だ死せざる時に一卷の書を爲りて曰く、使者來て書を求むるあらば之を奏せよと、乃ち其遺札の書を奏す、書中具さに封禪の事を言ふ、且つ附するに頌を以てせり。共に本傳に在り、尙ほ相如著はす所遺平陵侯蘇建書、與五公子相難章木書篇等あり、相如には司馬文園集あり

相如の操行　……相如人品の汚劣なるは掩ふべからざる事實なり、相如は七經を受けたりと傳ふれば、經術の素養なしと云ふべからず、又た其の著作を見るも學識の豐贍なりしは疑ふべきなし、然り而して品性の劣なる、操行の汚下なる、殆んと道德の念なき者に似たり、所謂風流才子若くは遊冶郎の行動に外ならず、當時辭

書をして鞭札を給せしむ、相如乃ち子虛、烏有、亡是の三人を設けて問難の辭を作る、其の子虛といふは虛言の義にして楚の美を稱說す、烏有先生とは烏有此事也の義にして、齊の爲めに楚の事を難詰す、無是公は無是人也の義にして、天子の義を明かにし、以て折中の談と爲すなり。此の三人を藉りて縱橫の辭を爲し、以て天子諸侯の苑囿を推論す、而して其の卒章に於て之を節儉の旨に歸し、因て以て風諫す。之を天子に奏す、天子大に說び、拜して郎と爲す、其後ち數歲にして會唐蒙使して略西南夷に通し巴蜀の吏卒千人を發す、郡又爲めに轉漕万餘人を發す、軍興法を用ひ、其の渠帥を誅す、巴蜀の民大に驚恐す、上之を聞き、相如をして唐蒙を責めしむ、因て巴蜀の民に喩告するに上意に非るを以てす、後ち人の上書して相如使する時に金を受けしと言ふ者ありたれば、官を失ひて家居する歲餘にして復た召して郎と爲る、相如口吃す、而して善く書を著はす、常に消渴の疾あり、卓氏と婚せしより貧に饒なり、其の進みて仕官するにも未嘗て公卿と國家の事に與かるを肯んせず、病と稱して閒居し、官爵を慕はず、常に帝に從て長楊宮に至て獵す、是時に武帝方さに好みて自ら熊彪を搏ち野獸を馳逐す、相如上疏し之を諫む、其文も亦本傳に收む。帝は相如の疏

を見て之を善とす、遲て宜春宮に過ぎり、因て秦二世の陵を見る、相如賦を奏して以て二世の行失するを哀みき。後又た大人賦を爲くる、共に本傳に在り、相如既に大人の頌を奏す、帝大に悅び謂へらく飄飄として凌雲の氣あり、天地の間に游ぶの意に似たりと。相如既にして病みて免じ、茂陵に家居す、天子曰く、司馬相如病甚し、往て從て悉く其書を取るべし、然らずんば後ち散佚せんと、使至るとき、相如已に死し家に書なし、其の妻文君に問ふ、對へて曰く、長卿固より未嘗て書あらず、時時書を著はすも人又取り去る、唯長卿未だ死せざる時に一卷の書を爲りて曰く、使者來て書を求むるあらば之を奏せよと、乃ち其遺札の書を奏す、書中具さに封禪の事を言ふ、且つ附するに頌を以てせり。共に本傳に在り、尙ほ相如著はす所遺平陵侯蘇建書、與五公子相難草木書篇等あり。相如には司馬文園集あり

相如の操行

……相如人品の汚劣なるは掩ふべからざる事實なり、相如は七經を受けたりと傳ふれば、經術の素養なしと云ふべからず、又た其の著作を見るも學識の豐裕なりしは疑ふべきなし、然り而して品性の劣なる、操行の汚下なる、殆んと道德の念なき者に似たり、所謂風流才子若くは遊冶郎の行動に外ならず、當時辭

賦を以て優遇せられたる者は多くは俳優者流に類せざるはなし、蓋し詞章の末技に汲汲として道德の根柢を成すに及ばざりしならん、相如が翠心を以て文君を挑み、又た恬然として酤酒の業に從ひしが如きは破廉耻も亦甚しと謂ふべし、或は言ふ、史記漢書の司馬相如傳は相如の自筆なり(史通)と、若し自筆にして部事を述ぶる彼が如くならば、倍、其の陋劣を見るべし。

子虛上林賦

……長卿の名は子虛上林の二賦に於て最も著はる、二賦は畋獵に關するものなり、西京雜記に云く、相如爲上林子虛賦、意思蕭散、不復與外事相關、控引天地、錯綜古今、忽然如睡、煥然而興、幾百日而後成、と、明の王世貞曰、子虛上林、材極富、辭極麗、而運筆極古雅、精神極流動、意極高、所以不可及也、長沙有其意而無其材、班張潘有其材而無其筆、子雲有其筆而不得其精神流動處、又曰、子虛諸賦、本從高唐、物色諸體、而辭勝之、又曰、扁氏之驟、驟之聖者也、長卿之賦、賦之聖者也、一以風、一以頌、遒體極玄、蘇轍曰、觀上林賦、如觀君子佩玉冠冕、還揖讓吐音皆中規矩、終日威儀無不可觀、と、子虛上林は元と一篇なり、初め相如梁に遊べるとき、子虛賦を著はして武帝の善しとする所と爲り、此に天子遊獵の賦を著はし復た子虛等三人の詞を借り以て天子の義を明かす、故に子虛賦と名く、賦中に上林を敘す、故に又上林賦と名く、文選には載て二篇と爲す、子虛上林賦の一節に曰く、雲夢者方九百里、其中有山焉、其山則盤紆鬱茂、隆崇崒嵂、岑崟參差、日月蔽虧、交錯糾紛、上干青雲、罷池陂陁、下屬江河、其土則丹青赭堊、雌黃白坿、錫碧金銀、衆色炫燿、昭爛龍鱗、其石則赤玉玫瑰、琳瑯琨珸、瑊玏玄厲、礫石武夫、其東則有蒜衡圃蘭、芷若射干、穹窮昌蒲、江離麋蕪、諸薑且、其南則有平原廣澤、登降陁靡、案衍壇曼、緣以大江、限以巫山、其高燥則生藏莆荔、其卑溼則生藏茛蕹葭菥東墻雕胡、蓮藕菰蘆、菴閭軒芋、衆物居之不可勝圖、其西則有湧泉清池、激水推移、外發芙蓉菱華、內隱鉅石白沙、其中則有神龜蛟鼉、瑇瑁鼈魚、其北則有陰林巨樹、楩柟豫章、桂椒木蘭、薜離朱楊、樝梨橘柚、芬芳其上、則有赤猿蜚蠝、其下則有白虎玄豹、蟺蜒貙豻、兕象野犀、窮奇獨狻、と、是れ僅かに雲夢を形容するの一斑のみ、其の才藻の絢爛たる、實に目を奪ふの概あり、蓋し賦の聖なるものなり。

大人賦

……明の康海曰く、司馬長卿大人賦全用扁平遊遊中語、と、相如は帝の仙道を好むを見て大人の賦を作る、西京雜記に云ふ、相如將に賦を献ぜんとす、未だ爲くる所を知らず、一黃衣の翁を夢む、之に謂つて曰く、大人の賦を爲くるべしと、遂に

大人の賦を作り、神仙の事を言ひ、之を獻ず、錦繡四を賜ふと、武帝大人の頌を見て大に悅びて曰く、飄飄有凌雲之氣、似遊天地之間意、と、屈氏が遠遊の篇は超然として古の眞人の跡を聚ひ、上下四方に輕舉し、以て自ら其の樂を遂げんと欲したるなり、今長卿の作賦は徒らに帝の意に過うて名利を博せんと欲するのみ、固より同日の論に非ず。

美人賦長門賦は戀情に關するの作なり、長門賦は陳皇后に代りて作れるものなり、美人の賦は宋玉の好色賦より脫化し來れり、哀二世賦は相如が宣春宮に過ぎて二世の陵を見て其の離穢を悲み、又以て當世を諷せしんと欲せしなり、其の作孺落悲慨を極む、

以上に言へる諸賦は相如が最も得意の作と爲す所なり、子虛上林等の如きは麗辭瑰詭、千狀万態、美妙盡さざるなし、然れば吹獵の害を言はんと欲して、却て其の盛況を敷演夸張し、人をして自ら勃然遊意を發せしむる者あり、故に揚雄曰く、靡麗之賦、勸百風一、猶馳騁郊衢之聲、曲終而奏雅、と、實に適評と謂ふべし、然れども相如が作賦の旨趣は皆な諷諭に在れば、子虛上林賦の如きも終局は吹獵の太だ奢侈にして賢

君の爲さゝる所といひ、武帝の終日馳騁して神を勞し形を苦しめ、車馬の用を罷らし、士卒の精を靡し、府庫の財を費すを諷せし者なれば、司馬遷は相如雖多虛辭濫說、然其要歸引之節儉、と云へり。

相如の文

……相如の文は喩巴蜀檄、通西南夷篇問、(難蜀父老文)諫獵書、封禪書(文或頌といふ)等あり、然れども相如の文は其の賦の如く巧妙ならず、明の王世貞曰く、長卿以賦爲文、故難蜀封禪書、緜麗而少骨、賈、傅以文爲賦、故吊屈、鵩鳥賦直而少致、と、明の余有丁は作賦侈靡、而作檄明切渾厚、此其爲相如之文也、と評したれども、相如の作を總評するは王世貞の言の中れるに如かず、因みに云ふ、卓文君も亦文才ありて遺篇存せり。

附記……賈誼も弔屈原賦、鵩鳥賦等あれども、所謂文を以て賦を作れる者にして、司馬相如の賦に比す可らず、賈誼の文學等は已に第一節議論體の文の條に述べぬ、其の作は史記の賈誼本傳及び賈長沙集に就きて見るべし、漢書藝文志に賈誼賦七篇、相如賦二十九篇、と云ふ、又た揚雄は二子の賦を評して如孔氏之門用賦也則賈誼升堂、相如入室矣(揚子法言吾子篇)と云へり、以て其賦家としての造詣の程度を知

るべし。

第二　枚乘　枚皐

枚乘字は叔、淮陰の人なり。吳王濞の郎中と爲る、吳王の初め怨望して謀つて逆を爲しゝとき、乘は書を奏して諫む。上書は漢書本傳に在り。吳王は乘の策を用ひず、卒に禽滅せらる、漢既にして吳楚七國の亂を平ぐ、乘は是に由て名を知らる、景帝召して乘を拜して弘農の都尉と爲す、乘は久しく富强なる吳國の上賓と爲り、英俊と遊びて其の好む所を得たれば、郡吏たるを樂まず、病を以て官を去り、復た梁孝王に遊ぶ。梁の客は皆善く辭賦を屬し、乘最も高し、孝王薨じ、乘は淮陰に歸る。武帝は太子たりしより乘の名を聞く、位に即くに及て乘年老いたり、迺ち安車蒲輪を以て乘を徵したれども道にして死せり。詔して乘の子に能く文を爲る者無きかを問ふ、後ち其の孽子皐を得たり。

枚皐……皐字は少孺、枚乘が梁に在りし時に皐の母を取て小妻と爲し、乘が東に歸りしとき、皐の母は胥て乘に隨はず、乘怒りて皐に數千の錢を分ち、留て母と居らしむ、時に年十七、皐は書を梁の共王に上り、召されて郎と爲るを得、三年に王使と爲

りて從者と爭ふ、辱せられて罪に遇ひ、家室沒入せらる。皐亡げて長安に至り、赦に會ひて書を北闕に上りて、自ら枚乘の子と陳す。武帝之を得て大に喜び、召し見て待詔せり、皐因りて殿中を賦せんとす、詔して平樂館を賦せしむ、押せられて郎と爲り、飼奴に使す。

皐は經術に通ぜず、詼笑して俳倡に類す、頌賦を爲り、好みて慢戲す、故を以て媟嬻貴幸せらるを得たり、東方朔、郭舍人等に比し、而して嚴助等に比して尊官を得る能はざりき、武帝は年二十九にして皇子を得、群臣喜ぶ、故に皐は東方朔と皇太子生賦と立皇子祺祝を作る、詔を受けて爲る所は皆な故事に從はず皇子を重ぜり。衞皇后立つとき皐は賦を奏して以て終を戒む、皐の賦を爲るは朔より善し、帝に從ひて甘泉雍河東に至る東に巡狩して泰山を封じ、決河宣房を塞ぎ、三輔の離宮館に游觀し、山澤に臨みて、七獵射馭狗馬、蹴鞠、刻鏤に至るまで、帝感ずる所あれば、輒ち之を賦せしむ、皐は賦を爲くること疾し、詔を受けて輒く成る、故に賦する所の者多し、司馬相如は善く賦を爲くれども遲し、故に作る所少くして而も皐より善し。皐の賦辭中にも「爲賦不如相如」と云へり。皐の鉾屈山悉に其事に隨ひ、皆な其意を得、凡そ賦むべき者百

二十篇、其の尤も媟戲にして觀むべからざる者尚ほ數十篇(漢書本傳)と。然れども今猶ほ文苑讃書に存するもの數篇に過ぎず。漢書藝文志に云ふ、枚臯賦百二十篇、司馬相如賦二十九篇と、其の篇數を以てすれば相如は臯の四分の一にたも及はず、而して其の巧拙に至りては固より同日の論にあらず。今に於て之を言へば拙速は巧遲に如かざるなり。枚乘は梁孝王の當時に在りては能く之に及ぶ者なかりき。相如と雖も、此日に於ては未だ企及すべからざりしなり。漢志に枚乘賦九篇と稱すれども人之を稱せず、枚乘の名は諫吳王書に依りて高し(文選、漢魏六朝百三名家集、古文淵鑑等)。

第三 東方朔

嚴助、吾丘壽王、王褒、
揚雄、杜篤、班固、

東方朔字は曼倩、齊の人なり、武帝天下に詔して賢良方正文學の士を舉げ、待つに不次の位を以てす、因て四方多く上書して得失を言ふ、朔初て長安に來り上書して曰く、臣朔少失父母、長養兄嫂、年十二學書三冬文史足用、十五學擊劍、十六學詩書、誦二十二万言、十九學孫吳兵法、戰陣之具、鉦鼓之教、亦誦二十二万言、凡臣朔固已誦四十四万言、又常服子路之言、臣朔年二十二長九尺三寸、目若懸珠、齒若編貝、勇若孟賁、捷如慶忌、廉若鮑叔、信若尾生、若此可以爲天子大臣矣、臣朔昧死再拜以聞、と。其の滑稽的性行具さに文辭に見はる、朔も亦枚臯等と同じく俳優として宮殿の中に愛幸せらる、然ども朔の本領は却て圓轉滑脫以て其身を全うせんと欲するに在り、朔嘗て曰く、如朔等所謂避世於朝廷間者也、古之人乃避世於深山中、又嘗て歌て曰く、陸沈於俗、避世金馬門、宮殿中可以避世全身、何必深山之中、蒿廬之下と、金馬門は宦署の門なり、朔は諧謔を事とすと雖も、亦時に顏色を觀て直言切諫す、故に武帝嘗て東方朔多善言と稱せるとあり、朔常に大官を得んとを欲し、遂に論を著はし客難を設けて以て自ら已の位の卑きを慰諭す、又た非有先生論を著はす、班固曰く、朔の文辭、此二篇最も善しと、漢魏六朝百三名家集に東方大中集在り、嘯に七諫あり、疏に諫起上林苑疏、應詔上書あり、書に與公孫弘書、從公孫弘借車書、與友人書あり、序に十州記序あり、論に非有先生論あり、設難に答客難、答賓戲あり、倘は臯頌、銘、詩あり、以て其の文學の材を窺ふべし。

武帝の代に文辭を以て親近せらし者は司馬相如、枚臯、東方朔、嚴助、吾丘壽王等あり、

嚴助……嚴助は會稽吳人なり、嚴忌の子、武帝の時其郡對策百餘人、助は獨擢で

られて中太夫と爲る、助屢、大臣と事を論辨し之を屈するとありき、助、と共に親幸せられし者多かりしも、唯助と嚴王とは深く任用せられ、助最も先づ顯達す、後ち嚴王會稽大守と爲り、復入りて左右に侍ず、奇異なれば輙ち文を爲り、又た賦頌數十篇を作ると、藝文志には嚴助賦三十五篇といふ、蓋し總作數ならん、然れども今傳はらず、

吾丘壽王……吾丘壽王字は子贛、趙人なり、詔を受けて董仲舒に從ひて春秋を承く、高材通達なり、侍中中郎と爲る、後ち東郡都尉と爲る、復た入りて光祿太夫侍中と爲る、時に盜賊縱横し、屢、治平の策を論ず、又武帝の前に於て直言高談して帝の意を動せしものあり、漢志に云ふ、吾丘壽王賦十五篇と、然れども賦は今傳はらず、其の文は古文淵鑑等に在り、但嚴助、吾丘壽王は最も親幸せられたれども後ち皆な事に坐して誅せらる、惟ふに保身の德を缺きしならん。

王褒……王褒字は子淵、蜀人なり、宣帝の時益州刺史王襄は褒秩材ありと奏す、帝廼ち褒を徵し、聖王得賢臣頌を爲らしむ、其の頌は收めて漢書本傳に在り、是時武帝頗る神僊を好む、故に褒の言之に及べり、帝は褒と張子僑等とを從へて放獵し臨

幸する所の宮館には輙ち歌頌を爲る、議者多く以て淫靡にして急ならずと爲す、帝曰く、辭賦大者與古詩同義、小者辯麗可喜と、又曰く、辭賦比之倘有仁義風諭云云と、褒を擢でゝ諫大夫と爲す其、後太子の體安からず、忽忽善忘不樂なるに苦む、詔して褒等をして皆な太子宮に行きて太子に侍せしむ、朝夕に奇文を誦讀せしむ、自ら作るに及びて其疾平復し廼ち歸る、太子褒が爲くる所の甘泉及び洞簫頌を喜び、後宮貴人左右をして皆之を誦讀せしむ、後ち褒益州に使し、道に於て病死す、漢志に王褒十六篇とあり、又た四子講德論は文選に收む。

賦家としての揚雄……揚雄の事蹟は已に之を述べぬ、今賦家としての雄を見んとす、雄嘗て辭賦を好む、是より先き司馬相如賦を作りて靡麗典雅なり、雄は心に之を壯とし、常に之を標式として賦を作れり、又た屈原の文は相如に過ぎ世に容られずして離騷を作くり自ら江に投じて死せしを怪み、其の文を悲みて之を讀み、未だ嘗て流涕せずんばあらず、以爲へらく、君子時を得ば則ち大に行ひ、時を得ずんば則ち蟄して身を存す、遇不遇は命なり、何ぞ必しも身を湛めんやと、廼ち書を作り、往々にして離騷の文を摭りて之に反し、暗山より之を江流に投じ以て屈原を弔

す、名けて反離騷といふ、又た離騷に旁ひ亜一篇を作り、名けて廣騷といふ、又た惜誦以下懐沙に至るまでに、旁ひ一篇を作り、名けて畔牢愁といふ、其の甘泉、河東賦、羽獵賦、長楊賦等皆な世に師せらる、故に後世、賦を言ふ者は司馬相如、揚雄を並稱す、漢志に云ふ、揚雄賦十二篇と、其の篇數多からざれども頗る精巧を極む。

杜篤……杜篤字は季雅、少より博學、小節を修めず、美陽に居り、美陽令と遊び、事を以て相恨み、令遂に篤を收めて京師に送れり、時に大司馬吳漢の黨に會ひ、光武諸儒に詔して之が誅を作らしむ、篤は獄中に於て誅を爲り、其の辭最も高し、帝之を美とし帛を賜ひ刑を免せり、篤曾て以爲へらく、關中は山河を表裏して先帝の舊京なり、宜しく改めて洛邑を營むべからずと、乃ち論都賦を作りて之を奏せり、問答を以て文を行るは猶ほ子虛上林の如きも氣骨及ばず、延初三年車騎將軍馬方の西羌を擊ちしとき、篤を請ひて從事中郎と爲し、篤射姑山に於て戰沒せり、其の著はし所の賦誄弔書讃七言、女誡、及び雜文凡て十八篇、又た明世論十五篇を著はせり。今多く見ず、論都賦は最も精を竭し、所、文字奇麗、錯落、辭句長短參差、往往にして秀句あり、

班固……後漢の班固の賦は班蘭臺集に在り、三都賦、幽通賦、最も世に師せらる、又終南山賦、覽海賦、遊居賦、竹扇賦あり。東都賦の末に曰く、主人曰、復位今將授子五篇之詩、賓既卒業乃稱曰、美哉乎斯詩、義正乎揚雄、事實乎相如、匪唯主人之好學、蓋乃遭遇乎斯時、小子狂簡、不知所裁、既聞正道、請終身而誦之、其詩曰、……明堂詩

於昭明堂、明堂孔陽、聖皇宗祀、穆穆煌煌、上帝宴饗、五位時序、雝雝其配之、世祖光武、普天率土、各以其職、猗歟緝熙、允懷多福、

辟雍、靈臺、寶鼎、白雉の四詩亦前二は四言より成り、後二は七言より成る、文選にも載せ餘す。

第四　張衡

後漢の張衡字は平子、南陽西鄂の人なり、少くして善く文を屬し、三輔に遊び、因て京師に入りて太學を觀る。遂に五經に通じ、六藝を貫けり、才は世に高しと雖も而も驕倘の情なし、常に從容淡靜にして俗人と交接するを好まず、時に天下承平なること久し、王侯より以下諭侈せざるなし、衡乃ち班固の兩都賦に擬して二京賦を作り、因て以て諷諫せんとし、精思十年にして乃ち成る。衡は機巧に善し、光も思を天文陰陽

歷算に致し、常に揚子太玄經を好む、安帝召して太史令と爲す、遂に陰陽を研覈して、妙に璇機の正を盡し、渾天儀を作りて靈憲算罔論を著はせり。永和四年卒す、年六十二、著はす所周官訓詁あり、又詩賦銘七言、靈憲應間、七辯、巡誥、應閒凡て三十二篇、賦は西京賦南都賦、過天大象賦、溫泉賦、羽獵賦、思玄賦、歸田賦、定情賦、髑髏賦等あり。今其の短きを擇びて一賦を示さん、

張衡

溫泉賦

陽春之月、百草萋萋、余在遠行、顧望有懷、遂適驪山、觀溫泉浴神井、風中巒壯厥類之獨美、思在化之所原、感洪澤之普施、乃爲賦云、

覽中域之珍怪兮、無斯水之神靈、控湯谷於瀛洲兮、蔭高山之北麓、處幽屏以間清、於是殊方咸涉、駿奔來臻、士女雜沓、紛雜遝其如烟、亂曰、天地之德、莫若生兮、帝育蒸民、懿厥成兮、六氣淫錯、有疾癘兮、溫泉汩焉以流、濯兮除、苛慝服中正兮、熙哉帝載、保性命兮、

張衡の作は張河間集(漢魏六朝百三名家集)に在り。文選にも亦之れを收む。張衡は蓋し揚雄の流なり、其の二京の賦は班固に卓越せんとするの意ありて更に繁衍なりとす、琢磨鍛鍊十歲を經、巧を極め新を求めたれども、變化却つて班に及ばず、然れども衡の人品頗る稱すべく、著作又觀るべし、故に往往班張を幷稱す、亦偶然ならざるなり。張衡は亦修史に功なしとせず、張河間集に傳はるもの、詩三篇、賦十三篇、銘一篇、誄一篇、應閒、七辯、結一篇、疏五篇、表三篇、書六篇等あり。

第五　李尤

後漢の李尤字は伯仁、廣漢雒の人なり、少より文章を以て顯はる、和帝の時に侍中賈逵は尤を薦めて司馬相如揚雄の風ありといふ、召されて東觀に詣り詔を受けて賦を作り、蘭臺令史に拜す、安帝の時に諫議大夫と爲る、詔を受けて劉珍等と俱に漢記を撰す、後ち帝は太子を廢す、尤は上書して諫爭す、順帝立ちて樂安の相に遷り、年八十三にして卒す、尤の賦は五篇、函谷關賦、平樂觀賦、東觀賦、德陽殿賦、辟雍賦あり。後漢書本傳に云ふ、著はす所、詩賦銘誄頌七歌哀典凡て二十八篇と、銘は八十五首あり、李蘭臺集あり、漢魏六朝百三名家集に收む。然れども、尤は到底第二流の作家たるを免かれず。

第六　崔駰子援、孫寔傳毅

崔駰……崔駰字は亭伯、涿郡安平の人なり、博學にして偉才あり、盡く古今訓詁百家

の首に通じ、善く文を屬す、少より大學に遊び、班固傅毅と名を齊しくす、常に典籍を以て業と爲し、時人或は其の玄靜を譏る、駰は揚雄の解嘲に擬して達旨を作りて以て答へぬ、蔡宗嘗て侍中竇憲に謂て曰く、卿能く崔駰を知るか、對曰、班固數〻爲臣說之、然未見也、帝の曰く公愛班固而忽崔駰、此葉公之好龍也と、後ち駰は竇憲に擢でられて掾と爲り、屢〻其の專橫を諫む、永元四年家に卒す、著はす所の詩賦、銘、頌、書記、表、七依、婚禮結言、達旨、酒箴等合て二十一篇、百三名家集に崔亭伯集あり。

崔駰

婚禮結言

乾坤其德、恒久不已、爰定天綱、夫婦作始、乃降英媛、有淑其儀、姬姜是伴、比則姚嬀、載納嘉贄、申結雙裙。

酒箴

豐侯沉酒、荷罌負缶、自戮於世、圖形戒後。

崔瑗

崔瑗……字は子玉、學を好み、能く父駰の業を繼ぎ、茂才に舉げられ、汲の令と爲り、濟北の相と爲る、其の座右銘文選に載す。

座右銘

無道、人之知、無說、己之長、施人慎勿念、受施慎勿忘、世譽不足聽、唯仁爲紀綱、隱心而後動、毋譏庸何傷、無使名過實、守愚聖所臧、在涅其不淄、曖〻內含光、柔弱生之徒、老氏誡剛彊、行行鄙夫志、悠悠故難量、慎言節飲食、知足勝不祥、行之苟有慎、久久自芬芳、

と、瑗の子寔字は子眞は政體に洞通し、政論を著はす、議論適切なり、著はす所は碑、論、箴、銘、答、七言、詞、文、表、記、書、凡て十五篇ありといふ、

傅毅……傅毅字は武仲、扶風茂陵の人なり、少より博學なり、嘗て班志詩を作る、時に明帝賢を求めて篤からず、士多くは隱處す、是に於て七激を作りて以て諷を爲す、章帝毅を以て蘭臺令史となし郎中に拜す、班固賈逵と共に校書を典る、毅は明帝を追羨す、功德最も盛にして廟頌又立たざるを惜み、迺ち周頌の清廟に依り、顯宗頌十篇を作り之を奏す、是より文雅朝廷に顯はる、班固、崔駰と共に大將軍竇憲の府に在り共に文名一時に高し、毅の著はす所、詩、賦、誄、頌、程文、七激、連珠ありしと云ふ、毅の文雅健なれども班固に及ばざるに似たり、蓋し傅は班崔の間に在り、

第七　蔡邕　碑銘の鼻祖

後漢の蔡邕字は伯喈、陳留圉の人なり、其の父祖皆な清白の行あり、邕は天性篤孝な

り、母の病に侍べり、寒暑節變にあらざれば、未だ嘗て襟帶を解かず、寢寐せざりしも
の七旬に及べりといふ、又叔父從弟と同居し、三世財を分たず、鄉黨其の義を高しと
す、少より博學なり、太傅胡廣に師事して辭章數術天文を好み、妙に音律を操る。閒居
して古を翫び當世と交らず、東方朔の客難及び揚雄、班固、崔駰の徒の疑問を設けて
自ら通ずるに感じ、乃ち群言を斟酌して其の是を是とし、而して其の非を矯めて釋
誨を作り以て戒勵す、後ち延寧三年、司徒楊玄の府に辟さる、玄甚だ之を敬待す、出で
て河平の長に補せられ、召されて郎中に拜せられ、書を東觀に校す、議郎に遷る。邕以
爲へらく、經籍誤を去る久遠にして文字誤謬多し、俗儒穿鑿して後學を疑誤すと、嘉
平四年乃ち諸儒と奏して六經の文字を正定せんことを求む。靈帝之を許す、邕乃ち
自ら正定の文碑に書し工をして鐫刻せしめ大學門外に立つ、是に於て後儒咸な正
を取る、碑始て立つのとき摹寫し或は觀視する者甚だ多かりき。邕前きに東觀に在
りて、盧植韓說等と後漢記を撰補す會、事に遭ひ流離し、完成を得るに及ばず、因て上
書して自ら其の著はす所の十意を陳奏す、十意とは猶ほ前漢書の十書の如し。中永
六年靈帝崩じ、董卓は司空と爲る、邕の高名を聞きて之を辟す、後ち中郎將に拜し其

の才を重んず、讌會ある毎に輙ち邕をして琴を鼓し事を賛けしむ、董卓誅せらるゝに
及び、邕之れを悲歎す、司徒王允之を見て勃然叱して曰く、董卓は國の大賊なり、幾ど
漢室を傾けんとす、今や宜しく恐るべき所なるに其の私遇を懷ひ以て大節を忘る、
天有罪を誅す、而も反て相傷痛す、豈共に逆を爲さゝらんやと、乃ち收へて廷尉に付
し、罪を治めしむ、邕辭を陳し謝を乞ひ頓首�completeして漢史を續成せんと、士大夫多く
稱て之を救ふも得る能はず、大尉馬日磾馳せ往て允に謂て曰く、伯喈は曠世の逸才
にして多く漢の事を識れり、當に後史を續成して一代の大典を爲すべし、且つ彼の忠
孝は素より著はる、而して坐する所は名なし、之を誅せば乃ち人望を失ふなからんや、允
曰く、昔時武帝は司馬遷を殺さずして謗書を作りて後世に流れしめたり、方今國祚
中ごろ衰へて、神器固からず、佞臣鉞を執て幼主の左右に在り、既に聖德なし、彼た吾
黨をして其の謗を蒙らしむと、日磾退きて人に告げて曰く、王公は其れ長世ならざ
らんか、善人は國の紀なり、製作は國の典なり、紀を滅し典を廢つ、其れ能く久しから
んやと。邕は遂に獄中に死せり、時に年六十一、搢紳諸儒流涕せざるなし、北海の鄭玄
聞いて歎じて曰く、漢世の事誰と共にか之を正さんと、袁州陳留の閒皆な像を畫き

て頌す。其の漢事を撰集する、未だ餘して以て後史を繼ぐを見ず、適〻靈紀及び十意を作り、又た諸列傳四十二篇を補ふ、而も李傕の亂に因りて湮沒して多くは存せず、著はす所は、詩、賦、誄、銘、讚、連珠、箴、弔、論、議、獨斷、勸學、釋誨、叙樂、女訓、箋勢、祝文、章表、書、記、凡そ百四篇、（後漢書本傳）と。今存するもの詩四篇、賦十八篇、疏四篇、表十篇、書七篇、論五篇、議六篇、對問二篇、設論二篇、連珠一篇、頌九篇、贊三篇、箴一篇、銘十篇、碑三十五篇、靈表二篇、誄、神誥、哀讚各一篇、祝辭五篇、弔一篇、箋勢隸等三篇あり、獨斷は世に單行す、（漢魏六朝百三名家集、蔡中郎集、文選、漢魏叢書、古文淵鑑等）。

蔡邕は辭章數術天文、音律に通達するのみならず、又た能書の名當世に高かりき、而して後世に蔡邕を稱する者は銘及び碑を以てす、其作は實に銘十篇、碑三十五篇、唯多きのみならず、銘碑の文は蔡邕を祖とし、又た後世能く及ぶ者なし。

蔡邕の賦は、述行賦、漢律賦、協和婚賦、檢逸賦、協初賦、警師賦、筆賦、琴賦三篇、彈棋賦、蟬賦等あり、銘は黃鉞銘、東鼎銘、中鼎銘、西鼎銘、朱公叔鼎銘、樽銘、盤銘あり、碑は太尉橋公廟碑、太尉橋公碑、太傅胡公碑、太尉楊公碑、郭有道林宗碑、伯夷叔齊碑、九疑山碑等あり、

琴賦　蔡邕

爾乃言求、茂木、周流四垂、觀彼椅桐、曆山之陂、丹華煒煒、綠葉參差、甘露潤其末、涼風扇其枝、鸞鳳翔其頂、玄鶴巢其岐、考之詩人、琴瑟是宜、爰制雅器、協之鐘律、通理治性、恬淡清溢、爾乃清聲發兮五音舉、韻宮商兮動角羽、曲引興兮繁絃撫、然後哀聲既發、秘弄乃開、左手抑揚、右手徘徊、指掌反覆、抑案藏推、於是繁絃既抑、雅韻乃揚、仲尼思歸、鹿鳴三章、梁甫悲吟、周公越裳、青雀西飛、別鶴東翔、飲馬長城、楚山明光、楚姬遺歎、雞鳴高桑、走獸率舞、飛鳥下翔、感激絃歌、一低一昂。

西鼎銘　蔡邕

維光和元年、冬十二月丁巳、延公入崇德殿前、乃制銘曰、其以光祿大夫玄爲太尉、公拜稽首曰、臣聞之三讓莫或克從、臣不敢辭、臣犬馬齒七十、可以生、可以死、其戮力閉私、悉心在公、以盡爲臣之節、于時侍從陛階、與聞公之昌言者、莫不惕厲、如履薄氷、既乃碑表百代、釋誨之末、歌以繫曰、練余心兮浸太清、滌穢濁兮存正靈、和液暢兮神氣寧、情志泊兮心亭亭、嗜欲息兮無由生、蹠宇宙而遺俗兮、眇翩翩而獨征、と、

獨斷……蔡邕の獨斷は漢代の制度及び帝王の世次を記せるものにして後世諸書の注解には普く引用せらる、漢魏叢書にも之を收む、小冊子なれども一見の價値

なしとせず。

第八　趙壹、禰衡、邊讓

趙壹……趙壹字は元叔、涇陽西縣の人なり、容貌魁梧、美鬚豪眉、文藻富麗、才を恃みて倨傲、鄉黨の擯くる所となる、後ち罪を得て幾んと死に至らんとす、友人救ひて免るゝを得たり、壹廼ち書を貽り恩を謝し窮鳥賦一篇を爲くる、其辭に曰く、

有一窮鳥、戢翼原野、罝網加上、機穽在下、前見著集、後見驅者、繳彈張右、翟子設左、飛丸激矢、交集于我、思飛不得、欲鳴不可、舉頭畏觸、搖足恐墮、內獨怖急、乍冰乍火、幸願大賢、我矜我憐、昔濟我南、今振我西、鳥也雖頑、猶識密恩、內以含心、外用告天、天乎祚賢、歸賢永年、且公且侯、子子孫孫、と又刺世疾邪賦を作る、一時聲名京師を動しゝと雖も、偃蹇世と合はず、遂に不遇に終れり、其著作する所は賦頌、箴、誄、書、論及雜文十六篇あり、當時文士には郦炎、劉梁、高彪、侯瑾、張超等あり、(後漢書文苑傳に詳なり)。

禰衡　字は正平、平原、般の人なり、少くして才辯あり、而も氣尙剛傲、好で時を矯め、物を慢し、眼中人なし、唯孔融、楊脩と善し、常に稱して曰く、大兒孔文舉、小兒楊德祖、餘子は碌々數ふるに足るなきなりと、孔融亦た深く其の才を愛す、衡始めて弱冠にして融年四十、遂に與に交友たり、上疏して之を薦む、曹操、劉表に仕へしも皆な狂傲不遜を以て退けらる、後ち黃祖に仕へ之が爲に殺さる、祖の子射は衡と親善す、射嘗て大に賓客を會す、人の鸚鵡を獻ぜしものあり、射は巵を衡に擧げて曰く、願くは先生之を賦し以て嘉賓を娛ましめよと、衡筆を攬りて文を作り、點を加ふるなし、詞氣豪壯、淋漓英峻の狀見るべし、鸚鵡賦は文選に載す、死する時年僅に二十六。

邊讓……邊讓字は文禮、陳留浚儀の人なり、少きより辯博、能く文を屬す、章華賦を作る、淫麗の辭多しと雖も、而も之を終るに正を以てす、亦た司馬相如の諷諫の如し、其の辭は後漢書の本傳に在り、後ち商才を以て擯でられ歷遷り、出でゝ九江太守となる、初平中に王室大に亂れ、讓官を去つて家に歸り才氣を恃みて屈せず、終に曹操の爲に殺さる、

第九　馬融、王逸、子延壽

馬融……馬融字は季長、扶風茂陵の人なり、孟恂に從つて遊學し、博く經籍に通ず、後ち郎せられて校書郎中と爲り、東觀に詣りて秘書を典校す、此時鄧太后朝に臨み武備漸く廢し猾賊橫行せんとす、融乃ち感激して廣成頌を上り以て諷諫す、之が爲

に卿を得たり、安帝東巡の時に至り、融乃ち東巡頌を上る、帝其の文を奇とし、召して郎中に拜す、屢〻遷る、融才高くして博洽、世の通儒たり、盧植鄭玄等皆其門に出づ、善く琴を鼓し、好みて笛を吹く、放任にして儒者の節に拘らず、嘗て左氏春秋を訓せんと欲す、賈逵鄭衆の注を見るに及びて乃ち曰く、賈君精而不博、鄭君博而不精、既精既博、吾何加焉と、但〻三傳異同說を著はす、孝經、論語、詩、易、三禮、尚書、列女傳、老子、淮南子、離騷を注す、著はす所、賦、頌、碑、誄、書、記、表、奏、七言、琴歌、對策、遺令、凡て二十一篇ありといふ(後漢書本傳)、今傳はる所、百三名家集の馬季長集には、賦は長笛賦琴賦等四篇、疏三篇、頌二篇、書三篇、忠經序、著述は忠經あり、漢魏叢書にも之を收む。

王逸　字は叔師、南郡宜城の人なり、校書郎と爲り、又た順帝の時に侍中と爲る、楚辭章句を著はし世に行ふ、其の賦は機賦、荔支賦あり、折武論、九思、琴思楚歌あり、王叔師集百三名家集に收む、

延壽……字は文考、逸の子なり、儁才あり、少にして魯國に遊び、靈光殿賦を作る、後ち冒て異夢あり、意に之を惡み、乃ち夢賦を作り以て自ら厲む、後ち水に溺れて死す、時年二十餘、靈光殿賦は文選に在り、初め作りしとき蔡邕亦此賦を造らんとして未

だ成らず、延壽の賦を見て甚だ之を奇とし遂に止めぬと、

第十　孔融

孔融字は文舉、魯國の人、孔子二十世の孫なり、幼より異才あり、十歲の時河南尹李膺之を見て評して曰く、後ち必ず偉器たらんと、年十三父を喪ひ、哀悴過毀、扶けて後ち起つ、州里其孝を稱す、性學を好み博涉該覽す、十六にして寇を以て獄に送られ後ち免る、融の義氣禮讓是より顯はる、蓋卓廢立するに及て融對答する每に輙ち匡正の言あり、以て卓の旨に忤ひ轉じて議郎と爲さる、時に黃巾の賊數州に寇す、而して北海最も賊の衝と爲る、卓乃ち所司に諷し、融を舉げて北海の相と爲さしむ、融郡に至り、士民を收合し、兵を起し、武を講じ、檄を馳せ、翰を飛ばして相聯る、賊屢〻來り侵す、北海に在る六年、偉功なしと雖も計畫する所少からず、後ち獻帝の許に都するに及びて融を徵して少府と爲す、每朝訪對に會ふごとに融輙ち正を引き議を定む、當時袁曹二氏最も盛に、漸く漢祚を傾けんとす、融之を知り、屢〻之を諷諫す、是より操は融を害と爲し、鄴虛亦融と隙あり、屢〻之を陷れんとす、遂に融を以て不軌を規るといひ、大逆不道と誣ひて書を奏す、融獄に下され、棄市せらる、時に年五十六、其の著はす詩、頌、文、

論、議、六言、策、表、檄、教令、書記、凡そ二十五篇(後漢書本傳)、今傳ふる所は詩五首、六言三首、碑一篇、論四篇、議二篇、書十六篇、對一篇、上書五篇、表疏二篇あり、孔少府集に見す、百三名家集に收む。

孔融は後漢末の文豪たるのみならず、其の氣節は懍懍焉皚皚焉として珉玉秋霜と質を比するも可なりと稱せらる、其文は詞氣高妙を極む、魏の文帝深く融の文辭を好み、歎じて曰く、揚班之儔也と、天下に募り、融の文章を上る者あれば輒ち賞するに金帛を以てせりと、蓋し其英偉剛爽の氣發して文と爲る、故に讀者覺えず志氣を高めて清節の士と爲らん、

乙 古詩及樂府

夫れ漢代の韻文は辭賦其の大部を占むれども、亦古詩及ひ樂府の作少しとせず、曰く辭賦、曰く古詩、曰く樂府と、三種の體を見るに至りしも、其の源流は俱に詩三百篇より來る、賦は已に屈原の條及前段に之を云へり、抑も三百篇は古代の詩にして又樂府たりしなり、蓋し樂府の名は漢に興りしと雖も、詩三百篇は悉く以て管絃に施しゝものなれば、其實後世の樂歌たらずんばあらず、古樂漸く衰へて單に詩を賦す

るの風起れり、詩を賦するは詩の二三句を口誦して以て自己の意を婉曲に表するなり、春秋以後宴見會同に多く見る所なり、樂の始皇古制を廢するに至りて、古樂全く滅び、樂府亦亡失す、漢の始めて興るや、樂家に制氏あり、魯人なり、雅樂聲律を以て世、太樂官に在り、唯能く其の鏗鏘鼓舞を紀して其の義を言ふ能はず、高祖の時に叔孫通は秦の樂人に依りて宗廟樂を制す、又た高祖の姬、唐山夫人は房中詞樂を作る、其樂歌十七章今に存す、孝惠帝樂府令夏侯寬をして其の簫管を備へしめ、更めて安世樂と名く、初め高祖既に天下を定め、沛を過ぎて故人父老と燕飲す、歡極つて、大風起兮雲飛揚、威加海內兮歸故鄉、安得猛士兮守四方の歌を作り、沛中の童兒をして之を歌はしむ、孝惠帝の時に至り沛宮を以て原廟と爲し、四時之を祀るとき、沛中の童兒百二十人をして吹を習ひて以て相和せしむ、文景二帝間は樂府に增更する所なし、常を習ひ、舊を緝ふのみ、武帝に至りて郊祀の禮を定め、太一を甘泉に祠り、后土を汾陰澤中方丘に祭る、乃ち始めて樂府を立て、古に倣ひて百姓の謳謠を采り、夜中歌誦せしむ、李延年を以て協律都尉と爲し、司馬相如等數十人を舉げて詩賦を造爲し、略、律呂を論じ、正月上辛を以て太一を甘泉に祠り、昏より明に至りて終る、童兒童女

七十人をして俱に歌はしむ、春は青陽を歌ひ、夏は朱明を歌ひ、秋は西皓を歌ひ、冬は玄冥を歌ふ、郊祀歌十九章今に傳ふ、樂歌を司る府を樂府といふよりして後世遂に轉じて樂府と稱す。漢代の樂府は大抵四字句より成り、六字七字句等も亦之れあり、（樂書）明の胡應麟曰く、三百篇薦郊廟被絃歌、詩即樂府、樂府即詩、猶兵寓於農、未嘗二也、詩亡樂廢、屈宋代興、九歌等猶以侑樂、九章等作以抒情、迨嬗漸兆、至漢郊祀十九章、古詩十九首、不相爲用、詩與樂府門類始分、然厥躰未甚遠也、詩と樂府の門類、漢に至りて始て分れ、一は節奏を主とし、一は諷咏を主とするに至れり、而して樂府は司馬相如等の手に成れるが故に楚聲を帶び、九歌九章に近し、而も其の標式する所は古代の雅頌なり、唐山夫人の十七章も亦楚聲にして雅頌に倣へるものなり、故に劉安世は西漢樂章可齊三代、禮樂志房中樂十七章、格韻高嚴、規摹備古、嶷嶷乎商周之頌、噫異哉と言ひ、明の楊愼は唐山夫人房中樂歌、直可以繼關雎、不當以章句摘也と、然れども漢代の樂府を以て直に三代の雅頌に比するは少しく溢美に似たり、故に明の王世貞は十七章及び十九章を評して、失之太峻、有桑風小戎之遺、非頌詩比也、唐山夫人雅歌之流、調短弱、未舒耳と云へり。

安世房中歌十七章、郊祀歌十九章は共に漢書禮樂志に在り、安世歌の首章に云く、大孝備矣、休德昭清、高張四縣、樂充宮廷、芬樹羽林、雲景杳冥、金支秀華、庶旄翠旌、と一章八句なり、然れども其他は或は十句或は六句にして一ならず、郊祀歌の第三章青陽に云く、青陽開動、根荄以遂、膏潤并愛、跂行畢逃、靡草發榮、壄處傾聽、枯鄣復產、卵成厥命、衆庶熙熙、施及天胎、羣生噉噉、惟泰之祺、字句の富麗は漢時の作を推すべけれども骨力雅健にして高古簡勁なるは三代に比すべくもあらず、加之其の稱揚すべき德樂も又遙かに差異あるを見る、然れども後世の樂府は漢代の作を以て鼻祖と爲すに似たり、而して其の題目も歌、行、吟、曲等ありて一ならず、漢代の詩題も亦然り、古詩箋に姜夔の詩說を引きて曰く、載始末曰引、體如行書曰行、放情曰歌、乘之曰歌行、悲如畫瓜曰吟、通乎俚俗曰謠、委曲盡情曰曲、と、詩と樂府の題目は混淆して明かならず、特り後世のみならず、漢時已に此風ありき、漢志を案ずるに、歌詩二十八家、三百十四篇を錄す、惟ふに諸國の歌謠頗る備はりしなるべし、然れども今日に至りては唯周時の國風のみ傳せられて漢時の作傳はらず、漢時の樂府の題は唐の吳兢の樂府古題要解に之を解せり、（此の要解は津逮秘書に收む）曰く、江南曲――古詞に云く、江南可采蓮、

蓮葉何田田、と、又云く、魚戲蓮葉東、魚戲蓮葉西、魚戲蓮葉南、魚戲蓮葉北、と、蓋し其の芳麗婚遊の時を得るを美するなり。薤露歌――輓歌なり。舊曲本と田橫の門人に出づ、歌ひて以て橫を葬れるものなり、一章には人命の奄忽として薤上の露の晞き易きが如きを云ひ、二章には人死して其の精魄は蒿里に歸するを云ふ、武帝の時に至りて李延年分ちて二曲となし、薤露は王公貴人を送り蒿里は士大夫庶人を送るの歌となし、柩を挽く者をして之を歌はしめき、故に亦呼びて挽柩歌とも云へり。其他長歌行、平陵東、陌上桑、秋胡行、殿前生桂樹、淮南王篇、白紵歌等あり。又た西漢女流の手に成れる樂府體には卓文君の白頭吟、班婕妤の怨歌行の如きあり、

卓文君

白頭吟

卓文君は司馬相如の妻、藻才あり、嘗て相如が妾を納れんとするを怨みて白頭まで相離れざるをいふ、相如遂に止む、其辭に曰く、

皚如山上雪、皎若雲間月、聞君有兩意、故來相決絕、今日斗酒會、明旦溝水頭、躞蹀御溝上、溝水東西流、凄々復凄々、嫁娶不須啼、願得一心人、白頭不相離、竹竿何嫋々、魚尾何簁々、男兒重意氣、何用錢刀爲、

班婕妤

怨歌行

班婕妤は越騎校尉班況の女、孝成帝の時選ばれて後宮に入る、初め少使と爲り、幾もなく大に幸せられて婕妤と爲る、帝後庭に遊び、嘗て婕妤と輦を同じくして載らんと欲す、婕妤曰く、古の圖畫を觀るに賢聖の君は皆な側に名臣の在るあり、三代の末主酒ち嬖女あり、今輦を同じくせんと欲す、之に近似する所なきを得んやと、帝其の言を善しとして止みぬ、大后之を聞き喜びて曰く、古は樊姬あり、今は班婕妤ありと、鴻嘉三年に趙飛燕は許皇后、班婕妤は媚道を挾み、後宮を咒詛し、嘗主上に及ぶと譖す、許皇后坐して廢せらる、班婕妤を拷問す、婕妤曰く、妾聞く死生命あり、富貴天に在り、正を修めて倘ほ未だ福を蒙らず、邪を爲して以て何をか望まんと欲す、鬼神をして知あらしめば不臣の愬を受けず、若し其れ知あらしめば、之を愬ふるも何の益あらん、故に爲さずと、帝其の對を善しとして之れを憐憫し、黃金百金を賜ふ、後ち請うて太后に長信宮に侍す、自悼賦、擣素賦、怨歌行あり、成帝崩ずるに及びて婕妤は園陵に充奉せり、其の氣品才藻は我邦紫式部淸少納言或は遜色あらん、怨歌行の辭に曰く、

新製齊紈素、皎潔如霜雪、裁成合歡扇、團團似明月、出入君懷袖、動搖微風發、
常恐秋節至、涼飈奪炎熱、棄捐篋笥中、恩情中道絕、

（四三〇）

五言古詩の濫觴

古詩十九首　錄五首

無名氏

行行重行行、與君生別離、相去萬餘里、各在天一涯、道路阻且長、會面安可知、
胡馬依北風、越鳥巢南枝、相去日已遠、衣帶日已緩、浮雲蔽白日、遊子不顧返、
思君令人老、歲月忽已晚、棄捐勿復道、努力加餐飯、
青青河畔艸、鬱鬱園中柳、盈盈樓上女、皎皎當牖牖、娥娥紅粉粧、纖纖出素手、
昔爲倡家女、今爲蕩子婦、蕩子行不歸、空牀難獨守、
青青陵上柏、磊磊澗中石、人生天地間、忽如遠行客、斗酒相娛樂、聊厚不爲薄、
驅車策駑馬、遊戲宛與洛、洛中何鬱鬱、冠帶自相索、長衢羅夾巷、王侯多第宅、
兩宮遙相望、雙闕百餘尺、極宴娛心意、戚戚何所迫、
今日良宴會、歡樂難具陳、彈箏奮逸響、新聲妙入神、令德唱高言、識曲聽其眞、
齊心同所願、合意俱來仲、人生寄一世、奄忽若飈塵、何不策高足、先據要路津、

無爲守窮賤、轗軻長苦辛、
西北有高樓、上與浮雲齊、交疏結綺窗、阿閣三重階、上有絃歌聲、音響一何悲、
誰能爲此曲、無乃杞梁妻、清商隨風發、中曲正徘徊、一彈再三歎、慷慨有餘哀、
不惜歌者苦、但傷知音稀、願爲雙鴻鵠、奮翅起高飛、

唐の王士禎の古詩箋具さに此十九首を收む、然れども以爲へらく、十九首は一人一時の人に非ず、或は枚乘の作あり、或は傅毅の作ありと云ふも、作者の名氏は確知するを得ず、又た古詩箋に古詩として名氏を掲げざるもの七首あり、蘇武李陵の倡和に至りて始めて名氏を載す、其の他にも多くありしならんも遂一考ふべからず。

蘇武……字は子卿、京兆の人、武帝の天漢中に中郎將を以て匈奴に使すること十九年、昭帝の時匈奴と和親し歸ることを得、拜せられて典屬國と爲る。

李陵……字は少卿、廣の孫なり、騎都尉と爲る、天漢中に步卒五千に將として匈奴を擊ち、轉鬬矢盡き遂に匈奴に降る、匈奴に在ること二十餘年にして死す、蘇武李陵の倡和は蓋し二人が匈奴に在りて友誼懇到なりしが、蘇武は本國に歸り李陵留りて匈奴に仕ふ、天涯萬里に袂を分つの時、生別は悲れ死別の情を寄するもの、其の情

緒繼篠として千歳の下面する者をして愁然たらしむ蘇李の作は五言古詩の祖と稱せらる宋の殷羽の沿洄詩話に云く風雅頌既亡一變而爲離騷再變而爲西漢五言三變而爲歌行雜體四變而爲沈宋律詩と然れども三百篇にも五言なきにはあらず唯五言詩形の西漢に一定したるのみ而して七言詩形も亦西漢に一定したり今左に蘇李の應答の詩を示さんとす

蘇武

贈李陵詩四首

骨肉緣枝葉、結交亦相因、四海皆兄弟、誰爲行路人、況我連枝樹、與子同一身、
昔爲鴛與鴦、今爲參與辰、昔者常相近、邈若胡與秦、誰念當乖離、思情日以新、
鹿鳴思野苹、可以喻嘉賓、我有一尊酒、欲以贈遠人、願子留斟酌、飲此平生親、
結髮爲夫妻、恩愛兩不疑、歡娛在今夕、燕婉及良時、征夫懷往路、起視夜何其、
參辰皆已沒、去去從此辭、行役在戎場、相見未有期、握手一長歎、淚爲生別滋、
努力愛春華、莫忘歡樂時、生當復來歸、死當長相思、
黃鵠一遠別、千里顧徘徊、胡馬失其群、思心常依依、何況雙飛龍、羽翼隨當乖、
幸有絃歌曲、可以喻中懷、冷冷一何悲、糸竹厲淸聲、慷慨有餘哀、

長歌正激烈、中心怡以摧、欲展淸商曲、念子不得閒、俯仰內傷心、淚下不可揮、
願爲雙黃鵠、送子俱遠飛、

燭々晨明月、覿々秋蘭芳、芬馨良夜發、隨風聞我堂、征夫懷遠路、遊子戀故鄉、
寒冬十二月、晨起踐殿霜、俯觀江漢流、仰視浮雲翔、良友遠別離、各在天一方、
山海隔中州、相去悠且長、嘉會難再遇、歡樂殊未央、願言蒙令德、隨時愛景光、

與蘇武詩三首

李陵

良時不再至、離別在須臾、屏營衢路側、執手野踟躕、仰視浮雲馳、俄忽互相踰、
風波一失所、各在天一隅、長當從此別、且復立斯須、欲因晨風發、送子以晨鳧、
携手上河梁、遊子暮何之、徘徊蹊路側、恨々不能辭、行人難久留、各言長相思、
安知非日月、弦望自有時、努力崇明德、皓首以爲期、
嘉會難再遇、三載爲千秋、臨河濯長纓、念子悵悠悠、遠望悲風至、對酒不能酬、
行人懷往路、何以慰我愁、獨有盈觴酒、與子結綢繆、

と、或は上揭の詩を後人の擬作と爲すものあれども、其の氣格の高雅醇勁たるは、自ら其の西漢の作を表するものあり、且つ古詩箋には蘇李の贈答に擬するの作は別

に之を收む、又唐の李瀚の蒙求に引く所は稍異る所あり、梁の鍾嶸の詩品（梁沖時源沖遠秘書に在り）には李陵を上品に列して其源出楚辭、文多悽愴怨者之流と云へり、又た竹林詩話に稱す、蘇武之作稱爲高古、非清廟之瑟、朱絃疏越一唱三和、更無可論之と、

（四三四）

飲馬長城窟行、　　蔡邕

青青河邊草、　綿綿思遠道、　遠道不可思、　夙昔夢見之、　夢見在我傍、　忽然在他鄉、
他鄉各異縣、　展轉不可見、　枯桑知天風、　海水知天寒、　入門各自媚、　誰肯相爲言、
客從遠方來、　遺我雙鯉魚、　呼童烹鯉魚、　中有尺素書、　長跪讀素書、　書中竟何如、
上有加餐食、　下有長相憶、

七言古詩の濫觴

五言七言の詩は已に三百篇に於て見るを得べけれども其の詩體の一定したるは共に漢代を以て始と爲すべし。興寄深微なるは五言は四言に及ばずとは李太白嘗て之を云へり、然れども文運の進歩と共に漸く複雜となり、遂に五言七言の詩形を起すに至れり、武帝の元封三年に栢梁臺を落成して群臣を會し、席上聯句の詠を爲し七言二十六句を成す、是れ七言古詩の濫觴なり。

栢梁臺詩

日月星辰和四時、　騶御駟馬從梁來、梁王孝王武　郡國司馬羽林材、大司馬
總領天下誠難治、丞相石慶　和撫四夷不易哉大將軍衛青　刀筆之吏臣執之御史大夫倪寬
撞鐘伐鼓聲中詩太常周建德　宗室廣大日益滋宗正劉安國　周衛交戟禁不時衛尉路博德
總領從宗栢梁臺光祿勳徐自爲　平理清獄決嫌疑延尉杜周　修飾輿馬待駕來太僕公孫賀、
郡國吏功差次之太倉應麟充國　乘輿御物主治之少府王溫舒　陳粟萬石揚以箕大司農張成
徼道宮下隨討治執金吾中尉豹　三輔盜賊天下危左馮翊盛宣　盜阻南山爲民災右扶風李成信
外家公主不可治京兆尹　椒房率更領其材廣平陳掌　蠻夷朝賀當舍其典屬國
柱枅櫨櫨相支持大匠　枇杷橘栗桃李梅大官令　走狗逐兎張罘罝上林令
齧妃女唇甘如飴郭舍人　迫窘詰屈幾窮哉東方朔

此に七言古詩の詩形は定まりたれども漢代は多くは五言にして七言は甚だ少し、惟ふに是れ西漢の古雅樸茂なる思想は五言を以て適せりとなすなり、今七言の例を左に示さん、

四愁詩并序　　張衡

張衡不樂、久處機密、陽嘉中出爲河間相、時國王驕奢、不遵法度、又多蓄右幷豪之家、衡下車治、威嚴能內察、屬縣姦猾、行巧刼皆密知名、下吏收捕盡服擒、諸豪俠遊客、恐怪懼逃出境、郡中大治、爭訟息、獄無繫囚、時天下漸弊、憯々不得志、爲四愁詩、倣屈原以美人爲君子、以珍寶爲仁義、以水深雪冥爲小人、思以道術爲報、貽於時君、而懼讒邪不得以通、其辭曰、

一思曰、我所思兮在太山、欲往從之梁父難、側身東望涕霑翰、美人贈我金錯刀、

何以報之英瓊瑤、路遠莫致倚道遙、何爲懷憂心煩勞、

二思曰、我所思兮在桂林、欲往從之湘水深、側身南望涕霑襟、美人贈我金琅玕、

何以報之雙玉盤、路遠莫致倚惆悵、何爲懷憂心煩傷、

三思曰、我所思兮在漢陽、欲往從之隴坂長、側身西望涕霑裳、美人贈我貂蟬襜、

何以報之明月珠、路遠莫致倚踟躕、何爲懷憂心煩紆、

四思曰、我所思兮在雁門、欲往從之雪霰々、側身北望涕霑巾、美人贈我錦繡段、

何以報之青玉案、路遠倚增歎、何爲懷憂心煩惋、

と、憂懷沈痛實に漢代の佳作と謂ふべし、只惜むらくは結構の拙擬に過ぐるものあり、

叙事詩

支那文學史上には抒情詩多くして叙事詩少し、然れども是を以て支那文學に叙事詩なしといふは固より穩當の見にあらず、今左に二大長篇を掲げて叙事詩の例となさんとす。

蔡琰　流離詩

蔡琰字は文姬、或は昭姬といふ、蔡邕の女也、博學にして才藻あり、又音律に妙なり、河東衛中道に適く、夫亡して子なし、家に歸寧す、興平中天下大に亂れ、文姬胡騎に進られ、南匈奴太賢王に沒し、胡中に在ること十二年、二子を生む、曹操元と蔡邕と善し、其の嗣なきを痛み、乃ち使者を遣り金璧を以て之を贖ふ、而して重ねて董祀に嫁す、祀は法を犯して死に當てらる、文姬曹操に詣りて之を請ふ、時に公卿名士及び遠方使驛、坐する者堂に滿つ、操賓客に謂つて曰く、蔡文姬外に在り、諸君の爲に之を見せしめんと、文姬進むに及びて遠音徒行、叩頭して罪を請ふ、音辭清辨、旨甚だ酸哀なり、衆皆な爲に容を改む、操曰く、誠實相矜む、然も文狀已に去る、奈何せんと、文姬曰く、明公廐馬萬匹、虎士林を爲す、何ぞ疾足一騎を惜み、垂死の命を濟はざるやと、操其言に感し

て乃ち祀の罪を追ひ原るす、文姫に頭巾履襪を以てす、後ち亂離に感傷し、追懷悲憤して詩二章を作る、五言及び七言なり。今五言を掲げん、

漢季失權柄、　董卓亂天常、　逼迫遷舊邦、
擁主以自彊、　海內興義師、　志欲圖篡弑、　先害諸賢良、
平土人脆弱、　來兵皆胡羌、　欲共討不祥、　卓衆來東下、
尸骸相掌拒、　馬邊懸男頭、　長驅西入關、　金甲耀日光、
還顧邈冥冥、　肝膽爲烟塵、　所向悉破亡、　迴路險且阻、
欲言不敢言、　失意機微間、　斬截無子遺、　或有骨肉俱、
豈復惜生命、　不堪其憂煎、　彼若者何辜、　旦則號泣行、
夜則悲吟坐、　欲死不能得、　乃遇此危禍、　朝風春夏起、
邊荒與華異、　人俗少義理、　朔朔吹我衣、　胡笳聲四發、
肅肅入我耳、　感時念父母、　聞之常歡喜、　哀歎無窮已、
迎問其消息、　輒復非鄉里、　已得自解免、　邂逅徼時願、
當復樂兒子、　天屬綴人心、　不忍與之辭、　骨肉來迎己、
兒前抱我頸、　問我欲何之、　人言母當去、　豈復有還時、
今何更不悲、　我尚未成人、　奈何不顧思、　見此崩五內、
號泣手撫膺、　當發復回轉、　相送告離別、　相去萬餘里、
哀叫聲摧裂、　馬爲立踟躕、　觀者皆歔欷、　行路亦嗚咽、
去去割情戀、　遠征日遐邁、　悠悠三千里、　何時復交會、
胸臆爲摧敗、　既至家人盡、　又復無中外、　城郭爲山林、
白骨不知誰、　縱橫莫覆蓋、　庭宇生荆戈、　悅惚生狂癡、
但聞哭聲發、　登高遠眺望、　出門無人聲、　豺狼號且吠、
魂神忽飛逝、　奄若隨命盡、　孤景響對孤景、　旁人相寬大、
爲復暫視息、　雖生何聊賴、　託命於新人、　竭心自勗厲、
洶洶復指麾、　人生幾何時、　懷憂終年歲、　流離成鄙賤、

五百四十言を以て文姫が歸寧以後の事蹟を叙す、遭遇已に悲慘にして文辭亦た富贍、叫天哭地の實歴を述べて句句肺腑より出づ、數千歳の下讀者悲劇を觀るの感あり。

古詩爲焦中卿妻作并序

漢末建安中、廬江府小吏焦仲卿妻劉氏、為仲卿母所遣、自誓不嫁、其家逼之、乃投水而死、仲卿聞之、亦自縊於庭樹、時人傷之、為詩云爾、

孔雀東南飛、五里一徘徊、十三能織素、十四學裁衣、十五彈箜篌、
十六誦詩書、十七為君婦、心中常苦悲、君既為府吏、守節情不移、
賤妾留空房、相見常日稀、雞鳴入機織、夜夜不得息、三日斷五疋、
大人故嫌遲、非為織作遲、君家婦難為、妾不堪驅使、徒留無所施、
便可白公姥、及時相遣歸、府吏得聞之、堂上啓阿母、兒已薄祿相、
幸復得此婦、結髮同枕席、黃泉共為友、共事二三年、始爾未為久、
女行無偏斜、何意致不厚、阿母謂府吏、何乃太區區、此婦無禮節、
舉動自專由、吾意久懷忿、汝豈得自由、東家有賢女、自名秦羅敷、
可憐體無比、阿母為汝求、便可速遣之、遣去慎莫留、府吏長跪告、
伏惟啓阿母、今若遣此婦、終老不復取、阿母得聞之、槌牀便大怒、
小子無所畏、何敢助婦語、吾已失恩義、會不相從許、府吏默無聲、
再拜還入戶、舉言謂新婦、哽咽不能語、我自不驅卿、逼迫有阿母、

卿但暫還家、吾今且報府、不久當歸還、還必相迎取、以此下心意、
慎勿違我語、新婦謂府吏、勿復重紛紜、往昔初陽歲、謝家來貴門、
奉事循公姥、進止敢自專、晝夜勤作息、伶俜縈苦辛、謂言無罪過、
供養卒大恩、仍更被驅遣、何言復來還、妾有繡腰襦、葳蕤自生光、
紅羅複斗帳、四角垂香囊、箱簾六七十、綠碧青絲繩、物物各自異、
種種在其中、人賤物亦鄙、不足迎後人、留待作遺施、於今無會因、
時時為安慰、久久莫相忘、雞鳴外欲曙、新婦起嚴妝、著我繡裌裙、
事事四五通、足下躡絲履、頭上玳瑁光、腰若流紈素、耳著明月璫、
指如削葱根、口如含珠丹、纖纖作細步、精妙世無雙、上堂拜阿母、
阿母怒不止、昔作女兒時、生小出野里、本自無教訓、兼愧貴家子、
受母錢帛多、不堪母驅使、今日還家去、念母勞家裏、却與小姑別、
淚落連珠子、新婦初來時、小姑始扶牀、今日被驅遣、小姑如我長、
勤心養公姥、好自相扶將、初七及下九、嬉戲莫相忘、出門登車去、
涕落百餘行、府吏馬在前、新婦車在後、隱隱何甸甸、俱會大道口、

下馬入車中、低頭共耳語、
不久當還歸、誓天不相負」
不久望君來、君當作磐石、
我有親父兄、性行暴如雷、
二情同依依、入門上家堂、
十三教汝織、十四能裁衣、
謂言無誓違、汝今何罪過、
阿母大悲摧、還家十餘日、
年始十八九、便言多令才」
蘭芝初還時、府吏見丁寧、
自可斷來信、徐徐更相之、
不堪吏人婦、豈合令郎君、
寄語兩家人、說有蘭家女、
還亟爲媒人、主簿通語言、
語不相隔絕、且暫還家去、
新婦聞府吏、感君區區懷、
妾當作蒲葦、蒲葦紉如絲、
恐不任我意、逆以煎我懷、
進退無顏儀、阿母大拊掌、
十五彈箜篌、不知禮儀、
十六知禮儀、十七遣汝嫁、
不迎而自歸、兄弟無罪過、
縣令遣媒來、窈窕世無雙、
阿母聞阿女、阿女含淚答、
汝可去應之、恐此事非奇、
今日遣情義、始適還家門、
阿母白媒人、貧賤有此女、
幸可廣問訊、媒人去數日、
不得便相許、嬌逸未有婚、
永籍有宦官、云有第五郎、
直說太守家、有此令郎君、
吾今且還府、君既若見錄、
君當作磐石、性行如磐石、
舉手長勞勞、不關子自歸、
十七遣汝嫁、兄弟無罪過、
既欲結大義、

故還來、貴門
悵然心中煩、
否泰如天地、
理實如兄言、
雖典府吏要、
諾諾復爾爾、
心中大歡喜、
今已二十七、
四角龍子幡、
聘錢三百萬、
府君令郎君、
阿母謝媒人、
擧言謂阿妹、
足以榮汝身、
謝家事夫壻、
渠會永無緣、
還部白府君、
視曆復開書、
卿可去成婚、
婀娜隨風轉、
皆用青絲穿、
阿母謂阿女、
阿女默無聲、
出門前密下、
左手持刀尺、
唏唏日欲暝、
恐思出門啼」
女子先有誓、
作計何不量、
不嫁義郎體、
中道還兄門、
登即相許和、
下官奉使命、
便利此月內、
交語速裝束、
金車玉作輪、
雜綵三百匹、
適得府君書、
手巾掩口啼、
右手執綾羅、
府吏聞此言、
老姥豈敢言」
先嫁得府吏、
其往欲何云、
處分適兄意、
便可作婚姻、
言談大有緣」
府君得聞之、
六合正相應、
絡繹如浮雲、
踟躕青總馬、
交廣市雜珍、
明日來迎汝、
淚落便如瀉、
朝成繡夾裙、
因求假暫歸、
阿兄得聞之、
後嫁得郎君、
蘭芝仰頭答、
那得自任專、
媒人下牀去、
府君得聞之、
良吉三十日、
青雀白鵠舫、
流蘇金縷鞍、
從人四五百、
何不作衣裳、
移我琉璃榻、
晚成綾羅衫、
未至二三里、

撫藏馬悲哀、　新婦識馬聲、　悵然遙相望、　知是故人來、
舉手拍馬鞍、　嗟歎使心傷、　頗復相逢迎、
自君別我後、　人事不可量、　果不如先願、
又非君所詳、　我有親父母、　以我應他人、　君還何所望、
府吏謂新婦、　賀卿得高遷、　迫迫衆弟兄、　可以卒千年、
便作旦夕間、　卿當日勝貴、　磐石方且厚、　蒲葦一時紉、
同是被逼迫、　君爾妾亦然、　吾當向黃泉、　何意出此言、
各各還家門、　生人作死別、　黃泉下相見、　新婦謂府吏、
府吏還家去、　上堂拜阿母、　恨恨那可論、　勿遂今日言、
見今日冥冥、　舉母在後單、　念與世間辭、　執手分道去、
四體康且直、　阿母得聞之、　今日大風寒、　千萬不復全、
慎勿爲婦死、　貴賤情何薄、　寒風摧樹木、　嚴霜結庭蘭、
但復在旦夕、　府吏再拜還、　故作不良計、　命如南山石、
漸見愁煎迫、　其日牛馬嘶、　零淚應聲落、　仕宦於盛閥、
我命絕今日、　魂去尸長留、　汝是大家子、　阿母爲汝求、
東家有賢女、　窈窕艷城郭、　長歎空房中、　作計乃爾立、
新婦入青廬、　奄奄黃昏後、　寂寂人初定、　府吏聞此事、

心知長別離、　徘徊庭樹下、　自掛東南枝、　兩家求合葬、　合葬華山傍、
東西植松柏、　左右種梧桐、　枝枝相覆蓋、　葉葉相交通、　中有雙飛鳥、
自名爲鴛鴦、　仰頭相向鳴、　夜夜達五更、　行人駐足聽、　寡婦起彷徨、
多謝後世人、　戒之慎勿忘、

此篇作者の名氏を詳かにせずと雖も漢代の作たるは疑なきに似たり、凡て千七百八十五言より成り、結構奇巧を極め字句富贍を盡くす、其の事蹟悲哀慘劇、時人之を詩にして後人を戒むる寔に所以あるなり、

上掲の樂府古詩は固より漢代韻文の一斑たるに過ぎざれども、其の特徴以て察知するを得ん、

秦漢文學の結論

吾人は既に中世期第一期の文學を略述せり、今や終に臨みて此間の變遷を洞觀して之を評論し、且つ未だ論及せざりし小說を略論せんとす。

(天)、漢代の小說

漢志に據れば支那の小說は既に先秦に起りしが如し、然れど當時の小說は後世の

小說とは稍異れるに似たり。漢志に云く、小說家者流は蓋し稗官に出づ、街談巷語、道聽塗說せし者の造りし所なりと。而して周代に係れる者を錄して云く、伊尹說、鬻子說、周考、宵史子、師曠、務成子、宋子、天乙、黃帝說と皆な其の言の淺薄にして迂誕依託たることを云へり。今存する者なし、惟ふに此等小說は街談巷語を綴り、尙古の風習を利用して、古聖先賢の言行に附會し、古人の名を冒かしたるものなるべし。又た武帝時代の作として著錄せる者は、封禪方說、待詔臣饒心術、待詔臣安成未央術、臣壽周紀、虞初周說あり、多くは神仙家者流の作れる者ならん、今存するなし、然れども此頃より漸く後世の小說は胚胎せるものなるべし、但、怪談空說を記せる者は莊子逍遙遊にも齊諧は怪を志せるものと云へるを見ても古く存せしを知る。古代の小說として今は傳はる者は山海經、穆天子傳、海內十州記、神異經、別國洞冥記、漢武內傳、漢武故事、西京雜記、飛燕外傳、雜事秘辛等なり、然れども此等小說の記事は數種に分ち得べくして、必しも今日所謂小說の如くならず、且つ其の作者も必ず漢代の人たるや否や詳かならず、後世異論紛紜たり、淸の張之洞の書目答問には西京雜記は梁、吳均とし、漢武內傳は齊、王儉とす、漢武內傳は後漢の班固といひ、西京雜記は前漢劉歆といひ、晉の葛洪といへども、確說なし、西京雜記は漢代の雜事を記したる隨筆なり、山海經は禹或は益の書と傳ふれど確かならず、古代地理を參照するの益なしとせず、海內十州記、神異經は神仙の事を記す、東方朔の著といへども確說なし、洞冥記は漢の郭憲の作といへども又た明かならず、穆天子傳は作者明ならず、飛燕外傳は漢の河東の都尉伶玄撰すと傳ふれども又た確知すべからず、雜事秘辛は作者の名氏を欠く、以上に揭げたる小說は唯支那小說の濫觴として見るべきのみ、故に今委しく論せず、此等の書多くは漢魏叢書等に收む、就きて見るべし。

(地、前後漢の比較

氣風の差違

……熟、前後兩漢氣風の差違を察するに頗る著しきものあり、前漢は戰國以來干戈搶攘の世を承けたれば、上下共に休養を主とし、百事皆な簡約を旨とせり、加之、高祖は資性濶達大度の英主なりしを以て、元勳も自ら此風を帶び、規模宏大なりしが如し、既に創業の際に於て斯る宏達の風を養成したれば後繼の君臣も共に其の遺風を承け、皆て節氣を奬勵するに意を注がざりき、且つ漢は著しく尙古の風を帶びたり、故に王莽は尙古の風習を利用して大義名分に暗き天下の人

を絡繹して、遂に簒立せり、固より王莽の大逆を討伐せんとする者は直に四方に起りしも、最初莽の陰謀を知りつゝ之を贊けし迹は歴然として記錄に存す。之に反して後漢は光武は元と學窓より起りて義兵を擧げたるものなれば元勳も亦多くは學士諸生より身を興せし人なり、且つ光武は謹厚の性質なりしを以て群臣も亦自ら此風に化し、永く後漢の國風を成せり、加之、光武は前漢の氣節に乏しく莽の簒立ありしを見て深く此に意を注ぎ、尤も高節の士を重んぜり、處士周黨を徵して古より明王聖主は必ず不賓の士ありと曰ひて強ひて屈せしめず、又た處士嚴光が帝と同臥して足を以て帝の腹に加へしときは、故人嚴子陵と共に臥するのみと曰ひて之を優遇せしか如き、以て其の意向を窺ふに足る、此の如くして後漢には清節の士の山林巖窟に遊ぶ者多かりき、漢家漸く衰へ、桓帝靈帝以降は宦者の跋扈倍々甚しく、群雄並び起り盜賊天下に充ちたり、當時多數の朋黨は政府に反抗し、政府は禁錮を以て之を鎖壓せり、加之、奸雄は此機に乘じて百方之を煽動し、陰かに漢祚を移さんとを謀れり、是に於てか海内鼎沸し、節義の士は切齒扼腕の餘り漸く變じて粗暴となれり、有識達見の士は世の紛擾を厭ひ、漢の天下の復た興すべからざるを

察して、高蹈勇退して山林丘壑に隱るゝに至れり、騷亂既に久しかりしが、遂に曹操は漢の相國として兵馬の大權を掌握せり、而も曹操は一世の雄たりと雖も、元と非謀を抱ける者なれば、其の政令は自ら正義の容るゝ所と爲らず、朋黨の誹議する所となり、却て亂階を增せるのみ、當時の朋黨は往々節義の本領を忘却して徒らに粗暴客氣の風に陷れり、然れども渠曹操は政權を掌握すと雖も、其の身は遂に臣節を守れり、是れ全く東漢二百年間養成したる節義の効にして、人々大義名分の何たるを知れるに由れり。

學風の比較……漢代學風の變遷を洞觀するに、前漢の初期は休養を主としたれば、專ら清靜無爲の黃老を尙べり、漸くにして儒學起り、武帝以後は百家を排して儒教を正宗とするに至れり、今假りに學官の數に依て察するに、前漢には五博士を置きしが、後漢に及びては漸く加はりて十三博士を置くに至れり、易に施讎、孟喜、梁邱賀、京房の四博士あり、書に歐陽生、大夏侯の二、詩に齊魯韓の三、禮に大戴(德)小戴(聖)の二、春秋に嚴彭祖、顏安樂の二あり、光武は其の元勳と共に學事を貴び、明帝章帝も深く教化に注意し、經學を奬勵せり、然れども桓帝の頃より詩賦の發達特に著し

く、經學は稍、衰へたるの迹あり、夫れ字義訓詁の學風は前後兩漢を貫通せるものなれども、前漢は寧ろ斷簡殘篇を采蒐するに忙はしく、後漢には主として注釋を下すに力を用ひたるが如し、前漢には董仲舒、劉向の如きあり、後漢には馬融、鄭玄の如きあり、皆な大儒として世に重きを爲せり、而して其の爲す所の事業に徵するに、自ら采蒐と注釋の二途に分れたり。今又純文學に就きて察するに、兩漢共に彬々たる文士を出したれば容易に優劣を定め難し、前漢には司馬相如、司馬遷等出で、後漢には班固、張衡、蔡邕、孔融等あり、其の規模筆力創造的頭腦に於ては後漢は前漢に一歩を讓らざるべからず、然れども後漢には詩賦文章の作家頗る多く、史にも更に文苑傳を置くに至れり、故に一般文學思想普及し作家輩出せしは必ず後漢を推すべし、但、摸擬と創造は時代の前後に於て爭ふべからざる結果たらん、要するに前漢の文學は樸厚にして、後漢の文學は謹嚴なり、是れ多くは兩漢創業者に出でたる氣風の反映なり、西漢は稍簡古なれども、後漢は贍整なり、其の簡古と贍整とは人文開展の序に於て免かるべからざる所なり、古來兩漢の文學を論ずる者漫に前漢の創造簡勁を推して後漢を以て剽竊摸擬淫靡頽廢と爲せども固より過當の評從ふべからず、

唯兩漢の文學を以て六朝文學に比較せば其間自ら大差あるを見ん、吾人は將に第二期に入りて魏晉六朝文學を述べんと欲す、請ふ之を見て然る後に漢代文學の特長を知るべし。

中世期第一期秦漢文學　終

第二期　魏晉六朝文學

第一章　總說

第一節　時期

第二期に於て述べんとするは三國より起り隋末に至る文學なり。漢季天下大亂群雄四方に割據し、內には宦官跋扈し、外に清議の徒囂々として朝政を誹謗す、曹操の權日に重くして帝は空しく虛器を擁するのみ、此時に當て孫權劉備も亦各一方に崛起す。餘他の群雄漸く斃れて天下三分の形勢成る、操の子丕は獻帝に迫りて位を讓らしめ國號を魏といひ、洛陽に都す、文帝是なり、劉備は巴蜀に據りて漢統を繼ぎ、蜀漢と名く、孫權も亦帝位に即き、國を吳と號し、建業に都す、之を三國といふ、三國互に相攻爭し、天下寧日なかりき、蜀は諸葛亮を失ひて先づ衰へ、魏は其の相司馬氏專横を極め、曹氏振はず、司馬炎魏を簒ふに及びて吳も亦司馬氏に滅さる、三國分立以來凡そ六十年にして司馬氏復た天下を一統す、國號を晉と稱す、此時五胡漸く中國に割據し、屢〻晉に侵入す、晉は五十三年にして江東に遷り、建業に都す、此より以後を東晉といふ、東晉百〇三年にして滅ふ、東西通じて百五十六年なり。西晉の末より內

地に跋扈せる五胡は百餘年間互に相攻伐せしが、晉將劉裕晉の禪を受け江南を有ちて宋と稱す、劉宋の武帝是なり、鮮卑の拓跋珪は盛樂に魏を建つ、後魏の道武帝是れなり。是に於て支那は南北二朝に分れ、五胡皆な衰ふ。南朝は宋亡びて齊興り、齊繼ぎて梁起る、梁亡びて陳興る、凡て五朝にして隋に至る、北朝は後魏一時隆盛を極めしも、後ち東西に分れ、西魏は長安に都し、東魏は鄴に都す、西魏は宇文覺、其の禪を受けて周と名け、東魏は高洋其の禪を受けて北齊と號す、是に於て陳は江南を有し、北齊は江北を有ち、周は漢湘二水以西を保ちて復た天下三分の形勢を爲せり、周に楊堅出で遂に天下を一統す。之を隋の文帝と爲す。南北兩分してより隋の一統に至るまで凡そ一百六十三年なり、隋は僅かに三十八年にして亡ぶ。魏吳蜀鼎立より隋末に至る、約四百二十年なり、而して六朝とは江南建業に都せし吳、晉、宋、齊、梁、陳の六朝を指して云ふなり、今晉人が中世期の第二期に於て述べんと欲するは吳より隋末に至る約四百二十年の文學なり。

第二節　魏晉六朝時代の思想

後漢の明章二帝の頃より印度思潮漸く浸入し、支那思想は之が爲に多少の機動を

受けたり、且つ漢は前後四百餘年間黄老思想隱然勢力を有し、佛教傳來後は遂に佛老混合の思潮を生じて漢代の原流たる孔孟の教學を浸染し、稍〻一般思想を動ずに至れり、然れども漢末に至るまでは未だ甚だ旺盛ならざりき、顧みて漢季の士人を見るに、高節清議の士は多く黨錮の禍に罹り横死を遂ぐる者少からざりき、是を以て遠識の士は超然遁脱して山林に遊ばんと欲し、爾後漸く風を成せり、老莊は印度思想に助けられて瀰蔓せんとするに際して、黨錮の反響は志士を驅りて塵界を避けしめんとす、此風潮魏晉に至りて頗る隆盛を極めたり、西晉の末年五胡中原に侵入して各地に割據し、漢族と權力を爭ふに及で政海の波瀾愈々高まるに隨ひ、山林を慕ふの士私かに老莊に托して之を避け、所謂清談と稱し、禮を蔑し酒を縱にし、高談放言以て自ら韜晦するの風尚を生じ、山濤、嵇康、阮籍、阮咸、向秀、王戎、劉伶皆な老莊虛無の學を崇尚し、禮法を輕蔑し習俗を破壞し、縱酒昏酣して世事を遺却す、士大夫靡然として之を慕倣し、之を放達と謂ひ、七士を呼びて竹林七賢と號す、其の俗尚の美ならざると知るべし、而して此の放達に出でざる者は徒らに浮華を競ふの風あり き、當時老莊の學盛なりしが故に學者の思想も深く此に得る所あり、向秀、郭象、王

弼の如き、老莊に於て發明する所少しとせず、斯る思想の發して時賦文章と成れる者亦甚だ多し、或は王肅何晏の如きは經義を解するにも往々老莊の旨意を混ずるに至れり、其の思想の變遷以て見るべし。

佛教思想…… 當時老莊思想と相呼應して漸く勢を得し者を印度思想と爲す。五胡中原を侵略するに及で、僧侶は陸續印度より來り、往々にして五胡君長の尊信する所と爲り、隱然政事を與り聽くに至れり、佛圖澄の石趙に於ける、其弟子道安及び鳩摩羅什の符秦、姚秦に於ける、道安の弟子慧遠の東晉に於ける、頗る感化力を有し其の思想を變じ風氣を化せしもの少からず、又鳩摩什等の譯經、道安、慧遠の遺社の如き佛教漸く隆盛にして、殿堂伽藍を建て僧侶を供養すること習尚俗を成し、天下靡然として之に嚮へり、梁の武帝の如き其の尤なる者なり、達摩の來遊も亦武帝の世に在りき。隋書の經籍志に民間佛經、多於六經、數十百倍と云へるもの、以て其の趨勢を察知すべきなり、然れども支那は古來儒教を以て正宗とし來れば、斯る時代に在りても經學の講習は依然として行はれ、支那思想の原流を成せり、道教は佛教と相呼應して進むと雖も、其間自ら異旨ありて存し、且つ其の淵源同じからざれば、佛

教は遂に道教を壓倒するに至らず、

上述の如く魏晉六朝間は思想の元素略〻三教より成り、之を秦漢に比して頗る變遷を見るに至れり。支那南北思潮の混流は已に漢代に於て見たりしも、六朝間に及びて更に其融合の狀を呈し、又た之に加ふるに印度の厭世的思想を以てしたり。然れば此四百餘年の文學は此思想の煥發して章を成せるに外ならざれば、文學史上に之が趨勢を述ぬるも亦決して難からず、然れども支那南北思想が融合を經るに至れるとあるも、未だ以て南北兩思想を根柢より變じたるにはあらず、故に兩地方の學者の取る所の經傳の註釋の如きものも、自ら異れり。魏晉六朝間の思想略上述の如くにして遂に隋唐に及べり、唯思想の點より考察すれば唐は寧ろ六朝の遺風ありと謂ふべし、而も宋に至りては其の思想劃然鴻溝を爲し、實に驚くべき變態を呈せり。其原因を考究すれは遠く六朝隋唐間佛老二教隆盛の反動たるが如し、或は宋學は單に唐代詞章訓詁の反動と見るべきが如きも、唐代の詞章訓詁は副因に過ぎずして、主因は遠く佛老旺盛時代に在るが如し、吾人は嘗て思想は文學に影響するのみならず、文學も亦優に思想を支配し、互に因果の連鎖を爲すあるとを云へり、今や三代秦漢の文學を述べ來りて魏晉六朝に及ぶ、自ら其の相互影響の迹を徵するを得ん。

第三節　魏晉六朝文學概觀

前節既に六朝思想の大略を述べたれば此に六朝文學の梗概を敘し以て思想影響の迹を見んとす、抑も三國鼎立六十年に過ぎずと雖も、其間命世の傑作少しとせず、魏には則ち曹操、文思燦爛、兵馬倥偬の際と雖も猶且つ吟詠を廢せず、所謂槊を横へて詩を賦す、一世の雄たり、曹丕及び弟子建又藻思湧くが如く、彬々然として魏朝の文華を成せり、是に於て鄴下の七子起る、曰く孔融、陳琳、王粲、徐幹、阮瑀、應瑒、劉楨是れなり、斯の七子は學に於て遺す所なく、辭に於て假る所なし、又た劉邵の人物志十三篇あり、文士雲集、同采星の如し、後世の文を稱するもの必ず漢魏を連呼する、洵に偶然ならざるなり、蜀には則ち諸葛亮あり、其文は華實並び備はり、一毫浮薄の氣あるなし、出師表一篇は其の赤誠の溢れて文と成れるもの、直に伊訓說命と相表裏するの傑作たり。晉に至りて武帝踐祚の初に於て大學を起し學士三千餘人に及ぶ、文運駸々たれども漸く老莊清談の風行はれ、文氣も亦稍〻秦漢の遺意を失ふに至れり、其

の百五十餘年間に輩出せし文士の傑出せるものは、阮籍、嵇康、傅玄、葛洪、張華、左思、潘岳、潘尼、劉琨、陸機、陸雲、王羲之、王獻之、張載、張協、陶潛等あり、而して陶潛最も逸趣に富み、韻致高雅、晉文の巨擘と稱せらる、傅玄には、傅子あり、葛洪には抱朴子あり、傅子は治道を論じたるもの、論衡、昌言に似たり、抱朴子は內篇は神仙の事を說き、外篇は時政の得失、人事臧否を論ず、又た史家には陳壽あり、三國志を撰す、魏は四紀、二十六列傳、蜀は十五列傳、吳は二十列傳より成る、文章高簡にして法あり、南北朝に在りては、謝靈運、顏延之、鮑昭等あり、顏謝は一時江左の文豪を以て稱せられ、潘岳、陸機の以後文士の能く及ぶ者なし、顏謝並に詩に名あり、顏延之の庭誥尤も稱せらる、鮑昭には城雉賦、河清頌、等あり、而して其名最も詩に於て著はる、宋の史家范曄は後漢書を撰す、十紀八十列傳を立つ、其文華靡纖巧に流るれども其の頻次の齊整せるは稱するに足る、齊には則ち王儉、王融、謝朓、孔稚珪最も著はる、儉は自ら謝安の風流宰相たるに比し嗜慾寡く、經國を以て務と爲し、又た詩文に工なり、謝朓玄暉は五言詩に於て最も稱せらる、孔稚珪は北文移文を爲る、辭氣共に高し、然れども齊梁間に及びては文學を以て一種の裝飾品と爲すもの多し、梁には武帝、簡文帝、昭明太子、元帝上に在

りて文學を好み、詩賦文章美を爭ひ華を競ふ、六朝の文學此時を以て極盛となし、靡麗輕華も亦其の頂に達せり、昭明太子文選を編輯す、元帝には孝德傳、忠臣傳等あり、時文甚多し、江淹、沈約、蕭子顯、劉勰、鍾嶸、任昉、庾肩吾、何遜等最も名を知らる、淹は少壯文章を以て顯はれしも、晚年藻才少しく退く、約は四聲譜を著はし、宋書を撰す、十紀、三十志、六十列傳より成る、其文は纖弱なれども詳密富贍又た觀るべし、蕭子顯は南齊書を撰す、八紀、十一志、四十列傳を立つ、劉勰の文心彫龍は文士の以て珍と爲す所、五十編前半には文章の體製を論じ、後半は文章の工拙を論ず、蓋し文章詩賦の體已に數變したれば之を品評するの說出づ、魏文帝已に典論を著はし、勰又た文心彫龍を著はす、文體を詳かにし巧拙を評するの書は勰に始まれり、鍾嶸の詩品は古今五言古詩、漢魏より以下百三人、其の優劣を論じ、上中下三品となす、其行文は健にして勰の上に出づ、任昉、庾肩吾、皆な文翰を以て身を立て世に顯はる、

陳には後主字は元秀、文詞を倘び纖微を極む、徐陵は儒佛に兼通し、陳の創業に際して詔策文檄多く陵の手に成る、漢魏以來の詩を編輯して玉臺新咏と名く、江總は詩文を以て後主に知らる、張正見亦清才あり、北朝は魏には溫子昇、高允、齊には魏收、周

には庾信、王褒あり、庾王最も世に知らる、魏收は後魏書を撰す、十二紀、十志、九十列傳、を立つ、然れども金を受けて筆を曲げたるを以て穢史の名を得たり、隋は僅々四十年に過ぎずして亡びたれば文士輩出するに至らず、然れども煬帝學を好み文を善くす、盧思道亦才學兼著はる、王通は隋の碩學と稱せらる、自ら居ると太だ高し、經に擬して書を著はす、門人等其の禮論、樂論、讀書、讀詩、元經、贊易を以て王氏の六經と爲す、中說を以て擬論語と爲す、今は只文中子中說十篇存するのみ、文中子は通の諡號なり、文中子十篇宛然論語の文の如く、自ら孔子を以て任じ門人を以て七十子に擬す、又揚雄の法言に似て、擬似は更に甚しきものなり、

六朝の文學の特色……六朝間の文學の特色を概論すれば、所謂四六駢儷にして徒に纖巧華麗を尙び、整比彫琢を是れ事として、理致深遠なる著作あるを見ず、時に佛教文學の如き遠意にして理趣に富める者あるも、多くは是又意譯的產物に過ぎず、唯夫の陳壽の三國志の如きは直に班馬の筆に比すべく西備にして法あり、能く六朝齊比の寶臼に陷らざるものなり、其の時も亦漸く對偶排律の甚を爲し、四聲譜の作出づるに至れり、斯くて詩文共に氣骨萎靡して詞句の靡麗のみを尙べり、

多くは文學を以て一種の玩弄品と爲し、理を遺れ異を存し、虛を尋ね微を逐ひ、一韻の奇を競ひ、一字の巧を爭ひ、連篇積案も風雪月露の形狀を出でざるものなり、上下滔々として滔靡纖弱の風を逐ひ、日に衰漠の備高直寫の文に違かり、遂に革意をして八代の衰を興すの偉功を奏せしめたり、惟ふに花より實を尙ぶの時代既に過ぎて、六朝は實より花を尙ぶの時代と爲れるならん、

第二章　魏朝文學

第一節　曹氏父子

一、魏武帝

魏武帝、沛國譙の人なり、姓曹、名操、字孟德、軍を御する三十餘年、手に書を捨てず、草書は崔張に亞ぎ、音樂は桓榮に比し、圍棋は王郭に埒す、復た奚性を好み、方藥を解す、實に多才多藝の人なり、漢末の名人、文には孔融あり、武には呂布あり、而して孟德實に其の長を兼ねたり、然れども孟德は元と亂世の姦雄、志漢鼎を覬ふ、其の行爲の如きは世已に定評あり、通鑑に云ふ、帝王の家、文章瑰瑋たるもの、前には曹魏あり、後には蕭梁あり、然れども曹氏最に居ると、孟德著はす所、今八十二篇、敎六篇、表二十篇、奏事

三篇、策一篇、書十八篇、尺牘六篇、序一篇、祭文一篇、樂府十九篇、苦寒行、短歌行、對酒等樂府絶佳と稱せらる、魏武帝集は百三名家集に在り。

短歌行　魏武帝

對酒當歌、人生幾何、譬如朝露、去日苦多、慨當以慷、憂思難忘、
何以解憂、唯有杜康、青青子衿、悠悠我心、但爲君故、沈吟至今、
呦呦鹿鳴、食野之苹、我有嘉賓、鼓瑟吹笙、明明如月、何時可掇、
憂從中來、不可斷絶、越陌度阡、枉用相存、契闊談讌、心念舊恩、
月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可依、山不厭高、水不厭深、
周公吐哺、天下歸心、

苦寒行　魏武帝

北上太行山、艱哉何巍巍、羊腸坂詰屈、車輪爲之摧、樹木何蕭瑟、
北風聲正悲、熊羆對我蹲、虎豹夾路啼、谿谷少人民、雪落何霏霏、
延頸長歎息、遠行多所懷、我心何怫鬱、思欲一東歸、水深橋梁絶、
中路正徘徊、迷惑失故路、游春無宿棲、行行日已遠、人馬同時飢、

擔囊行取薪、斧冰持作糜、悲彼東山詩、悠悠使我哀、

時品に云く、曹公古直、甚有悲涼之句、蓋不如丕亦稱三祖、庾溪詩話に云く、魏武魏文父子、橫槊賦詩、雖適壯抑揚、而乏帝王之度、と、蓋し孟德の樂府は句法高遠頗る麗すべしと雖も、其の令書の如きは往々人を欺くの迹あり、口には經傳を論ずれども其の行固より之に合はず、是又た王莽悲誡の流ならんか。

二、魏文帝

曹丕字は子桓、武帝の太子なり、子桓は戎旅の間に生長し、騎射を善くし、擬劍揮碁に工なり、伎能戲弄、父に減せず、深く文學を好み、著述を以て務と爲し、又た諸儒をして經傳を撰集し、頗に隨ひて相從はしむ、凡そ千餘篇、號して皇覽と曰ふ、其の自ら作る所は、賦三十一篇、詔六十一篇、令十九篇、策四篇、敎一篇、表三篇、書二十七篇、序四篇、論六篇、議一篇、連珠三首、銘二篇、文、哀策、誄、制各一篇、樂府十八篇、詩二十篇、史家評して曰く、文帝天資文藻、下筆成章、博聞强識、才藝兼該、若加之曠大之度、勵以公平之識、遵志存道、克廣德心、則古之賢主、何遠之有哉、子桓の淡の禪を受けしは元と孟德の力に依るのみ、曹魏の帝業固より稱するに足るものなきも、其の文學は直に淡代の隆に比すべ

し、文帝が文章を重んぜしは其の典論の語に徵して知るを得べし、典論論文の前半には文人相輕んずるの弊を言ひ、次に鄴下の七子を評隲せり、今其の後半を左に錄せんとす、

典論論文（前半略之）　魏文帝

夫文本同而末異。蓋奏議宜雅、書論宜理、銘誄尚實、詩賦欲麗、此四科不同、故能之者偏也、唯通才能備其體。文以氣爲主、氣之清濁有體、不可力強而致。譬諸音樂、曲度雖均、節奏同檢、至於引氣不齊、巧拙有素、雖在父兄、不能以遺子弟。蓋文章經國之大業、不朽之盛事、年壽有時而盡、榮樂止乎其身、二者必至之常期、未若文章之無窮。是以古之作者、寄身於翰墨、見意於篇籍、不假車馬之勢、而聲名自傳於後。故西伯幽而演易、周旦顯而制禮、不以隱約而不務、不以康樂而加思。夫然則古人賤尺璧而重寸陰、慢乎時之過已、而人多不competent力、貧賤則慢於饑寒、富貴流於逸樂、遂營目前之務、而遺千載之功、日月逝於上、體貌衰於下、忽然與萬物遷化、斯亦志士大痛也。融（孔）等已逝、唯粲（徐幹）論成一家言。

連珠三首　魏文帝

蓋聞、琴瑟高張、則哀聲發、節士抗行、則榮名至。是以申胥流音於南極、蘇武揚聲於朔裔。

蓋聞、四節異氣、以成歲、君子殊道、以成名。故微子奔走而顯、比干剖心而榮。蓋聞、駕蹇服御、良樂咨嗟、鉛刀割截、歐冶歎息、故少師幸而季梁慢、宰嚭任而伍員憂。

曹植貶乏安鄉侯詔　魏文帝

植、朕之同母弟、朕於天下、無所不容、而況植乎、骨肉之親、舍而不誅、其改封植。

渭稅令　魏文帝

關津所以通商旅、池沼所以御災荒、設禁重稅、非所以便民。其除池御之禁、輕關津之稅、皆復什一。

鑒龐德策　同

昔先軫喪元、王蠋絕脰、隕身狥節、前代美之。惟侯式昭果毅、昭雖成名、聲溢當時、義商在昔、寡人愍焉、鑒曰壯侯。

答卞蘭敎　同

賦者、言事類之因附也、頌、美盛德之形容也、故作者不虛其辭、受者必當其實。蘭此賦豈吾實哉、昔吾丘壽王一賜蜜鼎、何武等徒以歌頌猶受金帛之賜、蘭事雖不德、義足嘉也、今賜牛一頭。

田疇辭封侯

昔遼敦逃祿、傳載其美、所以激濁世勵貪夫、賢於戶祿素餐之人也、故可得而小、不可得而毀、至於田疇、方斯近矣、免官加刑、於法爲重。

陳琳集序　同

上平定漢中、族父都護還、書與余、盛稱彼方土地形勢、觀其辭、如陳琳所敘爲也。

文帝の作、百餘篇、傑作亦少からず、上掲の短文は唯其の諸體を例示するのみ、長篇を掲ぐるとは紙數之を允さず、讀者之を諒せよ。魏文帝集は百三名家集に收む、魏朝の作は文選等にも多く載す、就きて見るべし。

三、陳思王

陳思王植、字は子建、年十歲餘にして詩論及び辭賦數十萬言を誦讀し、善く文を屬す、武帝嘗て其文を視て植に謂つて曰く、汝は人を倩ふかと、植跪きて曰く、言出でて論と爲り、筆を下して章を成す、願みて當に面試せらるべし、何ぞ人を倩はんやと、時に鄴の銅爵臺新に成る、武帝悉く諸子を將て臺に登り、各賦を爲らしむ、植は筆を援て立どころに成る、頗る觀るべし、武帝甚だ之を異とす、植は性簡易にして威儀を治めず、興馬服飾、華麗を尙ばず、進見する每に難問するも辯に應じて對ふ、特に寵愛せらる、然れども植は性に任して、操行自ら彫勵せず、酒を飲みて節せず、嘗て武帝の怒に遭ひ、又た讒人の搆ふ所と爲り、屢〻左遷せられ、常に自ら憤怨し、利器を抱て而して施す所なし、汲々として歡なく、遂に疾を發して斃す、年四十一、其の著はす所は、賦四十七篇、騷九篇、令三篇、表三十七篇、章二篇、書六篇、序三篇、『七』三篇曰く七啓、七哀七略、論十一篇、誄五篇、頌七篇、碑一篇、頌九篇、贊三十四篇、銘二篇、文二篇、誄九篇、哀辭三篇、樂府四十二篇、詩四十餘篇あり、詩品に云く、植詩源出於國風、骨氣奇高、詞彩華茂、情兼怨雅、體被文質、粲溢今古、卓爾不群、嗟乎陳思之于文章也、發人倫之有周孔、鱗羽之有龍鳳、音樂之有琴笙、女工之有黼黻、俾彌懷鉛吮墨者、抱篇章而景慕、映餘烟以自燭、故孔門之門如有詩、則公幹升堂、思王入室、景陽潘陸、自可坐於廊廡之間矣、と。藏死后言に云く、子建天才流麗、雖譽冠千古、而實避父兄、何以故、材太高、辭太華、又云く、子建才敏於父兄、然不如其父兄質、漢樂府之變、自子建始と。子建の遭逢彼の如く慘たり、故に其の詩悲惻慷慨、頗る風人の遺意あり。其の詩の氣格や後人の到り易き所に非ず、陳子昂、李太白も自ら躡ひて以て宗と爲す、鍾嶸の評蓋し溢美に非ざるなり。

升天行二首　　陳思王

乘蹈追術士、遊之逝萊山。靈液飛衆波、闕桂上參天、
玄豹遊其下、翔鵠戲其顛。乘風忽登舉、彷彿見衆仙、

其二

扶桑之所出、乃在朝陽谿。中心陵蒼昊、布葉蓋天涯、
日出登東幹、既夕沒西枝。願得紆陽轡、廻日使東馳、

飛龍篇　　同

晨遊泰山、雲霧窈窕、忽逢二童、顏色鮮好、乘彼白鹿、
手翳芝草、我知眞人、長跪問道、西登玉堂、金樓復道、
授我仙藥、神皇所造、教我服食、遐齡延壽、齊同金石、
永世難老、

楚辭離騷に云く、爲余駕飛龍兮、祗瑤以爲車と、曹植の飛龍篇も亦た求仙を言ふ者、飛龍に乘じて天に昇るは楚辭と同意なり、曹植の一生は屈原の如く極悲ならずと雖、利器を懷抱して施す所なく、怫鬱として疾を發するに至れるは亦憫むべきなり、其

時に遐遊、升天、飛龍、五遊、仙人ある、洵に偶然ならざるなり、凡そ世に不遇なる者厭世の念を起し、人世の永からず俗情の險巇なるを傷み、遠く神仙を求めて六合の外に翺翔せんとするに至る、屈子思王實に其人なり、後の其詩を讀する者只泚然として千古の想ありといふ、屈子思王果して千古泚脫の想ありしか。

怨詩行　　陳思王

明月照高樓、流光正徘徊、上有愁思婦、悲歎有餘哀、
借問歎者誰、自云蕩子妻、夫行踰十載、賤妾常獨棲、
念君過於渴、思君剛於飢、君作商山栢、妾爲淥水泥、
北風行蕭蕭、烈烈入吾耳、心中念故人、淚墮不能止、
浮沈各異路、會合當何時、願作東北風、吹我入君懷、
君懷常不開、賤妾當何依、恩情中道絕、流止任東西、
我欲竟此曲、此曲悲且長、今日樂相樂、別後莫相忘、

班婕妤贊　　同

有德有言、實惟班婕、盈冲其驕、弱其厭悅、在夷貞難、

在晉正接、鄙隱端幹、衝霜振葉、

商山四皓贊　同

嗟爾四皓、避秦隱形、劉項之爭、發志非營、不應朝聘、保節全貞、應命太子、決嗣以寧、

寶刀銘　同

造茲寶刀、既勁既硎、匪以尙武、予身是衛、麟角是觝、懸距匪厭、

若舒誄　同

逝安十二年五月甲戌、童子曹若舒卒、乃作誄曰、

於惟淑弟、懿矣純良、誕豐令質、荷天之光、既哲且仁、爰柔克剛、彼德之容、慈我非行、宜進分祚、以永無疆、如何昊天、凋斯俊英、嗚呼哀哉、惟人之生、忽若朝露、促促百年、營營行路、矧爾既夭、十三而卒、何辜於天、哀命不遂、

第二節　鄴下の七子

魏の文帝の典論に云く、今之文人、魯國孔融文舉、廣陵陳琳孔璋、山陽王粲仲宣、北海徐幹偉長、陳留阮瑀元瑜、汝南應瑒德璉、東平劉楨公幹、斯七子者、於學無所遺、於辭無所假、成以自騁騏驥於千里、仰齊足而並馳、以此相服、亦良難矣、蓋君子審己以度人、故能免於斯、粲而作論文、王粲長於辭賦、徐幹時有齊氣、然粲之匹也、如粲之初征登樓机賦征思幹之玄猿漏巵圓扇橘賦、雖張蔡不過也、然於他文未能稱是、琳瑀之章表書記、今之備也、應場和而不壯、劉楨壯而不密、孔融體氣高妙有過人者、然不能持論理不勝辭、至於雜以嘲戲、及其所善揚班儔也、鄴下七子の評、之を以て鐵案と爲すべし、但孔融徐幹は既に漢代文學の條下に論じたれば此には除く、

二、陳琳　一、除孔融

陳琳字は孔璋、廣陵の人、嘗て何進の主簿と爲る、後ち何進が兵を引きて京城に向ひ太后を劫して宦官を誅せんとせしとき、其の舉の非を諫む、進其言を用ひずして竟に以て禍を取る、琳は難を冀州に避け袁紹に依る、後ち又曹操に歸し阮瑀と共に司空軍謀祭酒と爲り、記室を管す、軍國の書檄は琳瑀の作る所多かりき、琳諸書及び檄

を作り草成りて操に呈す、操先きより頭風を苦む、是日疾發す、臥して琳の作る所を讀みて翕然として起ちて曰く、此れ我が病を愈すと、數厚賜を加へらる、門下皆に徒る、其の著はす所武軍賦五篇、神武賦、止欲賦等十三篇あり、書は爲袁紹上漢帝書、爲袁紹與公孫瓚書あり、頗る有名なり、其他尚ほ數篇あり、檄には爲袁紹檄豫州文、檄吳將校部曲文二篇、並に長篇なり、又た版文一篇、應讌、樂府、詩あり、陳記室集に收む、七子の集は大抵百三名家集にあり。陳琳は書檄に於て稱せられ、殊に健筆を以て著はる、數千言立どころに成る、故に其書檄長文多し、今錄せず。

三、阮瑀

阮瑀字は元瑜、陳留の人なり、曹操に仕ふ、瑀善く音を解し、能く琴を鼓す、司空軍謀祭酒管記室と爲り、後ち倉曹掾屬に徙る、操嘗て瑀をして書を作り韓遂に與へしむ、時に操適〻近出し瑀隨從す、因つて馬上に於て草を具し、書成りて之を呈す、操筆を擱て定むる所あらんと欲す、而も竟に增損する能はざりき。子籍字は嗣宗、竹林七賢の一たり。瑀の著はす所、賦は鸚鵡賦、等賦、紀征賦等四篇、文質論一篇、書は爲曹公作、書與孫權、爲武帝、與劉備書、牋、文、各一篇、詩十二首あり、阮元瑜集あり。

五、王粲 四、除徐幹

王粲字は仲宣、山陽高平の人なり、魏に仕へて侍中と爲る、博物多識、問ひて對へざるなし、嘗て人と共に行き、道邊の碑を讀む、人問うて曰く、卿能く闇誦するやと、曰く能くす、因つて背して之を誦せしに、一字を失はず、其の强記默識率ね此の如し、又た算を善くし詩文に妙なり、筆を擧ぐれば便ち成る、改定する所なし、時人常に以爲へらく宿構ならんと、然れども正に復た精意覃思するも亦た加ふる能はざるなり、其の著はす所、賦は遊海賦、登樓賦、浮淮賦、等二十二篇あり。

槐賦　王粲

惟中唐之奇樹、稟天然之淑姿、超嘯畝而登殖、作階庭之華麗、形禕々以暢條、色采采而鮮明、豐茂葉之幽蔭、履中夏而敷榮、既立本於殿省、植根柢其弘深、鳥明栖而投翼、人望庇而投襟、

嘗は爲劉荊州與袁譚書、同與袁尙書あり、檄一篇、七釋、記、論、迎珠、頌、贊、銘、祭文、樂府、詩等あり、

自古無殉死、達人所共知、秦穆殺三良、惜哉空爾爲、結髮事明君、受恩良不淺、臨沒要之死、焉得不相隨、妻子當門泣、兄弟哭路陲、臨穴呼蒼天、涕下如綆縻、人生各有志、終不爲此移、同知理身劇心亦有所施、生爲百夫雄、死爲壯士規、黃鳥作哀詩、至今聲不虧、

王粲著はす所、六十篇、而も最も辭賦を以て稱せらる。百三家集に王侍中集あり、

六、劉楨

劉楨字は公幹、東平の人なり、文辭巧妙を以て諸公子に親愛せらる、其の著はす所賦は魯都賦、大暑賦等六篇、書四篇、碑一篇、詩十四篇あり、楨は特に五言詩を以て稱せらる、

贈徐幹（是時徐在西掖劉在東省故有此時）　劉楨

誰謂相去遠、隔此西掖垣、拘限清切禁、中情無由宣、思子沈心曲、長嘆不能言、起坐失次第、一日三四遷、步出北寺門、遙望西苑園、細柳夾道生、方塘含清源、輕葉隨風轉、飛鳥何翩翩、乖人易感動、涕下與紛連、仰視白日光、皦皦高且懸、燈燭入紘內、物類無頗偏、我獨抱深憂、不得與比焉、

劉公幹集あり、鍾嶸の詩品に云く、其源出古詩、思王而下楨稱獨步と。

七、應瑒

應瑒字は德連、汝南の人なり、祖奉字は世叔、才敏にして善く諷誦す、故に世に應世叔の讚書五行俱に下ると稱す、後序十餘篇を著はす、子劭字は仲遠亦た博學多識、尤も事を好む、其の遷述する風俗通等凡そ百餘篇、辭は典雅ならずと雖も世人其の博聞に服しき、劭は又た中漢輯敘漢官儀及禮儀故事、凡十一種百三十六卷を著はす、劭の弟珣、字は季瑜、即ち瑒の父なり、瑒は楨と共に曹操に仕ふ、後ち五官將文學と爲る、其の著はす所の賦は慨嘆賦、迷迭賦、征賦等十一篇、書、論各一篇、雜文二篇、詩六篇あり、最も賦に長す。

鵾鷄賦　應瑒

何翩翩之鵾鳥、表衆黯之殊色、被光耀之鮮羽、流玄黃之華飾、苞明哲之弘慮、從陰陽之消息、秋風厲而潛形、若神發而勁翼、

應德連集あり、百三名家集之を收む。以上を鄴下七子と稱す。曹氏父子上に唱へ七子

下に應ず、漢末魏初の文學此等十子を以て脊梁と爲す。

第三節　應璩、劉邵

一、應璩

應璩字は休璉、汝南の人なり、博學好て文を屬し、善く書記を爲くる、後ち侍中と爲り、著作を典る、其の著はす所、凡五篇、書三十三篇、詩十三首、最も書を以て稱せらる、其の文秀絶なり、

與武帝爲貴琳賤　應璩

璩聞、風雲浮、則應龍翔、治道明、則備義臻、是故良哉之歌、興於唐堯之世、多士之頌、形於周文之朝、竊見太子舍人貴琳字琳伯、京性純和、體素清、宜授以千里之塗、任以列曹之職、

與劉文遠書　同

僕頃倦遊、閑之事、欲修無爲之術、不能與足下齊鑣騁轡、千里之表也、

與夏侯孝智書　同

遭值有道之世、免致貧賤之患、拔鑑自照、髮已半白、殊可慨也、

與王子雍書　同

卿校之從、有職之事、足下著書、不起草、占授數萬言、言不改定、事合古典、莫不歎息之矣。

與劉公幹書　同

鵾鷄棲翔鳳之條、鼉鼉游昇龍之淵、識異者所爲憤結也。

與韋仲將書　韋誕字仲將時　同

夫以原憲、懸磬之居、而值皇天無已之雨、室宇漸而作漏、堂館洽而爲泥、薪蒿既盡、舊穀亦傾、屠蘇發撤、機檐見誅、道無顏子不改之志、退無揚雄晏然之情、是以惶惑、良不可堪、人非神仙、須仰衣食、方今體塞心飽、愛在旦夕、而欲東希許昌治生之物、西望陸縣厨食之祿、誠恐將爲牛蹄中魚、卒鮑氏之肆矣。

璩の發明は實に魏の韋仲將なり、仍て今之を附記す。

二　劉邵

劉邵字は孔才、邯鄲の人なり、撰する所、法論、人物志の類百餘篇ありしも、法論は今傳はらず、人物志も或は唯十六篇といひ、或は唯十二篇といふ、而して今見る所は十二篇あり、九徵、體別、流業、材理、は上卷に收め、材能、利害、接識、英雄、八觀は中卷に收め、七經、效難、釋爭は下卷に收む。此書は主として人才を論辨し、以て外は之が符驗を見はし、

内は之が器を藏む、流品を分別し、疑似を研析す、故に隋志以下皆な名家に擬錄す、然れども言ふ所は物情を究めて精覈理に近し、尹文子の說に類し、兼て黃、老、申、韓、公孫龍の說を陳ぶ、唯堅白同異を析つものとは遙かに同じからず、蓋し其の學は名家に近しと雖も、其の理は即ち儒に乖かざる者なり、漢魏遺書に載する所の人物志は每篇の首に解題十六字を存す。茲には只八觀篇を示さん、八觀者、一曰、觀其奪救以明間雜。二曰、觀其感變以審常度。三曰、觀其志質以知其名。四曰、觀其所由以辨依似。五曰、觀其愛敬以知通塞。六曰、觀其情機以辨恕惑。七曰、觀其所短以知其長。八曰、觀其聰明以知所達と、他篇も亦此に類す、以て名家に似たるを見るべし。

三　鍾會　王弼

鍾會字は士季、潁川長社の人、才數技藝あり、而して博學にして名理を精練す、仕へて司徒と爲る、會は弱冠にして王弼と並に名を知らる、後ち專ら功業を期して立言に暇なかりしと雖も、其の論著する所少しとせず、魏志に云ふ、道論二十篇會の文筆に係る、實は刑名家なりと、今之を見るを得ず、會又た「易無互體」「才性同異」を論ず、孔雀賦、菊花賦等、四篇、移蜀檄、平蜀奏、書三篇、記、傳、論あり、皆な彬彬として儒雅たるを失はず。

鍾司徒集あり、

因に云ふ、王弼は辭才逸辯、好みて儒道を論ず、易及び老子を注し、尙書郎と爲り、年二十餘にして卒しき。

上述魏朝文學は只其の一斑に過ぎずと雖も、大要亦此の如きのみ、三國並立殆んと六十年なれども、文學上より觀察するときは吳蜀は寥々として其人を見ず、但諸葛亮は武に雄なるのみならず文に於ても優に蜀漢を代表するに足るべし、故に今之を揭げんとす。

第二章　蜀漢文學

諸葛亮字は孔明、琅琊陽都の人なり、南陽に寓し、躬ら隴畝に耕し、聞達を求めず、好みて樂毅、管仲、樂毅に比す、誠書其の大略を觀るのみ、司馬徽、徐庶等、進に之を劉備に薦めて曰く、「諸葛亮臥龍也」と、備草廬に三顧して乃ち見る、因て人を屏けて俱に當年の經綸を語る、是に於て備亮二人情好日に密なり、關羽、張飛等悅ばず、備之を解して曰く、孤の孔明あるは猶ほ魚の水あるが如し、願くは諸君復た言ふ勿れと、羽飛乃ち止みき、是より二十有七年、純忠至誠、蜀の爲めに盡くせり、卒して武

侯と謂しき、其の著はす所、梁父吟、草廬策對、爲後主伐魏詔、前後出師表、薦呂凱表、與李平疏、街亭自貶疏、上事疏、正議、絕盟好議、教、書、帖、記、碑、論、令、說、戒言、心書五十條等あり。心書には兵機、遂惡、知人、性、將材等あり、諸葛丞相集四卷世に行はる、然れども後三卷は附錄なり、或は諸葛武侯集といふ。

梁父吟

步出齊城門、遙望蕩陰里、里中有三墳、纍々正相似、
問是誰家墓、田疆古冶氏、力能排南山、文能絕地紀、
一朝被讒言、二桃殺三士、誰能爲此謀、相國齊晏子、

諸葛亮

寓言二則

同

(イ)我心如秤、不能爲人作輕重。

同

(ロ)昔孫叔敖飛馬三年、不知乾牡、稱其賢也。

誡子書

夫君子之行、靜以修身、儉以養德、非澹泊無以明志、非寧靜無以致遠、夫學欲靜也、才欲學也、非學無以廣才、非靜無以成學、慆慢則不能研精、險躁則不能理性、年與時馳、意與日去、遂成枯落、多不接世、悲守窮廬、將復何及。

同

出師表の如きは伊訓、說命と相表裏すと稱せらるゝ者にして、至誠純忠、紙面に溢る、古來相傳ふ、出師表を讀みて泣かざるものは忠義の心なき者なりと、孔明の文は多からざるも能く千載に其の名を傳ふ、蜀漢の文學唯一孔明を推すべきのみ、今左に前出師表を示さん

出師表

諸葛亮

先帝創業未半而中道崩殂、今天下三分、益州疲敝、此誠危急存亡之秋也、然侍衛之臣、不懈於內、忠志之士、忘身於外者、蓋追先帝之殊遇、欲報之於陛下也、誠宜開張聖聽、以光先帝遺德、恢弘志士之氣、不宜妄自菲薄、引喻失義、以塞忠諫之路也、宮中府中、俱爲一體、陟罰臧否、不宜異同、若有作奸犯科及爲忠善者、宜付有司論其刑賞、以昭陛下平明之治、不宜偏私、使內外異法也。

侍中侍郎郭攸之、費禕、董允等、此皆良實、志慮忠純、是以先帝簡拔以遺陛下、愚以爲宮中之事、事無大小、悉以咨之、然後施行、必能裨補闕漏、有所廣益、將軍向寵、性行淑均、曉暢軍事、試用於昔日、先帝稱之曰能、是以衆議舉寵爲督、愚以爲營中之事、悉以諮之、必能使行

陣和睦、優劣得所、親賢臣、遠小人、此先漢所以興隆也、親小人、遠賢臣、此後漢所以傾頽也、先帝在時、每與臣論此事未嘗不嘆息痛恨於桓靈也。侍中尚書、長史參軍、此悉貞亮死節之臣、願陛下親之信之、則漢室之隆、可計日而待也。

臣本布衣、躬耕於南陽、苟全性命於亂世、不求聞達於諸侯、先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以當世之事、由是感激、許先帝以驅馳、後值傾覆、受任於敗軍之際、奉命於危難之間、爾來二十有一年矣、先帝知臣謹慎、故臨崩寄臣以大事也、受命以來、夙夜憂歎、恐託付不效、以傷先帝之明、故五月渡瀘、深入不毛、今南方已定、兵甲已足、當奬率三軍、北定中原、庶竭駑鈍、攘除姦凶、復興漢室、還于舊都、此臣所以報先帝而忠陛下之職分也、至於斟酌損益、進盡忠言、則攸之、禕、允之任也、願陛下託臣以討賊興復之效、不效則治臣之罪、以告先帝之靈、若無興德之言、則責攸之、禕、允等之慢、以彰其咎、陛下亦宜自謀、以諮諏善道、察納雅言、深追先帝遺詔、臣不勝受恩感激、今當遠離、臨表涕泣、不知所云。

孔明出師表、李令伯陳情表皆名篇然として肺腑中より流出す、殊に斧鑿の痕を見ず、規模正大にして、志念遠深なり、吳魏の國未だ此人物此文章あるを聞かず。東坡曰く、孔明出師一表、簡而且盡、直而不肆、大哉言乎、與伊訓說命相表裏、非秦漢而下事、君爲悅者所能至也と。

第三章　晉代文學

第一節　西晉文學

一　阮籍

阮籍字は嗣宗、陳留尉氏の人なり、魏末晉初に出づ、容貌環傑、志氣宏放、傲然獨得、任性不羈、而も喜怒色に形はれず、或は戶を閉ぢ書を讀みて累月出でず、或は山水に登臨し、日を經て歸を忘る、博く群籍を覽、尤も莊老を好む、酒を嗜みて能く嘯き、善く琴を彈ず、其の得意に當ては忽ち形骸を忘る、籍本と濟世の志ありしも、魏晉の際に屬し、天下多故、名士全きを得る者少し、籍是に由て世事に與からず、遂に酣飲を常と爲し、籍嘗て步兵厨營人善く釀し貯酒三百斛ありと聞き、乃ち步兵校尉と爲らんとを求めて世事を遺落せりと、禮教に拘らずと雖も、然も發言玄遠、口に人物を臧否せず、性至孝なりき、籍又能く青白眼を爲す、禮俗の士を見るときは白眼を以て之に對し、放達の士を見るときは青眼を以てせり、籍能く文を屬す、其の著はす所、東平賦、元父賦、首陽山賦、清思賦等六篇あり、賤、奏記、書各數篇、樂論、通易論、達莊論、通老論四篇は皆

長文なり、又大人先生傳一篇あり、頗る長篇にして籍の胸懷本趣を描けるものなり、老子贊、孔子誄、弔文、鵩赤猿帖、詩は詠懷詩三首、詠懷八十二首等あり、阮步兵集に收む。蓋し樂論、通易、達莊、通老は籍の思想の高遠を見るに足る、夫の王弼郭象二氏も通易、達莊の環内を脱する能はざるなり、曹氏父子は詞壇に虎步し、文を論ずるは餘われど理を言ふは足らず、籍は理致に於て獨り高步し、又文を善くす、今短文なる通老論を示さん。

通老論　阮籍

聖人明於天人之理、達於自然之分、通於治化之體、審於大順之訓、故君臣垂拱、完太素之樸、百性熙怡、保性命之和、道者法自然而爲化、侯王能守之、萬物將自化、易謂之太極、春秋謂之元、老子謂之道、三皇依道、五帝仗德、三王施仁、五霸行義、强國任智、蓋優劣之異、薄厚之降也。

詠懷詩三首錄二首　同

天地網組、元精代序、清陽曜靈、和風容與、明月耿天、甘露被宇、蓊鬱高松、椅那長楚、草蟲哀鳴、鴛鴦翼振羽、感時興思、企首延佇、於赫帝胤、伊衡作輔、才非允文、器非經武、適彼沅湘、託分漁父、便哉游哉、爰居爰處、

鍾嶸の詩品に云く、阮籍詩、其源出於小雅、無雕蟲之功、而詠懷之作、可以陶性靈、發幽思、言在耳目之內、情寄八荒之表、洋洋乎會於風雅、使人忘其鄙近、自致遠大、頗多感慨之詞、厥旨淵放、歸趣難求と。

二　嵇康

嵇康字は叔夜、譙國銍の人なり、奇才あり、遠萬不群、身長七尺八寸、詞氣に美にして風儀あり、形骸を土木にして自ら藻飾せず、人以て龍章鳳姿天質自然と爲す、恬靜寡慾垢を舍て環を脫し、寬簡にして大量あり、學は師受せず、博覽該通せざるなし、特に老莊を好む、仕へて中散大夫と爲る、嘗て發性服食の事を修め、琴を彈じ詩を詠じ自ら懷に足れりとす、其の交る所の士、阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎等あり、共に放達不羈の人にして竹林の遊を爲す、世に所謂竹林七賢なり、康は音を好み、理を談じ、又能く文を屬す、其の高情遠趣、率然玄遠なり、上古以來の高士を擬びて之が傳贊を撰びき、蓋し其人を千載に友とせんと欲するなり、其の著はす所、琴賦、懷香賦、與山巨源絶交書、與呂長悌絶交書、卜疑集、論には釋私論を著はして君子無私をいひ、又た養生論、答

難養生論、聲無哀樂論、明膽論、管蔡論等あり、贊には原憲贊、許由贊等五篇あり、太師箴を著はして帝王の道を明かにし、家誡、樂府一篇、詩、四十有二首、琴中散集あり、卜疑集の初に云く、有宏達先生者、恢廓其度、寂寥疏濶、方而不制、廉而不割、超世獨步、恢王被禍、交不苟合、仕不期達、常以爲忠信篤敬、直道而行之、可以居九夷、遊八蠻、浮滄海、踐河源、甲兵不足忌、猛獸不爲害、是以機心不存、泊然純素、從容縱肆、遺忘好惡、以天道爲一指、不識品物之細故也、然而大道既隱、智巧滋繁、世俗膠加、人情萬端、利之所在、若鳥之追鱉、富爲積薪、貴爲聚怨、勤者多累、靜者鮮患、爾乃思丘中之隱士、樂山上之執竿也、於是遺念長想、超然自失、郢人既沒、誰爲吾質、聖人吾不得見、冀田之於數術、乃適太史貞父之廬、而訪之、曰、吾有所疑、願子卜之、貞父乃危坐操蓍、拂几陳龜、白云々と、恰も屈原の卜居の如し、蓋し嵇康等竹林七士の世に處る、禮俗を脱し酣飲を事とす、頗る嫌忌すべしと雖も、皆な憤懣逸氣然らしむるのみ、

（四八六）

三　杜預　荀勗

杜預……字は元凱、京兆杜陵の人なり、博學多通、興廢の道に明かなり、常に言ふ、徳ば以て企及すべからざるも立功立言は庶幾ふべしと、又た常に言ふ、高岸は谷と爲り、深谷は陵と爲る、刻石二碑を爲り、其の勳績を紀し、一は萬山の下に沈め、一は峴山の上に立つべしと、預既に功を立つるの後ち、從容無事、乃ち經籍に耽思して、春秋左氏經傳集解を爲り、又た衆家の譜第を參考して之を釋例と謂ふ、又た盟會圖、春秋長歷を作り、一家の學を備成せり、又た女記讃を撰す、當時論者謂へらく、預の文義質直と、初め世人未だ之を重ぜざりき、卒する時年六十三、征南大將軍開府儀同三司を追贈せらる、杜征南集あり、元凱は詩賦の作なし、蓋し彫蟲の末技として之を謝して自ら經傳に彌綸したるか、遂に立言立功の二不朽を成せり、左傳に杜元凱ありは猶ほ六經に孔孟あるが如し、杜集には疏奏、表議、書、序、論、說、誄、令等あれども、達意を主として唯質直なるのみ

荀勗……字は公曾、潁川潁陰の人、博學にして從政に達す、一時の名族たり、又た詩文を善くす、荀公曾集あり、賦、奏、表、對、議、書、序、樂歌、詩あり、四廂樂歌最も知らる、曰く、正旦大會行禮歌、王公上壽歌、食舉樂東西廂歌、正徳大豫舞歌是れなり。

四　傅玄

傅玄字は休奕、北地泥陽の人なり、少くして孤貧、博學、善く文を屬す、鐘律を解す、性剛

勁亮直、人の短を容るゝ能はず、少時難を河内に避く、專心師學し、後ち顯達すと雖も著述廢せず、傅子數十萬言、幷に文集百餘卷、世に行はると(本傳)、史家曰く、傅玄は强直の姿を體し、匪躬の操を懷き、抗辭正色、闕を補ひ遺を彌く、當朝に嶷々として其職を忝しめずと、傅鶉觚集あり、其賦は朝會賦、正都賦、陽春賦、弔秦始皇賦等六十餘篇の多きあり、其他、墓誌銘、疏、表、奏、議、序、論、贊、箴、銘、誡、頌、設難、誄、祝文、服等頗る多し、又た樂府は郊祀歌、夕牲歌、饗神歌、降神歌、征西將軍登歌等八十六篇あり、詩は答程曉詩、天行篇、日昇篇、三光篇、衆星詩等三十餘篇あり、玄と陶潛は晉時の日月の如しといふ、太康中に至て玄及び張華、張載、張協、陸機、陸雲、潘岳、潘尼、左思あり、詩體此に至て漸く一變す、世稱して太康體といふ、讀者當に之を一觀すべし。

傅玄

鷹賦

含炎離之猛氣兮、受金剛之純精、獨飛時於林野兮、復廻翔於天庭、左看若側、右視如傾、頸融二六、機連體輕、鉤爪懸芒、足如枯荆、嘴利吳戟、目顯星明、雄姿邈世、逸氣橫生、

正旦大會行禮歌四章

天鑑有晉、世祚聖皇、時齊七政、朝此萬邦、

鐘鼓斯震、九賓備禮、正位在朝、穆穆濟濟、

煌煌三辰、實匹千天、君后是象、威儀孔虔、

率禮無愆、莫非遵德、儀刑聖皇、萬邦惟則、

秋閨篇

秋閨蔭王池、池水清且芳、芙蓉隨風發、中有雙鴛鴦、

雙魚自踴躍、兩鳥時徊翔、君其歷九秋、與妾同衣裳、

芙蓉四言

煌煌芙蓉、從風芬馥、照以旰日、灌以清波、陰結其實、

陽發其華、金房綠葉、素株翠柯、

雜詩五言

志士惜日短、愁人知夜長、攝衣步前庭、仰觀南雁翔、

玄景隨形運、流響歸空房、清風何飄飄、微風出西方、

繁星依青天、列宿自成行、蟬鳴高樹間、野鳥號東廂、

纖雲時舒蹙、渥露沾我裳、良時無停景、北斗忽低昂、

常恐憔悴至、凝氣結爲霜、落葉隨風摧、一絕如流光、

傅子……傅子は玄の撰する所なり、本傳に云く、玄は經國九流及び三史の故事を論撰し、得失を斷して、各、區別を爲し、名けて傅子といひ、內外中篇と爲す、凡て四部六錄あり、合せて百四十首、數十萬言ありと、其の初め內篇を爲るや、以て司空王沈に示せしに、沈、書を玄に與へて云く、足下著はす所の書を省るに、言富み理濟り、政體を經綸し、儒教を存重し、以て楊墨の流を塞ぐに足ると、然れども現存の篇章は唯散逸の餘に采掇せられたるものに過ぎず、而して其の文義の完備せるものは、正心、仁論以下十二篇にして、文義未だ全からざるもの亦十二篇あり、問政、治體以下の諸篇是れなり、四庫全書總目に云く、玄の書、論ずる所、皆治道に關切にして、儒風を闡明し精意名言、往々にして在り、以て論衡、昌言に視ぶれば、皆當さに之を遜るべし、殘編斷簡缺佚の餘に收拾せらるゝもの、尙以て其の什一を考見することを得、是亦以て寶貴と爲すべしと、蓋し溢美に非るべし。

五　張華

張華字は茂先、范陽方城の人なり、學業優博、辭藻溫麗、朗贍多通、圖緯方伎の書、詳覽せざるなし、初め未だ名を知られず、鷦鷯賦を著して以て自ら寄す、陳留の阮籍之を見て嘆じて曰く、王佐の才なりと、是に由て聲名始めて著はる、後ち仕へて大に顯れ、頗る謀謨の勳あり、晉の儀禮憲章多くは華の手に依て制定せられ、當時詔誥皆な其の草定する所、聲譽日に益〻盛なりき。後ち司空と爲り、著作を領す、輔弼の功極めて大なり、然れども太子の事に因て誅せらる、朝野之を悲痛せざるなし、華は雅と書籍を愛す、身、死するの日、家に餘財なし、唯文史ありて、機篋に溢る、嘗て居を徙す、戚書三十乘、秘書監雖虞の官書を撰定せしとき、皆な華の本に資て以て正を取れり、天下の奇秘、世の希有なる所、悉く華の所に在り、是に由て博物洽聞與に比するものなし、博物志十篇及び文章を著はす、張茂先集あり、初め陸機兄弟、志氣高爽、自ら吳の名家を以て洛に入りしとき、中國の人士を推さゞりしも、華を見るや一面して舊相識の如く、華の德範を敬ひ、師資の禮の如くせり、華の誅後誄を作り、文詠德賦を爲りて以て之を悼みき。

六　孫楚　摯虞

孫楚……字は子荆、太原中都の人なり、才藻卓絕爽邁不群、凌傲する所多く鄉曲

の譽を缺けり、惠帝の初め仕へて馮翊太守と爲る、孫馮翊集あり、笑賊、登樓賦、井賦、雪賦等十七篇、屈建論、頌二篇、贊九篇、銘二篇、碑二篇、疏三篇、牋、書各二篇、爲石苞與孫皓書、與董京書、其外、哀文二篇、詩六首あり、就中爲石苞與孫皓書、最も佳筆なり、

摯虞　……字は仲洽、京兆長安の人なり、少きとき皇甫謐に事ふ、才學通博、著述倦まず、嘗て謂へらく、死生有命、富貴在天と、故に思游賦を作りき、賢良に舉げられ、夏侯湛等十七人と共に對策して上第と爲り、中郎に拜せらる、吳寇新に平らぎ天下乂安なりし時、太康頌を上りて以て晉德を美む、後ち光祿勳太常卿と爲る、蘇太常集あり、虞は文章志四卷を撰し、三輔決錄を注解し、又た古文章類聚を撰し、區分して三十卷と爲し、名けて流別集と曰ひ、各〻之が論を爲る、辭理愜當、世の重ずる所と爲れり、又た、嘗て族姓昭穆十卷を撰し、特に法典に明かなりき、詩賦文章固より張茂先に遜る、而も儀禮の諸文は最も宏辨と稱せらる、虞は杜元凱、束廣微と並に勢猶ほ鼎足の如くなりき、其の文章流別論には頌、詩、七、賦、箴、銘、誄、哀辭、文、圖讖、碑銘を論ず、文士の當に一讀すべきものなり、今一二を掲げんとす、

箴

楊雄依虞箴、作十二州十二官箴、而傳于世、不具九官、崔氏累世彌縫其闕、胡公又以次其首目、而爲之解、畧曰、百官箴。

誄

時頌箴銘之篇皆有往古成文可倣依而作、唯誄無定制、故作者多異焉、見於典籍者、左傳有魯哀公爲孔子誄。

哀辭

哀辭者誄之流也、崔瑗、蘇順、馬融等爲之、率以施於童殤夭折、不以書終者、建安中文帝與臨淄侯各失稚子、命徐幹、劉楨等爲之哀辭、哀辭之體、以哀痛爲主、緣以嘆息之辭。

七、束晳　夏侯湛　傅咸

束晳……字は廣微、陽平元城の人、博學多聞、兄璆と俱に名を知らる、少くして國學に游ぶ、或人博士曹志に問うて曰く、當今好學者誰ぞと、志の曰く、陽平の束廣微、好學倦まず、人及ぶなきなりと、仕へて佐著作郎と爲り、晉書帝紀十志を撰し、遷つて博士に轉せしも著作故の如し、本傳に云く、初太康二年、汲郡人不準、盜發魏襄王墓、或言安釐王冢、得竹書數十車、其紀年十三篇、記夏以來至周幽王爲犬戎所滅、以事接之、三家

分仍述魏事至安釐王之二十年蓋魏國之史書大略與春秋皆多相應其中經傳大異則云夏年多殷益于啓位啓殺之太甲殺伊尹文丁殺季歷自周受命至穆王百年非穆王壽百歲也幽王既亡有共伯知者攝行天子事非二相共和也其易經二篇與周易上下經同易繇陰陽卦二篇與周易略同繇辭則異卦下易經一篇似說卦而異公孫段二篇公孫段與邵陟論易國語三篇言楚晉事名三篇似禮記又似爾雅論語師春一篇書左傳諸卜筮師春似是造書者姓名也瑣語十一篇諸國卜夢妖怪相書也梁丘藏一篇先敘魏之世數次言丘藏金玉事級書二篇論弋射法生封一篇帝王所封大曆二篇鄒子談天類也穆天子傳五篇言周穆王游行四海見帝臺西王母圖詩一篇書贄之屬也又雜書十九篇周食田法周書論楚事周穆王美人盛姬死事大凡七十五篇七篇簡書折壞不識名題冢中又得銅劍一枚長二尺五寸漆書皆科斗字初發冢者燒策照取寶物及官收之多燼簡斷札文既殘缺不復詮次武帝以其書付秘書校綴次第尋考指歸而以今文寫之皆在著作得觀竹書隨疑分釋皆有義證皆才學博通著述所三魏人士傳七代通紀晉書紀志亂に遭ひて亡失す其の五經通論發蒙記補亡詩文集數十篇世に行はるといふ東廣微集あり。

夏侯湛……字は孝若譙國譙人なり幼より盛才あり文章宏富善く新詞を構て容觀を美にす潘岳と友とし善し時々與を同じくす時人之を連璧と稱しき惠帝の時仕へて散騎常侍と爲る著論三十餘篇別に一家の言を爲す初め湛は周詩成を作り以て潘岳に示す岳曰く此文は徒に温雅なるのみならず乃ち別に孝悌の性を見ると岳此に因て遂に家風詩を作る夏侯常侍集あり賦二十四篇設難には抵疑あり抵疑は班固の賓戲蔡邕の釋誨の流なり世最も之を稱す史家の贊に云く湛稱弄翰縟彩彫煥才高位卑往哲攸嘆と。

傅咸……字は長虞剛簡にして大節あり風格峻整識性明悟惡を疾むこと仇の如く賢を推し善を樂む常に季文子仲山甫の志を慕ふ好みて文論を屬す綺麗足らずと雖も言は規鑑を成す潁川の庾純常に歎じて曰く長虞の文は詩人の作に近しと官御史中丞に至る時に朝廷寛弛豪右放恣交私請託朝野溷淆咸屢上表して時事を痛言し補正する所多かりき史家贊して曰く長虞風格凝峻弗堅家聲及其納汝南獻書臨晉居諒直之地有先見之明矣と傅中丞集あり賦三十九篇疏表奏上書彈文、箋敎草書尺牘頌箴銘碑銘誄詩あり、

勸王戎奏、

昔稱三載考績、三考黜陟幽明、今內外群官、居職未期、而戎奏還、未定其優劣、且送故迎新、相望道路、巧詐由生、傷農害政、戎不仰依堯舜典謨、而驅動浮華、虧敗風俗、非徒無益、乃有大損、宜免戎官、以敦風俗、

答潘尼詩并序　同

司州秀才潘正叔、識通才高、以文學溫雅、爲博士、余性直而處清論、憂貶之任、作詩以見規、雖褒飾之異、非所敢明、而斐爍之辭、亦可樂也、答之雖不足以相酬報、所謂盡各言志也。

貽我妙文、警寀之榮、匪榮期尙、乃新其聲、吉甫作頌、有覭其聲、寔由樊仲、其德克明、授此瓦礫、厠彼瑤瓊、貺非其喻、閎衢若驚。

九、潘尼

潘尼字は正叔、少より清才あり、岳と俱に文章を以て知らる、性靜退曉はず、唯勤學著述を以て事と爲し、安身論を著はし守る所を明かしき、仕へて太常博士と爲る、著作郎に轉ぜしとき、乘輿織を爲る、永嘉中に太常卿と爲る、洛陽將に沒せんとす、家屬を

潘岳字は安仁、滎陽中牟の人なり、少より才穎を以て稱せられ、鄉邑號して奇童となし、終、賈の僞なりと聞へり、太始中に武帝躬ら籍田に耕す、岳は賦を作つて以て其事を美す、岳の才名世に冠たりしを以て衆の疾む所と爲り、遂に栖遲十年、出でゝ河陽令と爲る、其の才を負うて鬱々として志を得ず、嘗て長安令と爲り西征賦を作り、經る所の人物山水を述ぶ、文清く旨詣る、尋で著作郎と爲り、又た給事黃門侍郎と爲る、岳性輕躁にして世利に趨り、石崇等と賈謐に諂事し、其の出づるを俟ふ每に、崇と輙く塵を望みて拜す、然れども仕宦遂せず、乃ち閑居賦を作る、後ち孫秀の爲に囚告せられて死しき、岳は姿儀に美く、辭藻絕麗、尤も善く哀誄の文を爲る、史家の贊に曰く、岳、實合章、藻思抑揚、趨權冒勢、終亦羅殃と。潘黃門集あり、西征賦、籍田賦、閑居賦、秋興賦、寡婦賦等最も筆力を見るに足る、賦凡て二十篇あり。哀、讚、頌、贊、箴、訓、碑、哀文、祭文、誄、時等あり、特に哀辭、誄の作多しとす、然れども辭多ければ今錄せず、最短の文を掲ぐるのみ。

爲任子咸要作孤女澤蘭哀辭、

澤蘭者任子咸之女也、涉三齡、未沒喪而殞、余聞而悲之、遂爲其母辭。

茫茫造化、爰啓英淑、猗猗澤蘭、應靈誕育、鬒髮蛾眉、巧笑美目、顏耀榮茝、華茂時菊、如金之精、如蘭之馨、淑質弭暢、聰慧日新、朝夕厥復、夙夜靈勤、彼若者天、哀此矜人、初寧不惠、忍予眇身、伊爾嬰孺、微命弗振、俯覽衾襟、仰訴穹旻、弱子在懷、既生不遂、存靡託躬、沒無遺類、耳存遺響、目想餘顏、寢席伏枕、摧心割肝、相彼鳥矣、和鳴嚶々、翅伊蘭子、音影冥々、彷徨丘隴、徙倚墳塋。

庾倫書誄

同

寬而能懷、威而不猛、化行如形、民應如影、曖曖虛坐、翩々玄幕、几席生塵、空館寥廓。

賈充誄

同

年踰知命、位極人臣、家無餘祿、貴而貧身。

（右一節は支那文學史四九六頁潘尼の前に入るべかりしを誤りて脫したるを以て正す）

拯〻て東の方、成皐に出で鄉里に還らんと欲して道に賊に遇ひ前むを得ず、終に病て卒しき、潘太常集あり、賦十六篇、頌二篇、箴、論、序、銘各一篇、碑二篇、誄二十篇あり。乘輿箴、安身論最も稱せらる。

答陸士衡

潘尼

顧茲蓬蔚、回根蘭陂、脊澤雖均、華不足披、遂春不茂、未秋先萎、子湛鱗翼、我挫羽儀、願言難常、載合載離、昔遊禁闥、祗畏夕惕、今放丘園、縱心夷易、口詠新詩、目玩文跡、予志耕圃、爾勤王役、悠悠無琬琰、以酬尺璧、

十、陸機　陸雲

陸機……字は士衡、吳郡の人也、少より異才あり、文章世に冠たり、儒術を伏膺し禮に非れば動かず、年二十のとき、吳滅び、舊里に退居し門を閉ぢて勤學十年、以爲へらく、孫氏吳に在りて祖父世將相と爲り江表に大勳ありと、深く孫皓畢て之を乘てしを慨き、乃ち機の得る所以、皓の亡ぶ所以を論じ、又其の祖父の功業を述べんと欲し、遂に辨亡論二篇を作る、太康の末に弟雲と俱に洛に入り、太常張華に造る、華素と

其名を重じ、一見舊相識の如し、嘗て豪士賦を作りて齊王冏を刺る、冏之を悟らずして竟に以て敗れぬ、機又以爲へらく、畧王經國の義は封建に在りと、因て其の遺指を採りて五等論を著はす、後ち平原内史と爲る、後ち長沙王乂を討するとき讒に遭ひて軍中に死す、機天才秀逸、辭藻宏麗、張華嘗て之に謂て曰く、人の文を爲るや常に才の少きを恨む、而も子は更に其の多きを患ふ。弟雲嘗て書を與へて曰く、君苗、兄の文を見れば輒ち其の筆硯を燒かんと欲すと。後ち葛洪書を著して機の文を稱すらく、猶ほ玄圃の積玉の夜光に非るはなきが如し。其の弘麗妍贍、英鋭漂逸、亦一代の絶ならんかと、其の人の爲に推服せらるゝこと此の如し、蓋し詞藻雄才、陳思以來の第一人といふべし、著はす所の文章、凡二百餘篇、並に世に行はる、陸平原集あり。

陸機

猛虎行　雜言

渴不飲盜泉水、　熱不息惡木陰、　惡木豈無枝、　志士多苦心、　整翮凌時會、　杖而爲遊尋、　饑食猛虎窟、　寒棲野雀林、　日歸功未逮、　時往歲載陰、　崇雲臨岸駭、　鳴條隨風吟、　靜言幽谷底、　長嘯高山岑、　急絃無懦響、　亮節難爲音、　人生誠未易、　曷云開此衿、　咨我耿介懷、　俯仰愧古今、

招隱詩

明發心不夷、　振衣聊躑躅、　躑躅欲安之、　幽人在浚谷、　朝采南澗蘋、　夕息西山足、　輕條象雲構、　密葉成翠幄、　激楚佇蘭林、　回芳薄秀水、　山溜何泠泠、　飛泉激鳴玉、　哀音附靈波、　頹響赴曾曲、　至樂非有假、　安事澆淳樸、　富貴苟難圖、　稅駕從所欲、

同

陸雲……字は士龍、性清正にして才理あり、少にして兄機と名を齊しくす、文章は機に及ばずと雖も、持論は之に過ぎたり、世號して二陸と云ふ、官、清河内史に至る、歷正言を以て旨に忤ふ、機敗るゝに及び、並に害せらる、年四十二、門生故吏喪を迎へて清河に葬り、墓を修め碑を立て、四時に祀祭す、初め雲嘗て故人の家に逗宿せんとし、夜暗うして路に迷ひ適く所を知らず、忽ち草中に火光あるを望む、是に於て之に趣て、一家に至り、便ち投宿す、一少年の風姿、甚だ美なる者を見、共に老子を談ず、辭致深遠、曉に向て辭し去る、行くこと十里計り、故人の家に至る、云ふ、此數十里中、人居なしと、雲意始めて悟る所あり、却て昨宿の處を尋れば乃ち王弼の冢なりき、雲本と玄學なし、此より老を談ずる、殊に進みしといふ、少年談老の一事は殊に怪むべし、恐く

は一種附會の神話ならん、雲又笑僻ありしといふ、雲は兄機と友愛甚だ至る、詩文、兄に寄するもの一にして足らず、機も亦成れば輙ち弟をして之を定めしめて他人を假らざりき、雲の著はす所、賦八篇、啓疏八篇、書七十六篇、就中兄機に與る書三十九篇、其他頌、贊、箴、碑、誄、文、嘏等あり、詩は二十七篇なれども長篇多し、陸清河集あり、

贈鄭曼季四首錄鳴鶴一首

鳴鶴四章有序

鳴鶴美君子也、太平之世、君子猶有退而窮居者、樂天知命、無憂無欲、碩人之考槃、傷有德之遺世、故作是詩也。

鳴鶴在陰、哉其左翼、翰雍和鳴、在川之側、假樂君子、祚爾明德、思樂正直、歸于其極、嗟我懷人、惟馨黍稷、

鳴鶴在陰、其鳴喈喈、垂翼闌沼、濯清芳池、假樂君子、其茂猗猗、庶之瑰寶、有發瑰瓌、乃振翼翼、翼爾好衣、嗟我懷人、啓襟以晞、

鳴鶴在陰、其儀韡韡、爾天蓋高、和音于邁、假樂君子、篤膺俊乂、穆風潛烈、興雲哉昔、德茂當年、時術嘉會、安得雖萬、改爾縞帶、嗟我懷人、心焉忱慄、

鳴鶴在陰、哉好其聲、漸陸儀羽、遵渚回涇、假樂君子、祚之篤生、德耀有穆、如瑤如瓊、安得風帆、深溫歸滅、景遺雲雨、爾在北冥、嗟我懷人、惟用傷情、

十一、左思、成公綏

左思……字は太冲、貌寢口訥にして辭藻壯麗なり、性交遊を好まず、唯閑居を以て事と爲す、嘗て齊都賦を作り、一年にして乃ち成る、復た三都を賦せんと欲し、思を構ふること十年、門庭藩溷、皆筆紙を著けて、一句を得れば即ち之を疏す、賦成るに及び、豪貴の家、競うて相傳寫し、洛陽の紙價、之が爲に貴きに至る、初め陸機、洛に入りて此賦を作らんと欲せしに、思が方さに之を作らんとするを聞き、掌を撫して笑ひ、書を弟雲に與へて云く、此間俗父ありて三都賦を作らんと欲すと聞く、其の成るを須ちて、當さに以て酒甕を覆ふべきのみと、思の賦出づるに及びて、機歎伏して以爲へらく、加ふる能はざるなりと、遂に筆を輟めたりといふ、

左思

詠史

皓天舒白日、靈景耀神州、列宅紫宮裏、飛宇若雲浮、峨峨高門內、藹藹皆王侯、自非攀龍客、何爲欲來遊、被褐出閭閻、高步追許由、振衣千仞岡、濯足萬里流、

雜詩

秋風何冽々、白露爲朝霜、柔條日夕勁、維葉日夜黃、明月出雲崖、皦々流素光、披軒臨前庭、皦々晨雁翔、高志局四海、塊然守空堂、壯齒不恒居、歲亞常慨慷、

同

嚴羽の滄浪詩話に謂へらく、晋人陶淵明、阮嗣宗を舍くの外、惟左太冲一時に高出す、陸士衡は獨り諸公の下に在りと、鍾嶸の詩品に謂へらく、左思は陸機より野なれども、潘岳より深しと、兩評異なれども左思は陸機と伯仲の間に在る者なり。

成公綏……字は子安、東郡白馬の人なり、幼にして聰敏、博く經傳に涉る、性寡欲資産を營まず、家貧しく歲飢ゆるも、常に晏如たり、少より俊才あり、詞賦甚だ麗し、閑默自ら守る、張華深く之を推重し、薦めて博士となし、中書郎に遷る、每に華と詔を受けて並に詩賦を爲り、又賈充等と法律を參定す、泰始九年卒す、著はす所、賦は天地賦、烏賦、嘯賦等二十篇、頌二篇、銘三篇、箴一篇、誄、雜文樂歌、詩等あり、成公子安集あり。

十二、張載、張協

張載……字は孟陽、安平の人なり、性、閑雅、博學にして文章あり、太康の初、蜀に至り、道に劍閣を經、蜀人の險を恃みて亂を好むに感じ、因て銘を著し誡を作る、益州刺史張敏見て之を奇とし、乃ち表して其の文を上る、武帝使を遣はして之を劍閣山に鐫せしむ、又た濠汜賦を作る、傅玄見て嗟歎し、車を以て之を迎へ、言談盡日、之が爲に晷を延べ、遂に名を知らる、官して弘農太守と爲る、長沙王義請ひて中書郎に拜す、載は世の方さに亂るゝを見て復た仕進の意なく、遂に病と稱して家に歸りぬ。張孟陽集あり、賦五篇、權論一篇、頌銘詩あり、詩十七篇あり。

失題

氣力漸衰損、髯髮終以皓、昔爲春月華、今爲秋日皜、

述懷詩四首

跋涉山川、千里告辭、楊子哭岐、墨氏感絲、雲乖雨絕、心乎愴而、

張協……字は景陽、安平の人なり、少より儁才、載と名を齊しくす、官して河間內史と爲る、郡に在りて清儉寡欲、時に天下已に亂れ、所在寇盜あり、協遂に人事を棄絕し、草澤に屏居し、道を守りて競はず、屬詠を以て自ら娛む、七命を作る、最も世に師せらる、永嘉の初め、復た徵して黃門侍郎と爲しも、疾に託して就かず、家に卒しき、著はす所、賦五篇、銘七篇、七命、詩十三篇、張景陽集あり、詩品に云く、張協の詩其の源は王

繇より出づ、文體華淨にして病累少し、と、詩譜に云く、逐句鍛錬、辭工製率と、蓋し協の詩品は左太冲、潘岳の間に在り。

雜詩十首錄其一　張協

朝霞迎白日、丹氣臨暘谷、翳翳結繁雲、森々散雨足、輕風拂勁渚、凝霜竦高木、密葉日夜疎、叢林森如束、疇昔嘆時遲、晚節悲年促、歲暮懷百憂、將從季主卜、

遊仙　同

峻嶒玄圃深、嵯峨天嶺峭、亭館籠雲構、脩梁流三曜、蘭葩蓋嶺披、清風緣隅嘯、

第二節　東晉文學

一、劉琨

劉琨……字は越石、中山魏昌の人なり、年二十六にして司隸從事と爲る、時に征虜將軍石崇が別廬、河南の金谷澗中に在り、日に賓客を引致して、詩を賦す、琨、其間に預りて、文詠頗る當時に許さる、秘書監、賈謐、朝政に參管し、京師の人、心を傾けざるなし、潘岳、陸機以下並に文章を以て節を降して謐に事ふ、琨亦其間に在り、號して二十四友といふ、官、侍中太尉并幽荊三州諸軍都督と爲り、志常に晉室を奬興して、戎狄を攘ふに在り、而して竟に王敦の爲めに殺さる、時に年四十八、琨、詩を善くす、託意雄深、直に胸臆を攄て幽感を暢べ、慷慨壯亦人と爲りに類す、嘗て晉陽に在りて胡騎に圍まる、城中窘迫、計の出づる所を知らず、琨、月夜に乘じて樓に上り、且つ清嘯す、賊之を聞き、皆凄然として長歎す、中夜胡笳を奏す、賊又た流涕歔欷して懷土の情あり、曉に向つて更に復た之を吹けば、胡賊並に圍を棄てて走りぬ。

其の著はす所、劉石越集あり、表八篇、牋十三篇、書十一篇、盟文一篇、誄一篇、詩十一首あり。

答盧諶八首錄其一

咨余軟弱、弗克負荷、德聲仍彰、榮寵屢加、威之不建、禍延凶播、忠隕于國、孝衍于家、斯罪之積、如彼山河、斯戮之深、終莫能磨、

二、葛洪

葛洪……字は稚川、丹陽、句容の人なり、元帝の時累りに召せども起たず、羅浮山に隱れ、書を著はし丹を練る、胡應麟曰く、洪は博洽を以て江左に名あり、著はす所の書殆んど六百餘卷あり、漢より以來撰定を以て稱せらるゝ者洪より盛なるはな

し、蓋し志篤く才を負うて方外に游べる者なりと、其の著、抱朴子最も稱せらる。

抱朴子……抱朴子自序に、內篇二十卷、外篇五十卷といふ、隋志、新、舊唐書志の卷數多寡互に相同じからず、今本の卷數は內篇二十卷、外篇五十二卷あり。

抱朴子は洪の自ら稱號する所なり、是の書は其の羅浮山に退居する時に作る所にして、其の號を以て書に名けしなり。此書內篇は飛昇の道、導養の理、黃白の事を推明し、以爲へらく、神仙學ぶべく、之を學ぶに難きことなしと、丹砂黃金を合せて藥と爲して之を服せば、人鬼をして天地と相俱にし、雲に乘り龍に御し、太淸に上下せしむべしと、然れども外篇は時政の得失、人事の臧否を論じ、文辭辨博にして理致の言多し、要するに洪は當時の奇士にして、魏晉の間、汪洋たる神仙怪誕の奇想此に橫逸したるなり、單り洪のみならず、他士の文章詩賦にも神仙を言ふもの少からず、只洪は最も其の極端に馳せたるものなり、洪が著作の狀態は其の自序に徵して見るべし、其語に曰く、余家遭難、典籍蕩盡、力不能更得、故抄撮衆書、撮其精要、用工少而所收多、思不煩而所見博、或曰、流無源則乾、條離枝則悴、恐玉屑盈車、不如尺璧、余答曰、泳源流者、採珠而捐蚌、登荆嶺者、拾玉而棄石、余之抄略、譬猶摘翡翠之翠羽、脫犀象之牙也、蓋し群書の精彩を摘みて之を載するに自家の着色を以てしたるものなり、胡應麟又曰く、其の言を讀むに、物を比し類を聯ね、紆徐鬱茂にして滑澀窮らず、其の外篇は蓋し王氏の論衡に擬せり、故に旁引曲喩、必ず其の詞を達す、時として繳冗に失ふと雖も、淺見狹識の覩ふ所に非ずと、其の怪誕の甚しきは、內篇至理に謂へらく、人の身中に三尸あり、三尸の物たる、形なしと雖、魂靈にして鬼神の屬なり、人をして早く死せしめんと欲すれば、此の尸、鬼と爲り、放縱游行し、人の祭酹を享く、是を以て庚申の日に到る毎に、輒もすれば天に上り、司命に白して人の過失を言ふと、俗間庚申の日夜を守るは蓋し此に出づるならん。其の言固より醇乎たる能はずと雖も、六朝子類の文は先づ指を抱朴子に屈せざるべからず。洪の著はす所、神仙傳、肘後備急方等あり。

三　郭璞

郭璞……字は景純、河東聞喜の人なり、經術を好み、博學にして高才あるも言論に訥なり、辭賦は中興の冠たり、古文奇字を好み、陰陽算術に妙なり、江賦を作る、其辭甚偉にして、世の稱する所と爲る、復た南郊賦を作る、元帝見て之を嘉みし、以て著作佐郎と爲す、然れども性輕易、威儀を修めず、酒を嗜み、色を好み、時に或は度を過ぐ、

著作郎、于寶之を誡めて曰く、此れ適性の道に非ざるなりと、璞曰く、吾が受る所本限あり、之を用ふる、恒に盡さゞるを恐る、卿は乃ち酒色の患を爲すことを憂ふるかと、又た自ら才高く位卑きを以て乃ち客傲を著はす、璞又た卜筮を能くしき。王敦の禍に死す、後ち弘農太守に追贈せらる、郭弘農集あり、璞は前後筮驗六十餘事を撰し、名けて洞林と爲す、又た京、費諸家の最要を鈔し、更に新林十篇、卜韻一篇を撰し、爾雅を注釋し、別に音義圖譜を爲り、又た三蒼方言、穆天子傳、山海經、及び楚辭、子虛上林賦數十萬言を註す、皆な世に行はる、作る所の賦十篇、疏六篇、表、序、設難、哀策文、讚三百有餘件、鳥獸物植物類より鐵物等殆んと盡さゞるなし、祀一篇、詩二十首あり、江賦は最も世に稱せらるれども、難字甚た多く讀み易からず、文選にも之を收む、辭多ければ今は之を錄せず、

四、王羲之、王献之

王羲之の字は逸少、幼にして訥辯なりしも、長ずるに及びて、辯贍り骨鯁を以て稱せらる、尤も隸書を善くし、古今の冠たり、論者其の筆勢を稱して以爲へらく、飄たること浮雲の如く、矯たること驚龍の如しと、深く王敦王導に器重せらる、嘗て一時の名士と會稽山陰の蘭亭に宴集す、羲之自らこれが序を爲りて以て其志を申ふ、或人潘岳の金谷詩序を以て其文に方べ、羲之を石崇に比す、聞て甚た喜べり、性極て任率なりき、其書特に世に重んぜらる、仕へて右軍將軍會稽內史と爲る、後ち感ずる所ありて官を去り、東土人士と山水の游を盡くし、弋釣を娛と爲し、又た道士と共に服食を修め、藥石を採り、千里を遠しとせず、徧く東中諸郡に游び、諸名山を窮め、滄海に泛ぶ、歎じて曰く、我卒に當に樂を以て死すべしと、王右軍集あり、書帖數百篇、蘭亭集序、書後、文等あり。

蘭亭集序　王羲之

永和九年、歲在癸丑、暮春之初、會于會稽山陰之蘭亭、修禊事也、群賢畢至、少長咸集、此地有崇山峻嶺、茂林修竹、又有清流激湍、引以爲流觴曲水、列坐其次、雖無絲竹管絃之盛、一觴一詠、亦足以暢叙幽情、是日也天朗氣清、惠風和暢、仰觀宇宙之大、俯察品類之盛、所以極目騁懷、足以極視聽之娛、信可樂也、夫人之相與、俯仰一世、或取諸懷抱、悟言一室之內、或寄所託放浪形骸之外、雖趣舍萬殊、靜躁不同、當其欣于所遇、暫得于己、快然自足、曾不知老之將至、及其所之既倦、情隨事遷、感慨係之矣、向之所欣、俛仰之間、以爲陳迹、猶不能

不以之興懷、況修短隨化終期于盡、古人云死生亦大矣、豈不痛哉、每覽昔人興感之由、若合一契、未曾不臨文嗟悼、不能喻之于懷、因知一死生爲虛誕、齊彭殤爲妄作、後之視今、亦猶今之視昔、悲夫故列叙時人錄其所述、雖世殊事異、所以興懷其致一也、後之覽者、亦將有感于斯矣、

王獻之……字は子敬、少より盛名ありて英邁不羈、閒居終日と雖も、容止怠らず、風流一時の冠たり、草隸に工に、丹青を善くしき、時に識者以爲へらく、羲之の草隸は江左中朝及ぶ者あるなし、獻之の骨力遠く父に及ばずして頗る媚趣ありと、官中書令に至る、著はす所、書帖八十九篇、疏、表、墓志、詩共數篇あり、王大令集に收む。

五、孫綽

孫綽字は興公、博學にして善く文を屬す、少より高陽の許詢と俱に高尚の志あり、會稽に居り、山水に游放すること十有餘年、乃ち遂初賦を作り、以て其意を致しき、每に張衡左思の賦を重んじて云く、三都二京、五經之鼓吹也と、嘗て天台山賦を作る、辭致甚だ工なり、初て成りしとき、以て友人范榮期に示して云く、卿試みに地に擲たば當に金石の聲を作すべし、榮期曰く、恐くは此金石は宮商に中るに非ずと、然れども佳句

に至る每に輒云ふ、應さに是れ我輩の語なるべしと、著作佐郎に除せらる、綽性通率にして譏調を好む、嘗て習鑿齒と共に行く、綽前に在り、顧みて鑿齒に謂つて曰く、之を沙し之を汰せば瓦石後に在りと、鑿齒曰く、之を簸し之を颺せば糠粃前に在りと、後ち廷尉卿と爲り著作を領せり、孫廷尉集に收むる所、天台山賦、望海賦二篇、遂初賦、疏、牋、喻道論、蘭亭集後序、碑六篇、銘三篇、頌、贊、誄、詩、等あり、孫綽は自ら許すこと過太なれども實は唯一時の冠と稱すべく、晋文の佼佼に過ぎざるなり、但、綽が最も餘他の文士に異なる所は佛乘を親ふの深きに在り、其の喻道論は即ち儒佛二教の一致を主張したるものなり。

儒佛一致……喻道論は頗る長篇にして儒佛一致を論ずること審かなり、今其の一節を揭げて梗概を示さん、

或難曰、周孔適時而教、佛欲順去之、將何以懲暴止姦統理群生者哉、答曰、不然、周孔卽佛、佛卽周孔、蓋外內名之耳、故在皇爲皇、在王爲王、佛者梵語、晋訓覺也、覺之爲義、悟物之謂、猶孟軻以聖人爲先覺、其旨一也、應世軌物、蓋亦隨時、周孔救極弊、佛教明其本耳、其爲首尾、其致不殊、卽如外聖有深淺之跡、堯舜世夷、故二后高讓、湯武時難、故兩君抑戈、洲默之

與赫斯、其跡則胡越、然其所以跡者、何嘗有際哉、故逆尋者、每見其二、順通者無往不一。

六、陶潛

陶潛字は淵明、又元亮、潯陽柴桑の人なり、少くして高趣あり、博學能く文を屬す、閑靜にして言少く、榮利を慕はず、好みて書を讀み、甚だ解するを求めず、會意ある毎に欣然として食を忘る、性酒を嗜む、而して家貧にして恒に得ること能はず、親舊酒を携きて之を招けば往き飲みて輒ち盡くす、期する所必ず醉にあり、既に醉へば退く、曾て去留に吝情ならず、環堵蕭然、簞瓢屢空しきも晏如たり、裕如たり、親老いて家貧なるを以て起つて州の祭酒たり、吏職に堪へずして僅かにして自ら解き歸る、後ち鎮軍建威參軍と爲り、又た彭澤の令と爲る、歲終に郡督郵を遣はして縣に至らしむ、吏白す、應に束帶して之を見るべしと、潛歎して曰く、我豈に能く五斗米の爲に腰を折つて鄉里の小兒に向はんやと、即日印綬を解きて職を去り、歸去來辭を賦す、潛音律を解せず、而も無絃琴一張を蓄へ、酒適する毎に輒ち撫して以て其意を寄す、性最も菊を愛す、嘗て九月九日酒無し、宅邊の菊叢中に出でゝ坐すること久し、會〻江州刺史王弘といふ者、酒を送り至る、即ち酌み且つ醉うて後歸る、常に貴賤詣れる時、酒あれ

ば輒ち設け、潛若し先づ醉へば便ち客に語つて曰く、我醉うて眠らんと欲す、卿去るべしと、其の天眞爛漫率ね此の如し、時に周續之は廬山に入つて惠遠に師事し、彭城の劉遺民も亦迹を廬山に遁る、潛も亦徵命に應ぜず、之を潯陽の三隱といふ、嘗て五柳先生傳を爲くる、蓋し宅邊に五柳樹あるを以て自ら名くる所の稱なり、其の贊に曰く、黔婁有言、不戚戚於貧賤、不汲汲於富貴、極其言、茲若人之俦乎、酬觴賦詩、以樂其志、無懷氏之民歟、葛天氏之民歟と、其の高趣以て想ふべし、又桃花源記を著はす、蓋し桃源は元と潛の寓言に出づ、後世風塵の外を言ふもの必ず桃源を稱す、是又モーアの「ユートピア」の流なり、惟ふに潛は晉祚既に覆らんとするの時に遭ひ、其身は高蹈隱逸、松菊園裡の人と爲れども、其の先は嘗て晉の右族たれば、感興萬端、其間自ら言ふに忍びざるものありて、鷄犬竹籬、煙火太平の世を想望せしものならん、元嘉四年、六十三にして卒す、世に靖節先生と號す、

淵明の性格

……六朝の間、人情澆漓、風俗濁亂、華奢淫逸、滔々習尙を爲すの世に處り、白蓮の淤泥に出づるが如く、清閑高舉、恬淡性情を養ひ、裕然天命の樂むべきに安んず、抑も晉宋の世、老莊虛無の道を奉じ、縱酒放逸、世を厭ひ俗を罵るの徒少からず

ざりしと雖も、淵明が天命を知り、人世を達觀して灑然菊叢香しき處に葛巾漉酒の隱士たるに比すべくもあらず、蓋し淵明の性や枯淡なるにあらず、其の眞情內に熱したるは其の言動に徵して見るべし、但屈原賈誼が情火炎々憤懣遣るに由なきが如くならざるなり、是又忠良貞潔の性を鎔鑄するに老莊冲澹の說を以てしたる者ならん。

（五一四）

歸園田居

陶潛

種豆南山下、　草盛豆苗稀、　晨興理荒穢、　帶月荷鋤歸、　道狹草木長、　夕露沾我衣、
衣沾不足惜、　但使願無違。

蓋し小人多くして君子少きを言ふ、夕露衣を沾すの故を以て其の願ふ所の者に違ふこと多からん。

問來使

同

爾從山中來、　早晚發天目、　我屋南山下、　今生幾叢菊、　蠶薇葉正抽、　秋蘭氣當馥、
歸去來山中、　山中酒應熟。

雜詩

同

結廬在人境、　而無車馬喧、　問君何能爾、　心遠地自偏、　採菊東籬下、　悠然見南山、
山氣日夕佳、　飛鳥相與還、　此間有眞意、　欲辨已忘言。

雜詩

同

秋菊有佳色、　裛露掇其英、　汎此忘憂物、　遠我遺世情、　一觴雖獨進、　盃盡壺自傾、
日入群動息、　歸鳥趨林鳴、　嘯傲東軒下、　聊復得此生。

擬古

同

日暮天無雲、　春風扇微和、　佳人美淸夜、　連晤酣且歌、　歌竟長歎息、　持此感人多、
皎皎雲間月、　灼灼葉中華、　豈無一時好、　不久當如何。

歸去來辭

陶潛

歸去來兮、田園將蕪、胡不歸、既以心爲形役、奚惆悵而獨悲、悟已往之不諫、知來者之可追、
寔迷途其未遠、覺今是而昨非、舟遙遙以輕颺、風飄飄而吹衣、問征夫以前路、恨晨光之熹
微、乃瞻衡宇、載欣載奔、僕歡迎、稚子候門、三逕就荒、松菊猶存、携幼入室、有酒盈罇、引壺
觴以自酌、眄庭柯以怡顏、倚南窗以寄傲、審容膝之易安、園日涉以成趣、門雖設而常關、策
扶老以流憩、時矯首而游觀、雲無心以出岫、鳥倦飛而知還、景翳翳以將入、撫孤松而盤桓、

歸去來分請息交以絕游、世與我而相遺、復駕言分焉求、悅親戚之情話、樂琴書以消憂、農人告予以春及、將有事于西疇、或命巾車、或棹孤舟、既窈窕以尋壑、亦崎嶇而經丘、木欣欣以向榮、泉涓涓而始流、善萬物之得時、感吾生之行休、已矣乎、寓形宇內、復幾時、曷不委心任去留、胡爲遑遑欲何之、富貴非吾願、帝鄉不可期、懷良辰以孤往、或植杖而耘耔、登東皐以舒嘯、臨清流而賦詩、聊乘化以歸盡、樂夫天命復奚疑、

蘇東坡云く、歐陽公言、兩晉無文章、幸獨有歸去來一篇耳と、其の詞義、夷曠蕭散、毫も虛僞修飾に出でず、而して文體は猶ほ彼の漢武の秋風辭の如く、賦にあらず詩にあらず、又純然たる散文にもあらず、自ら辭の體なり。

桃花源記、五柳先生傳、自祭文等も亦有名なり、

自祭文（前半略）

惟此百年、夫人愛之、慨彼無成、惕日惜時、存爲世珍、沒亦見思、嗟我獨遇、曾是異茲、寵非己榮、涅豈吾淄、捽兀窮廬、酣飲賦詩、識運知命、疇能罔眷、余今斯化、可以無恨、享涉百齡、身逐肥遁、從老得終、奚所復戀、寒暑遞遷、亡既異存、外姻晨來、良友宵奔、葬之中野、以安其魂、曾々我行、蕭々墓門、奢侈宋臣、儉笑王孫、廓分已滅、慨焉已遐、不封不樹、白月遂過、匪貴前譽、孰重後歌、人生寄難、死如之何、嗚呼哀哉。

題して自祭といふ、已に奇ならずや、其の意愛慨哀泣に似たれども、生死を洞觀して、天命を樂むもの豈に常人の悲哀と同じからんや。

其の著はす所、感士不遇賦、閑情賦、歸去來辭、與子儼等疏、桃花源記、扇上畫贊、傳贊五篇、傳二篇、述には讀史述九章、祭文三篇あり、詩は則ち停雲、時運、榮木、昭昭長沙公族祖、勸農、命子、形影神、九日閑居、問來使、飲酒二十首、擬古九首、雜詩十二首、詠貧七首等、五十有九篇の多きあり、眞西山云く、淵明之作、宜自爲一編、附三百篇、と、蓋し楚辭以後の傑作となすなり。

第四章　宋朝文學

一、何承天、傅亮

何承天……は東海郯の人なり、聰明博學、一時の重ずる所と爲る、最も歷數に精し、性頗る剛褊なりき、嘗て太子率更令と爲り、國子博士を兼ね、顏延之と同じく執經と爲る、是より先き出でゝ衡陽內史と爲れり、何衡陽集あり、從來禮論八百卷ありしが、承天刪減し幷に各〻類を以て相從ひ、凡て三百卷と爲しき、今傳はらず、何集に收むる

所、木瓜賦、上歷新法表、議六篇、時政疏、刻奏等、論九篇、問一篇、書六篇、頌三篇、贊二篇、鼓吹饒歌十五首あり。安邊論、最も長篇にして筆力を見るに足る。

傅亮 ……字は季友、北地靈州の人なり、深く武帝に知られ、受命表策文誥皆な亮の辭なり、文帝の時、左光祿大夫と爲る、佛光祿集あり、後ち事を以て誅せらる、蓋し富貴に淫するの失なり、著はす所、賦六篇、策詔等八篇、敎表、奏、碑銘、各數篇、演慨論、書二篇、文殊師利菩薩讚、彌勒菩薩讚、詩四篇あり。

文殊師利菩薩讚　傅亮

在昔龍種、今也童眞、　樂化游方、　因緣厥津、　商會維那、　研微盡神、　發揮幽賾、
導達大人、

彌勒菩薩讚　同

時無並后、　道不二司、　龍潛兜率、　按轡候時、　翳翳長夜、　懷而莫思、　思樂朗旦、
屬想靈期、

吾人は亮の讚を佳とするに非ず、唯當時佛を讚歎するの人士多きを示さんと欲するのみ、先秦文學より敍し來り、六朝に至つて其の思想の變遷を追想すれば已に驚

くべきものあり、後來唐宋に及びて異種の思想勃興するは偶然ならざるなり

二、謝靈運

謝靈運は陳郡陽夏の人なり、少くして學を好み、群書を博覽す、文章の美、江左に冠たり、康樂公に封ぜられ、邑二千戶を食む、性豪奢にして、車服鮮麗、衣裝器物、多く舊制を改む、世人之を宗とし咸な謝康樂と稱す、太子左衛率と爲り、褊激にして多く禮度を忽つ、朝廷唯文義を以て之に處し、實用を以て相許さず、自ら謂ふ、才能宜しく權要に參すべしと、既に知られずして常に憤々を懷く、盧陵王義眞は文籍を好み、靈運と情欵常に異り、而して靈運常に執政を非毀す、司徒徐羨之等之を患ひ、出して永嘉の太守と爲す、郡に名山水あり、靈運樂より山水を愛す、乃ち遂に意を傲遊に肆にして、徧く諸縣を涉歷し、動もすれば旬月を踰えて歸らず、民間の訴訟復た懷に關せず、到る所、輒ち詩を爲りて其の意を致す、郡に在ること一年、病と稱して職を去る、靈運の父祖並に始寧縣に葬る、縣に故宅及び別墅あり、遂に籍を會稽に移し、山に傍ひ江を帶びて別業を修營す、諸隱士等と縱放して娛を爲す、一時至る每に都門の貴賤競うて傳寫せざるはなく、遠近欽慕して、聲名京師を動かす、後ち族弟惠連、東海の何長瑜等、

と文章を以て賞會し、共に山澤の游を爲す、時人之を四友と云ふ、靈運は父祖の資に因り、生業甚だ厚く、奴僮門生數百人、山を尋ね嶺を陟り、必ず幽峻に造る、巖嶂千重、備さに盡さゞるはなく、金蹄常に木屐を着け、山に上る時は前齒を去り、山を下る時は後齒を去る、嘗て始寧の南山より木を伐り、逕を開いて直に臨海に至る、從者數百人、臨海の太守、駭きて以て山賊と爲せりと云ふ。謝康樂集二卷あり、山居賦、羅浮山賦、怨曉月賦、逃民賦等十五篇、表三篇、牋、書六篇、遊名山志、辨宗論、無量壽佛頌、維摩經十譬贊等八篇、銘、七濟、誄四篇、廬山慧遠法師誄あり、樂府十七樂、詩六十四篇の多きあり。山居撰往兩賦の如きは往々佚字あれども傑作たるを失はず。

夜宿石門詩　謝靈運

朔寒苑中蘭、畏彼霜下歌、暝還雲際宿、美此石上月、鳥鳴識夜棲、木落知風發、異音同至聽、殊響俱清越、妙物莫爲賞、芳醑誰與伐、美人竟不來、陽阿徒晞髮、

齋中讀書　同

昔余遊京華、未嘗廢丘壑、矧乃歸山川、心跡雙寂寞、廬館絕音淞、空庭來鳥雀、臥疾豐暇豫、翰墨時間作、愜抱觀古今、寢食展戲謔、既笑沮溺苦、又哂子雲閣、執戟亦以疲、耕稼豈云樂、萬事難並歡、遂生幸可託、

七里瀨　同

羈心積秋晨、晨積展遊眺、孤客傷逝湍、徒旅苦奔峭、石淺水潺湲、日落山照曜、荒林紛沃若、哀禽相叫嘯、遷物悼遷斥、存期得要妙、既乘上皇情、豈屑末代誚、日親殿子瀨、想屬任公釣、雖謂古今殊、異代可同調、

三、顏延之

顏延之、字は延年、琅琊臨沂の人なり、性酒を好みて、細行を檢まず、步兵校尉と爲り、劉湛、殷景仁等の專ら要任に當るを見て、意常に不平あり、云く、天下の務は當さに天下と之を共にすべし。豈に一人の智の獨り能くする所ならんやと、以て每に權要を犯す、後に秘書監光祿勳太常と爲る、孝建三年卒す、年七十三、延之、性既に褊激にして又た酒過あり、肆意直言す、身を處すること清約、財利を營まず、布衣疏食、郊野に獨酌す、

其の適意に當りては傍に人無きが如し、陳郡の謝靈運と俱に同采を以て名を齊しくし、潘岳、陸機の後、文士能く及ぶ者なく、江左に顏謝と稱しき、子竣及び測亦文章を以て知らる、測は蚤卒し、竣は頗る顯達し、一時權勢朝廷を傾く。延之に顏光祿集あり、賦五篇、詔一篇、表五篇、誓六篇、三月三日曲水詩序、七繹、庭誥文二篇、頌二篇、贊箴、連珠、誄哀策文、誄、祭文、銘、狀、樂府七篇、詩二十二篇あり。庭誥二篇は延之の筆力を示せる雄篇なり、然れども辭多ければ今錄せず、五君詠五首亦絕佳と稱せらる。

阮步兵　　顏延之

阮公雖淪跡、識密鑒亦洞、沈醉似迎照、寓辭類託諷、長嘯若懷人、越禮自驚衆、物故不可論、途窮能無慟、

嵇中散　　同

中散不遇世、本自餐霞人、形解驗默仙、吐論知凝神、立俗迕流議、尋山洽隱淪、慷慨有時發、龍性雖能馴、

劉參軍　　同

劉伶善閉關、懷情滅聞見、鼓鐘不足歡、榮色豈能眩、頹精日沈飲、離知非荒宴、頌酒雖短章、深衷自此見、

阮始平　　同

仲容青雲器、實亮生民秀、遠音何用深、識微在金奏、郭奕已心醉、山公非虛觀、風鑑不入官、一麾乃出守、

向常侍　　同

向秀甘淡泊、深心託毫芒、探道好淵玄、觀書鄙章句、交呂既湎時、嵇亦風與、流連河裏遊、惻愴山陽賦、

梁の沈約嘗て靈運の傳後に論して曰く、

周室既衰、風流彌著、周平宋玉導清源於前、賈誼相如振芳塵於後、英辭潤金石、高義薄雲天、自茲以降、情志愈廣、王褒、劉向、揚、班、崔、蔡之徒、異軌同奔、遞相師祖、雖清辭麗曲、時發乎篇、而撫音累氣、固亦多矣、若夫平子、艷發文以情變、絕唱高隣、久無嗣響、至于建安、曹氏基命、二祖陳王、咸著盛藻、而乃以情緣文、以文被質、自漢至魏、四百餘年、辭人才子、文體三變、相如巧爲形似之言、班固長於情理之說、子建、仲宣、以氣質爲體、並標能擅美、獨映當時、是以一世之士、各相慕習、原其飈流所始、莫不同祖風騷、徒以賞好異情、故意製相詭、降及元

康潘陸特秀、律異班賈、體變曹王、縟旨星稠、繁文綺合、經平蛩之逸響、採南皮之高韻、遺風餘烈、事極江右、有晉中興、玄風獨振、爲學弼於柱下、博物止乎七篇、馳騁文辭、義單乎此、自建武暨乎義熙、歷載將百、雖綴響聯辭、波屬雲委、莫不寄言上德、託意玄珠、遒麗之辭、無聞焉爾、仲文始革孫許之風、叔源大變太元之氣、爰逮宋氏顏謝騰聲、靈運之興會標舉、延年之體裁明密、並方軌前秀、垂範後昆云々。

と、此論未だ周密ならずと雖も、周末より宋代顏謝に至るまでの變遷の大勢を見るに足る、故に今之を摘錄す、盖し顏謝鮑は宋朝の文豪なり。

四、鮑照

鮑照字は明遠、東海の人なり、文辭贍逸、嘗て古樂府を爲る、文甚だ遒麗なり、元嘉中に河濟俱に清む、照、河清頌を爲る、其叙甚だ工なり、嘗て義慶に謁し、未だ知られず、時を獻して志を言はむと欲す、人之を止めて云く、即位尙早し、輕しく大王に忤ふべからずと、照勃然として云く、千載の上、英才異士あり、沉沒して聞えざる者安んぞ數ふべけんや、大丈夫豈に遂に智能を蘊みて闇戈辨ぜず、終日碌々として燕雀と相隨はしむべけんやと、竟に詩を奏す、義慶之を奇として帛二十匹を賜ふ、後文帝以て中書舍人と爲す、帝文章を好み、自ら謂ふ、能く及ぶ者なしと、照其旨を悟り、文章を爲るに部言累句を多くせしと云ふ。

其の著す所賦十篇、表疏十篇、啓九篇、登大雷岸與妹書、河濟頌、佛影頌、銘四篇、文一篇、樂府四十四篇、詩八十六篇、聯句三篇あり、鮑參軍集に收む。就中最も有名なる者は蕪城賦、河濟頌、登大雷岸等なり。或は照の文を評して操調險急、雕藻淫艷といふ、盖し適評なり。

代陳思王白馬篇　鮑照

白馬騂角弓、　鳴鞭乘北風、　要途即邊急、　雜虜入雲中、　閉壁自往夏、　清野徑還冬、
僑裝多闕絕、　旅服少裁縫、　埋身守狹境、　沈命對胡封、　海暮塞雲起、　飛沙被遊松、
含悲望兩都、　楚歌登四墉、　丈夫設計誤、　懷恨逐邊戎、　棄別中國愛、　遂襲胡馬力、
去來今何道、　卑賤生所鍾、　但令塞上見、　知我獨爲雄。

學陶彭澤體　同

長憂非生意、　短願不須多、　但使尊酒滿、　朋舊數相過、　秋風七八月、　清露潤綺羅、
提壺當戶坐、　歎息望天河、　保此無傾動、　寧復滯風波。

照の作少からずと雖も、詩樂府の如きは古人の作に擬し、或は之に代へ、或は之を學ぶ者多し、惟ふに文辭瀟逸なれども經歷する所狹隘坦平にして感遇奇異ならざりしに由らん。然れども其の材力能く一世を凌厲するに足り、時品又た謝康樂に亞ぐべし。元の陳繹曾詩譜に云く、六朝文氣衰綴、唯劉越石鮑明遠、有西漢氣骨、李杜筋取此。と。

五、袁淑

袁淑字は陽源、陳郡夏の人、少より風氣あり、章句の學を爲さずして博く涉り多く通じ、好みて文を屬す、辭采適豔、縱横才辯あり、又喜て諧謔を爲し、每に時人の嘲ける所と爲れり、官、太子左衛率に至る、著はす所、賦、議、章、書、傳、雜文、時、あり、袁陽源集に收む。淑身を以て義に殉す、卒後侍中太尉を追贈し、忠憲公と謚す。

袁淑

眞隱傳

鬼谷先生、不知何許人也、隱居韜智、居鬼谷山、因以爲稱、蘇秦張儀師之、遂立功名、先生遣書責之曰、若二君豈不見河邊之樹乎、僕御折其枝、波漂盪其根、上無徑尺之陰、身被數尺之痕、此木豈與天地有仇怨、所居然也、子不見蒼岱之松柏、華霍之楸桐乎、上枝干於青雲、下根通于三泉、千秋萬歲、不受斧斤之患、此木豈與天地有骨肉讎、蓋所居然也。

六、謝惠連

謝惠連、年十歲にして能く文を屬す、族兄靈運之を賞して云ふ、篇章ある每に惠連に對せば輙ち佳語を得と、嘗て永嘉西堂に於て詩を思ひ、竟日成らず、忽ち夢に惠連を見て即ち池塘生春草を得、大に以て工と爲す、嘗て云ふ、此語神功あり、吾が語に非るなりと。惠連は會稽郡史杜德靈を愛幸し、父憂に居るに及て贈るに五言詩十餘首を以てす、乘流、遊禪路諸篇是れなり、官、司徒彭城王義康、法曹行參軍と爲る、義康、東府城を修め、城堅中に古冢を得て之が改葬を爲し、惠連をして祭文を爲らしむ、其文甚だ美なり、又た雪賦を爲る、雅麗を以て奇とせらる。靈運、其の新文を見る每に曰ふ、張華重生、不能易也と、文章並に世に行はれしも後ち亡佚せしもの少からず、惠連輕薄にして尤累多し、故に官顯はれざりき、年三十七卒す、謝法曹集あり、賦五篇、贊六篇、筱二篇、連珠四首、文三篇、樂府十三篇、詩十六篇あり。詩は西陵遇風獻康樂五章、秋懷、擣衣の諸篇最も佳なり、陳繹曾は惠連を評して曰く、酌取險怪自然之中、而句句爲之と。

擣衣

謝惠連

衡紀無流度、暑運倏如催、白露滋園菊、秋風落庭槐、肅々莎鷄羽、烈々寒蟬啼、夕陰結空蔡、宵月皓中閨、美人戒裘服、繡飾相招携、碧玉出北房、鳴金步南階、櫚商砧響發、楹長杵聲哀、微芳起兩袖、輕汗染雙題、紈素既已成、君子行未歸、裁用笥中刀、縫爲萬里衣、盈篋自余手、幽絨候君開、腰帶進疇昔、不知今是非、

七、謝莊

謝莊字は希逸、陳郡陽夏の人なり、年七歲能く文を屬し、論語に通ず、太祖見て而して之を異として人に謂て曰く、藍田出玉、豈虛也哉と、嘗て左氏經傳を分ち、國に隨て篇を立て、木方丈圖を製す、山川土地各分理あり、之を離せば則ち州別に郡殊なり、之を合せば則ち內に寓して一と爲る、然れども今傳らず、元嘉二十九年太子中庶子に除せらる、時に南平王鑠は赤鵾鵬を獻す、普く群臣に詔して賦を爲らしむ、太子左衛率袁淑、文、當時に冠たり、賦を作り畢り、齋して以て莊に示す、莊の賦も亦竟れり、淑見て而して歎じて曰く、江東に我なくば、卿當に獨り秀づべし、我に若し卿なくば、亦一時の傑なりと、遂に其の賦を隱くしき、仕へて金紫光祿大夫と爲る、著はす所の文章四百餘卷世に行はれしと、其の女は順帝の皇后と爲る、謝光祿集に收むる所、月賦、赤鵾

鵬賦等四篇、詔一篇、表十一篇、奏三篇、章、啓事、牋、書、帖、議、贊、哀策文、誄、墓誌銘、樂府十二篇、時十四篇、就中上封禪儀註奏、捜才、定刑二表、月賦、舞賦最も稱せらる、辭多ければ今掲げず。

赤鵾鵬賦

徒觀其柔儀所踐、頹藻所擬、華采夕映、容光晦鮮、惠性昭和、天機自曉、審國音於寰中、遠方聲於裔表、及其雲移霞峙、翅委雪翻、陸離翬漸、容裔鴻軒、蹈林飛岫、煥若輕電、鑿煙門集場棲圃畔、若天桃被玉園、至於氣淳體浮、翳下崖沈、月圖光於綠水、雲寫影於青林、溯還風而發翮、霜清露而鵬音。

梁の鍾嶸詩品に云く、希逸、時、氣候清雅、不逮於范哀、然興屬閑長、頗無鄙促也と。

概評……漢魏より宋齊に至る文運の盛衰は已に沈約の論を揭げて之を示せり、今又梁鍾嶸の論を引きて更に通觀に資せんとす、其言に曰く、及建安、曹公父子篤好斯文、平原兄弟爵爲文棟、劉楨王粲爲其羽翼、次有繁龍托鳳自致於屬車者、蓋將百計彬彬之盛大備於時矣、爾後陵遲衰微、迄有晉太康中、三張二陸兩潘一左、勃爾復興、暨武帝王風流末泳、亦文章之中興也、永嘉時、貴黃老、稍尙虛談、于時篇什理過其辭淡乎寡味、爰

及江表微波尙傳、孫綽許詢桓虔諸公、皆平典似道德論、逃安風力盡矣。先是郭璞純用僊上之才、變創其體、劉越石仗清剛之氣、贊成厥美、然彼來我寡、未能動俗、逃義熙中、謝益壽斐然繼作、元嘉中有謝靈運、才高詞盛、富艷難蹤、固已含跨劉郭、陵轢潘左。故知陳思爲逃曾五言之冠冕、文詞之命世也。宋代の大家顏謝と聯稱すれども延年の詩は遂に輔たるを免かれず、謝康樂は則ち詞想神工、感過清貴、超然として塵表に出づ、其の妙句に至りては神功を欺くものあり、池塘生春草の句は自ら我師に非ずといふ、又た白雲拘幽石、綠條媚清逕といひ、林壑斂暝色、雲霞收夕霏といふが如きは殆んと神功の想あり。

第五章　南齊文學

一、蕭子良

南齊の竟陵文宣王、子良字は雲英、武帝第二子なり、幼より聰敏なりき、義に敎く古を愛す、又救恤の美擧多し、武帝即位せしとき、子良は竟陵郡王に封ぜらる、少より清向あり、才を禮し士を好み、不疑の地に居り、意を賓客に傾く、天下の才學皆な游集せり、後ち鷄籠山に移居し、西邸に學士を集め、五經百家を抄し、皇覽例に依りて四部要略千卷を爲り、名僧を招致して佛法を講論し、經唄新聲を造る、道俗の盛、江左未だ此の時の如きあらず、子良は文惠太子と同じく釋氏を好み、甚相友悅あり、子良は敬信尤も篤く、數邸園に於て齋戒を營み、大に朝臣衆僧を集め、賦食行水するに至り、或は躬其事を親らし、世頗る以て宰相の體を失ふと爲す、人に勸めて善を爲し、未だ嘗て厭倦せず、此を以て終に盛名を致せり。著はす所、內外文筆數十卷、文采なしと雖、是の勸戒多し、竟陵王集あり、收むる所、啓七篇、表二篇、書九篇、序一篇、淨住子淨行法門三十一條、賓僚七要、時五篇あり。侍皇太子釋奠宴等の詩は往々闕あり、淨住子の如きは特に佛教思想の發達を見るべし。

二、王儉

王儉字は仲寶、琅邪臨沂の人なり、年二十八にして僕射と爲り、吏部を領しき、明帝嘗て群臣を宴し、各伎藝を効さしむ褚淵は琵琶を彈じ、王僧虔、柳世隆は琴を彈じ、沈文季は子夜來を歌ふ、儉云ふ、臣は解する所なし、唯書を誦することを知ると、因て帝の前に跪きて相如が封禪書を誦せり。帝崩ずるとき遺詔して儉を侍中尙書左僕射軍將

軍と爲さしむ、後ち國子祭酒を領す、乃ち儉の宅に於て學士館を開き、悉く四部の書を以て儉の家に充てしむ。儉嘗て人に謂つて云ふ、江右の風流宰相は唯謝安あるのみと、蓋し以て自ら比するなり、年三十八にして薨す、文憲公と謚す、儉は嗜慾寡く、唯經國を以て務と爲し、車服質素、家に餘財なし、最も禮典に通ず、故に其の文禮制を論議するもの多きに居る。

王儉

入學釋奠議

周禮卒入學舍菜合舞。記云始教皮弁祭菜、示敬道也。又云始入學、必祭先聖先師、中朝以來釋菜禮廢、今之所行、釋奠而已、金石俎豆、皆無明文、方之七廟、則輕、比之五禮、則重、陸納車胤、謂宜尼廟宜依亭侯之爵、范甯欲依周公之廟、用王者儀、范宣謂當其爲師、則不臣之、釋奠日備帝王禮樂、此則車陸失於過輕、二范傷於太重、喻希云、若至王者自設禮樂、則肆賞於至敬之所、若欲嘉美先師、則所況非備、尋其此說、守附情理、皇朝因尊、弘教待以師資、引同上公、卽事惟允、元嘉立學、襲松之議、應舞六佾、以郊樂未具、故權奏登歌、今金石已備、宜設軒縣之樂六佾之舞、牲牢器用、悉依上公、

竟陵王山居賦

同

升堂曉室、金暉玉明、亹亹大部、遙遙閑賞、道以德弘、聲由樂廣、義重實師、情深盧往、濟梁在茲、安事遐想。

失題

方帆并茂、追清彥輔、柔亦不茹、剛亦不吐、

同

三、王融

王融字は元長、琅邪臨沂の人なり、世祖嘗て芳林園に幸して朝臣を饗宴し、曲水詩の序を爲らしむ、文藻富麗、世人盛に之を誦す、後ち主客と爲りて外賓に接す、北使房商求、宋辨等は融が年少きを見て交問うて曰く、主客の年幾くぞと、融が云く、五十の年久しく其の半を踰ゆと、又問うて曰く、北に在りて開く、主客は曲水詩序を作りて其製顏延年に勝ると、願くは一見するを得むと、融乃ち之を示す、後ち宋辨は瑤池臺に於て融に謂て曰く、昔は相如の封禪書を觀て漢武の德を知る、今は王生が詩序を見

て齊主の盛を見ると、其の推稱せらるゝこと此の如し、後ち事に依て獄に死す、年二十有七、融文才夙成蓋し亦賈誼、終軍の流亞なり。

其の著はす所、風賦、等二篇、疏三篇、表四篇、策問二篇、啓十篇、書、序各一篇、頌には淨行頌三十一首、哀策文一篇、墓銘二篇、樂府四十五首、詩二十八篇、聯句一篇、王寧朔集あり。就中曲水詩序絶佳と稱せらる。

風賦　王融

奄分日采之既移、忽分群景之將馳、靡輕蕩之碧葉、汎會松之翠枝、總高羽而蕭瑟、韻珠露之參差、此烈士之英風、長寄亮其如斯。

淨行頌三十一首 錄其一首　同

異津殊復曉、高鵲亦能卑、陰牆雖兩密、幽夜有四知、炎山翻烈火、氷澗市寒澌、
絳城振雲蕊、錄樹鬱霜枝、茹蘖非云苦、集木豈稱危、求仁曾已得、長歎欲何爲。

(地獄頌)

琵琶　同

抱月如可明、懷風殊復清、絲中傳意緒、花裏寄春情、拖抑有奇態、悽鏘多好聲、

芳袖幸時拂、龍門空自生。

三月三日曲水詩序……一摘粹　同

芳林園者、福地奧區之淺、丹陵若水之靈、殷々均乎姚澤、縣々尙於周原、狹豐邑之米、宏、陋譙居之猶褊、求中和而輕處、撰景緯以裁基、飛觀神行、虛榿雲構、離房乍設、層樓間起、負朔陽而抗殿、跨雲沼而浮榮、鏡文虹於綺疏、浸蘭泉於玉砌、幽々叢翠、秩々斯干、曲拂遺迴、潺湲徑復、新萍泛沚、華桐發岫、雜天采於柔荑、亂嚶聲於緜羽、禁軒承幸、清宮俟宴、縕帷宿帽、廟幕宵懸、既而滅宿澄霞、登光辨色、戒道執戈、展軨效駕、徐懸警節、明鐘暢晉、七萃連鑣、九族齊軌、建旗拂蜺、揚旝振木、魚甲煙聚、貝胄星羅、亚英曲瑤之節、絶景追風之騎、昭灼既部驛騎函列、虎視龍翅、雷駭電逝、蘼々隱々、紛々軫々、羌難得而稱計、爾乃廻輿駐罕、獵獵洲停、晬容有穆、賓儀式序、投几肆筵、因流波而成次、蒸、肴芳醴、任激水而推移、彫俎陳階、金匏在席、咸奏翹舞、箭動邠詩、召鳴鳥於弇州、追伶倫於嶰谷、發參差於王子、傳妙曜於帝江、清歌有闋、羽觴無算、上陳景福之賜、下獻南山之壽、信凱讌之在藻、知和樂於食萃、桑榆之陰不居、草露之滋方渥、有詔曰今日嘉會、咸可賦詩。

當時相競うて巧麗に赴き、四六駢對の風殆んと其極に達せり、融が詩序の如きは固

に盛進の光彩、靡麗鮮妍ならざるべからず、今此文を以て漢魏の作に比すれば、歴然として六朝の特色を知るべし、此序舗叙を縦にすと雖も、辭賦の體とは自ら異なる所あり、唐の王勃の滕王閣序の如きは此に得る所少からざるべし、融が天寶二十七に過ぎざれども、其の文は永く千秋を照す、嗟文章は不朽の偉業なるかな、魏文が典論の語、寔に虛ならざるなり。

四、謝朓

謝朓字は玄暉、陳郡陽夏の人なり、少より學を好みて美名あり、文章清麗、文才を以て一世を動かす、時に隋王子隆は荆州に在りて辭賦を好み、數、僚友を集む、朓尤も賞愛せらる、流連晤對、日夕を捨てず、又た草隸を善くし、特に五言詩に長ず、梁、沈約常に云ふ、二百年來無此詩也、敬皇后、遷て山陵に祔す、朓、哀策文を撰す、齊世及ぶ者あるなし、隆昌の初、朓に勑して北使に接せしむ、朓は自ら口訥を以て啓譏し、許さる、高宗政を輔くるとき、朓を以て驃騎諮議と爲し、記室を領し、霸府の文筆を掌り、又た中書郎、詔誥を掌る、中書郎に轉じ、出でて宣城太守と爲り、後ち讒に遭うて獄死す、時三十六、其の著はす所、賦九篇、表三篇、章、牋、各一篇、啓三篇、教二篇、哀策文、誄册文各一篇、墓銘四篇、祭文三篇、樂府には則ち齊雩祭歌八首、——迎神八章、世祖武皇帝三章、青帝二章、赤帝三章、黄帝三章、白帝三章、黑帝三章、送神五章、又た隨王鼓吹曲十首、其十數篇、詩、八十四篇、聯句七篇、謝宣城集あり。

遊東田　謝朓

戚々苦無悰、携手共行樂、尋雲陟累榭、隨山望園閑、遠樹曖阡阡、生煙紛漠漠、魚戲新荷動、鳥散餘花落、不對芳春酒、還望青山郭、

懷故人　同

芳洲有杜若、可以贈佳期、皎皎忽超遠、何由見所思、行行未千里、山川已間之、離居方歲月、故人不在茲、清風動羅夜、孤月照隱時、安得同携手、酌酒賦新詩、

臨溪送別　同

悵望南浦時、徒倚北梁步、葉上涼風初、日隱輕霞莽、荒城迴易陰、秋溪廣難渡、泯涬豈徒然、君子行多露、

雜詠三首、錄其一首

餞臺　同

玲瓏類丹樓、　苔亭似玄闕、　對風懸清水、　垂龍挂明月、　照粉拂紅粧、　插花理雲髮、
玉顏徒自見、　常畏君情歇、

詠風　　同

徘徊發紅蕚、　敞薤動綠蕤、　垂楊低復舉、　新萍合且離、　步檐行袖靡、　當戶思襟披、
商聲飄歌吹、　相思子未知、　時拂孤鸞鏡、　星髮視參差、

玉階怨　以下三首樂府　　同

夕殿下珠簾、　流螢飛復息、　長夜縫羅衣、　思君此何極、

金谷聚　　同

渠碗送佳人、　王杯邀上客、　車馬一東西、　別後思今夕、

王孫遊　　同

綠草鬱如絲、　雜樹紅英發、　無論君不歸、　君歸芳已歇、

玄暉は齊代第一の詩人にして、後の名家之を尊尊して已まず、陳繹曾之を評して曰く、險怪於意外、發自然於句中、齊梁以下造語、皆此に出づ、唐の李青蓮は詩を論じては眼中往古なし、然れども唯玄暉に對しては一生低首、謝宣城の句を吐き、恍然心醉し、極口之を稱讃せり、蓋し靈心妙悟、自然を句中に發して清綺絶倫なるは玄暉の獨得たり。

五、張融

張融字は思光、弱冠にして名あり、嘗て封溪令と爲る、行くに及て路徑險、猿賊は融を執へて將に之を殺食せんとす、融神色動かず、方に洛生詠を作る、賊之を異として害せざりき、海に泛びて交州に至るとき、海中に於て風に遇ふも終に慄色なし、方に詠じて曰く、乾魚自可還、其本鄉、肉餔復何爲者哉、と、又た海賦を作る、文辭詭激、獨り衆と異なり、後ち以て鎮軍將軍顧覬之に示す、覬之曰く、卿の此賦は實に玄虛に翅ゆ、但恨らくは鹽を道はざるのみと、融即ち鹽を求て注て曰く、漉沙構白、熬波出素、積雪中奉、飛霜暑路、と、此四句は後に足す所なり、覬は融の兄と恩好あり、覬卒せしとき、融身に墳土を負ふ、南に在りしとき、交阯太守卞展と善し、展は嶺南に於て人の爲に殺さる、融身を挺でゝ奔赴せり、交阯頗る俠胸を見る、高帝素と融を愛す、太尉たりし時、融と欵接す、融を見て常に笑て曰ふ、此人不可無一、不可有二と、融は莫書を融し、常に自ら其の能を美す、帝曰く、卿の書は殊に骨力あり、但恨らくは二王法なしと、答へて曰、

臣に二王の法なきを恨むのみに非ず、亦た二王に臣の法なきを恨むと、又た常に歎じて曰く、我れ古人を見ざるを恨まず、恨む所は古人又た我を見ざるをと、融は形貌短醜、精神清徹、奇行少からず、又孝義あり、忌月三旬、樂を聽かず、嫂に事へて甚だ謹む、仕へて司徒に至り、右長史を兼ぬ。融は玄義に師法なかりしも神解人に過ぎ、高談能く抗拒するもの鮮し、永明中疾に遇ひて問律自序を爲る、融の文集數十卷世に行はる、自ら其集を名けて玉海と爲す、司徒褚彥回其故を問ふ、融云く、蓋し玉は以て德に比し、海は上善を崇ぶのみと、張長史集に收むる所は海賦、箋一篇、書五篇、門論、問律自序、臨卒戒子、詩四篇なり。

六、孔稚珪

孔稚珪字は德璋、會稽山陰の人なり、少より學涉、美譽あり、太守王僧虔見て而て之を重し、引て主簿と爲す、太祖の驃騎たりしとき、稚珪の文翰あるを以て取つて記室參軍と爲し、江淹と對して辭鋒を掌る、稚珪風韻清疎、文詠を好む、伏酒七八升、外兄張融と情趣相得、又た琅邪王思遠、廬江何點、點弟胤と並に欵交し、世務を樂まず、居宅盛に山水を營み、几に憑て獨り酌み、傍ら雜事なし、門庭の內、草萊翦らず、中に蛙鳴あり、或は之を問うて曰く、陳蕃たらんと欲するかと、稚珪笑つて曰く、我は此を以て兩部の鼓吹に當つ、何ぞ必しも仲舉に效ふを期せんやと、永元元年、太子詹事と爲る、卒年五十五。

孔詹事集には表五篇、奏二篇、啓一篇、書三篇、碑二篇、北山移文、祭外兄張長史文、詩三篇あり。汝南の周顒嘗て舍を鍾嶺に結びしが、後ち出でゝ山陰令と爲る、秩滿ちて京に入るとき、復た此山を經、珪は山靈に代つて文を移して之と絕つ、昭明太子取つて文選に入る、世最も此文を稱す。

北山移文

孔稚珪

鍾山之英、草堂之靈、馳烟驛路、勒移山庭、夫以耿介拔俗之標、瀟灑出塵之想、度白雪以力潔、干青雲而直上、吾方知之矣、若乃亭亭物表、皎皎霞外、非千金而不昏、厲万乘其如脫、聞風吹於浦、值薪歌於延瀨、固亦有焉、豈期始終參差、若黃反覆、淚翟子之悲、慟朱公之哭、乍回迹以心染、或先貞而後躁、何其謬哉、嗚呼尙生不存、仲氏既往、山阿寂寥、千載誰賞、世有周子、儁俗之士、既文既博、亦玄亦史、然而學通東魯、習隱南郭、竊吹草堂、濫巾北岳、誘我松桂、欺我雲壑、雖假容於江皐、乃纓情於好爵、其始至也、將欲排荑交、拉許由、傲百世、蔑王侯、風

怙張、日、縉氣横、秋、或歎幽人長往、或怨王孫不游、談空々於釋部、聚玄々於道流、務光何足比、涓子不能儔、及其鳴騶入谷、鶴書赴隴、形馳魄散、志變神動、爾乃眉軒席次、袂聳筵上、焚斐翠而裂荷裳、抗塵容而走俗狀、風雲樓其滯憤、泉石咽而下愴、望林巒而有史、顧草木而如衷、至其紆金章、綰黑綬、跨屬城之雄、冠百里之首、張英風於海甸、馳妙譽於浙右、道峽長揖、法筵久埋、敲朴斲揖、犯其虛、牒訝倥偬、裝其懷、琴歌既斷、酒賦無續、常綱繆於結課、每紛綸於折獄、簡張趙於往圖、架卓魯於前錄、希蹤三輔豪、馳聲九州牧、使其商霞孤映、明月獨舉、清松落陰、白雲雖侶、硐戶摧絕、無與歸、石逕荒涼、徒延竚、至於還轅入幕、寫霧出楹、蒲帳空兮夜鶴怨、山人去兮曉猿驚、昔明投、管逸海岸、今見解、闕總塵纓、於是南嶽獻嘲、北隴騰笑、列壑爭、讎掇峰峀、謂慨游子之我欺、悲無人以赴弔、故其林愁無盡、澗愧不歇、秋桂遣風、春蘿捶月、聘西山之逸駿、馳東皐之素謁、今乃促裝下邑、浪櫂上京、雖情投於魏闕、或假步於山扃、豈可使芳杜厚顏、薜荔裝耻、碧嶺再屏、丹崖重滓、塵游濁於蒲路、汚淥池以洗耳、宜扃岫幌、掩雲關、斂輕霧、藏鳴瀑、來棲於谷口、杜妄轡於郊端、於是幾條晚靄、壺顯怒魄、或飛柯以折輪、乍低枝而掃迹、時廻俗士、爲君謝逋客。

北山移文は是れ齊代第一の雄篇、其の辭句の清麗なるのみならず、氣格も亦亭々として谿畔の松の如く、皎々として中天の月の如し、憤懣嘲罵の氣筆端に迸りて俗士僞仙をして惡死せしむ、フランクリンが米國獨立の檄は能く幾万の志士を感奮せしめしと雖も、氣品熟情に於ては此の移文を想する能はざるなり、

第六章　梁代文學

一、梁武帝

梁武帝、性は蕭名は衍、少より篤學、儒玄に洞達し、又た佛典に深し、万機多務なりと雖も、猶ほ卷、手を輟めず、側光を燃燭して常に戊夜に至る、其の著はす所、孝經義、周易講疏及六十四卦二繫文言序卦等義、樂社義、毛詩答問、春秋答問、尚書大義、中庸講疏、孔子正言、老子講疏、凡そ二百餘卷あり、國學を修飾し、生員を增廣し、五館を立て、五經博士を置く、此に於て四方郡國、學に趨き、風に向ひ、京師に雲集す、武帝又佛法を篤信したれば、釋典に義記を施すもの數百卷、後ち佛に淫し、殿堂を建立し、衆僧を供養し、躬から佛弟子と稱して、豆羹糲食を以て戒を持す、終に之が爲に災害を釀するに至れり然れど天資英邁にして多藝多能、古昔帝王人君を歷觀するも決して多く得べからざるなり、人或は之を以て魏文に比す、亦た當らずとせず、武帝詞才雄逸、筆を下せば

章を成し、彬彬として一世に振ふ、其の著作する所、賦、詔百二十篇、制四篇、冊一篇、璽書一篇、令六篇、檄一篇、表二篇、書十五篇、序一篇、記二篇、連珠二篇、箴凡百、箴、銘、文五篇、樂府二十二篇、詩三十二篇、聯句二篇、梁武帝集に收む。淨業賦序は恰も曹孟德の述志令に似たり、孟德は奸雄にして文を善くし、自ら西伯を許し、武帝も亦曠て湯武に比し、大言して怍ぢず、孝思賦も亦頗る雄篇、筆力見るべし。

河中之水歌 樂府　　梁武帝

河中之水向東流、洛陽女兒名莫愁、莫愁十三能織綺、十四採桑南陌頭、
十五嫁爲盧家婦、十六生兒字阿侯、盧家閨室桂爲梁、中有鬱金蘇合香、
頭上金釵十二行、足下絲履五文章、珊瑚掛鏡燭生光、平頭奴子鑿履箱、
人生富貴何所望、恨不早嫁東家王、

東飛伯勞歌 一云古歌紹　　同

東飛伯勞西飛燕、黃姑織女時相見、雞家兒女對門居、開顏發豔照里閭、
南窗北牖挂明光、紈帷綺帳脂粉香、女兒年幾十五六、窈窕無雙顏如玉、
三春已暮花從風、空留可憐雙與同、

洛陽有曲陌、曲陌不通驛、忽遇二少童、扶轡問君宅、我宅邯鄲右、易憶復可知、
大息紐絪緼、中息佩陸離、小息倚青綺、總轡遊南皮、三息俱入門、家臣拜門垂、
三息俱升堂、旨酒盈千巵、三息俱入戶、戶內有光儀、大婦理金翠、中婦事玉鬪、
小婦獨閒暇、調笙遊曲池、丈人少裹徊、風吹方參差、

聯句

清晨殿効柏梁臺、　　武帝

居中負扆寄纓紱、言懋幅幾政無術、新安太守任昉
至德無垠愧遂弼、侍中徐勉　　樊賛京河豈微物、丹陽丞劉汎
竊侍兩宮懋樞密、黃門侍郎柳惲　　清通簡要臣豈泊、吏部郎中謝覽
出入帷扆濫榮秩、侍中張卷　　複道龍樓歌楙實、太子中庶子王暕
空班獨坐懋羊質、御史中丞陸杲　　嗣以書記臣敢匹、右軍主簿陸倕
謬參和鼎講畢一、司徒主簿劉治　　鼎味參和臣多暨、司徒左西屬江曹

聯句詩

傾城非人美、十載難重逢、雖懷耐中意、愧無鬢髮容、

梁武帝

現銘

音樂雜學

假嘲畫心

二、昭明太子

昭明太子統字は德施、高祖の長子なり。生れて聰敏、三歲にして孝經論語を受け、五歲にして遍く五經を讀み、悉く能く諷誦す、天監八年九月孝經を壽安殿に講じ、盡く大義に通ず、講し畢りて親から釋奠に國學に臨む、太子は姿貌美しく學止に善く、讀書數行並び下る、過目皆な憶す、遊宴祖道ある每に賦詩十數韻に至る、亦佛法を崇信し、遍く衆經を覽す、高祖又た太子をして萬機を省せしむ、內外百司の事を奏する者、前に塡塞す、太子應事に明かに、纖毫も必ず曉る、奏する所に謬誤及び巧妄ある每に皆な即ち就て辯析して其の可否を示し、徐に改正せしむ、未だ嘗て一人を彈糾せず、法獄を平斷して全宥する所多し、天下皆な仁を稱す、性寬和にして衆を容れ、喜慍色に形はれず、才學の士を引納し、賞愛倦むなし、恒に自ら篇籍を討論し、或は學士と古今

を商確し、間あるときは則ち繼ぐに文章著述を以てし、率ね以て常と爲しき、時に東宮に書幾三万卷あり、名才並に集る、文學の盛なること、晉宋以來未だ之れあらざるなり、性、山水を愛し、玄圃に於て穿築し、更に亭館を立て、朝士名素者と共中に遊ぶ、嘗て舟を後池に泛ぶ、番禺侯軌盛稱すらく、此中宜く女樂を奏すべしと、太子答へず、左思の招隱詩を詠じて曰く、何必糸與竹、山水有清音、と、侯慙ぢて止みぬ、中大通三年薨ず、年三十一、朝野惋愕し、京師の男女宮門に奔走し、號泣路に滿ちぬ、著はす所、文集二十卷、又た古今典誥文言を撰みて正序十卷を爲る、五言詩の善者を文章英華二十卷と爲す、又た文選三十卷を撰す、陳吏部尙書姚察曰く、孟軻有言、鷄鳴而起、孳々爲善者舜之徒也、若乃布衣韋帶之士、於畎畝之中、終日爲之、其利亦已博矣、況乎處重明之位、居正體之尊、克念無怠、烝々以孝、大舜之德也、其何遠之有哉、と、梁昭明集に收むる所、賦五篇、疏一篇、令五篇、書七篇、啓八篇、末篇は十二月啓なり、文選序、陶靖節集序、七契、贊三篇、陶靖節傳、解二諦義、並問答、解法身義、樂府七篇、詩二十四篇あり。

文選序　　昭明太子

式觀元始、眇覩玄風、冬穴夏巢之時、茹毛飲血之世、世質民淳、斯文未作、遡乎伏羲之王天

下也、始畫八卦、造書契以代結繩之政、由是文籍生焉、易曰觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下、文之時義遠矣哉、若夫椎輪爲大輅之始、大輅寧有椎輪之質、增冰爲積水所成、積水曾微增冰之凜、何哉蓋顯其事而增華、變其本而加厲、物既有之、文亦宜然、隨時變改、難可詳悉、嘗試論之曰、詩序云、詩有六義焉、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌、至於今之作者、異乎古昔、古詩之躰、今則全取賦名、荀宋表之於前、賈馬繼之於末、自茲以降、源流寖繁、逝邑居則有憑虛亡是之作、戒畋遊則有長楊羽獵之制、若其紀一事、詠一物、風雲草木之興、魚蟲禽獸之流、推而廣之、不可勝載矣、又楚人屈原、含忠履潔、君匪從流、臣進逆耳、深思遠慮、遂放湘南、耿介之意既傷、壹鬱之懷靡愬、臨淵有懷沙之志、吟澤有憔悴之容、騷人之文、自茲而作、詩者蓋志之所之也、情動於中、而形於言、關雎麟趾、正始之道著、桑間濮上、亡國之音表、故風雅之道、粲然可觀、自炎漢中葉、厥塗漸異、退傳有在鄉之作、降將著河梁之篇、四言五言區以別矣、又少則三字、多則九言、各躰互興、分鑣並驅、頌者所以游揚德業、褒贊成功、吉甫有穆若之談、季子有至矣之歎、舒布爲詩、既言如彼、總成爲頌、又亦如此、次則箴興於補闕、戒出於弼匡、論則析理精微、銘則序事清潤、美終則誄發、圖像則讚興、又詔誥教令之流、表奏箋記之列、書誓符檄之品、弔祭悲哀之作、答客指事之制、三

言八字之文、篇詞引序、碑碣誌狀、衆制鋒起、源流間出、譬陶匏異器、並爲入耳之娛、黼黻不同、俱爲悅目之翫、作者之致蓋云備矣、余監撫餘閑、居多暇日、歷觀文囿、泛覽辭林、未嘗不心遊目想、移晷忘倦、自姬漢以來、眇焉悠邈、時更七代、數逾千祀、詞人才子、則名溢於縹囊、飛文染翰、則卷盈乎緗帙、自非略其蕪穢、集其清英、蓋欲彰功、太平難矣、若夫姬公之籍、孔父之書、與日月俱懸、鬼神爭奧、孝敬之准式、人倫之師友、豈可重以芟夷加之剪截、老莊之作、管孟之流、蓋以立意爲宗、不以能文爲本、今之所選、又亦略諸、若賢人之美詞、忠臣之抗直、謀夫之話、辯士之端、永釋泉湧、金相玉振、所謂坐祖丘、議稷下、伸連之却秦軍、食其之下齊國、留侯之發八難、曲逆之吐六奇、蓋乃事美一時、語流千載、概見填籍、旁出子史、若斯之流、又亦繁博、雖傳之簡牘、而事異篇章、今之所集、亦所不取、至於記事之史、繫年之書、所以褒貶是非、紀別異同、方之篇翰、亦已不同、若其讚論之綜緝、辭采序述之錯比、文華事出於沈思、義歸乎翰藻、故與夫篇釋雜而集之、遠自周室、迄於聖代、都爲三十卷、名曰文選云爾、凡次文之體、各以彙聚、詩賦體既不一、又以類分、數分之中、各以時代相次。

蕭統の名は文選に依て世に知らるゝもの多し、上掲の序は其の筆力を窺ふと同時に文選撰輯の旨趣を知るべし、古來の詩文等を總集彙類せるは此書を以て最古と

爲す、故に梁以前の名作を見るは此書に依るを便とすること少からず。況や蕭統は右文の志士、文學興起に與つて力あること決して鮮少からざるに於てをや。

三、簡文帝

簡文帝名は綱、字は世纘、武帝の第三子なり、幼にして敏啟、識悟人に過ぐ、六歲便ち文を屬す、高祖其の早就に驚き、之を信ぜざりき、乃ち御前に於て面試す、辭彩甚だ美なり、高祖歎じて曰く、此子は吾家の東阿なりと、既に長じて、器宇寬弘、未嘗て慍喜を見ず、方頤豐下、鬚髮畫の如し、眄睞すれば則ち目光人を燭す、讀書十行俱に下り、九流百氏、目を經れば必ず記す、篇章辭賦、筆を操れば立どころに成る、博く儒書を綜ね、善く玄理を言ふ、嘗て北伐の軍を率ゐ、地を拓く千里、監撫に居るに及んで弘宥する所多し、文案簿領纖毫も欺くべからず、文學の士を引納し、賞接倦むことなし、恒に篇籍を討論して繼ぐに文章を以てす、高祖褒する所の五經講疏、嘗て玄圃に於て講述す、聽者朝野を傾く、雅と好みて詩を題す、其序に云く、余七歲有詩癖、長而不倦、と。然れども輕豔に傷る、當時號して宮體と曰ふ、著はす所、昭明太子傳五卷、諸王傳三十卷、禮大義二十卷、老子義二十卷、莊子義二十卷、長春義記百卷、法寶連璧三百卷、然れども其の文は則ち輕華を以て累と爲す。梁簡文帝集に收むる所、賦二十一篇、詔三篇、令五篇、教九篇、移文一篇、表十八篇、疏一篇、章二篇、啓四十九篇、書二十篇、序七篇、論二篇、七勵、頌五篇、銘十二篇、碑十三篇、連珠三首、墓誌銘十四篇、誄一篇、哀辭一篇、文五篇、祭文二篇、疏三篇、樂府六十三篇、詩百七十八篇あり。

答徐摛書

山濤有言、東宮養德而已、但今與古殊、時有監撫之務、竟不能黜邪進善、少助國章、猷可替不、仰裨聖政、以此惡惶、無忘夕惕、驅馳五嶽、在戎十年、險阻艱難、備更之矣、觀夫全軀具臣、刀筆小吏、未嘗識山川之形勢、介冑之勤勞、細民之疾苦、風俗之嗜好、高閣之間可來、商門之地徒重、玉饌雖前、黃金在握、泥砦栗、斯容與自憙、亦復言義軒以來一人而已、使人見此、良足長歎、

自序

有梁正士蘭陵蕭世纘、立身行已、終始如一、風雨如晦、雞鳴不已、弗欺暗室、豈沈三光、數至於此、命也如何。

生別離

別離四弦聲、相思雙笛引、一去十三年、復無好音信。

四、梁元帝

元帝名は繹、字は世誠、武帝の第七子なり、天性英發、音響鐘の如く、幼にして眼を患ひ、遂に一目を失ふ、簡文帝侯景の亂に崩ずるに及び、群臣、帝に勸めて位に即かしむ、性書籍を愛す、既に目を患ひて多く自ら卷を執らず、左右に命じて、番次上直して書を讀ましむ、常て眠熟して大鼾す、左右唾讀して次第を失す、帝驚き覺めて更に追讀せしめしことありと云ふ、常に云ふ、我は文士に媚ふして武夫に愧づと、論者以て言を得たりと爲しき、魏の師至りて城陷る、時四絕を製して竟に殂す、年四十七、其の著はす所、孝德傳、忠臣傳あり、又賦は玄覽賦、言志賦等九篇、詩八十七篇、騷一篇、詔三篇、令四篇、教一篇、表五篇、啓二十二篇、書十九篇、檄文一篇、論二篇、序十三篇、讚一篇、贊六篇、銘三篇、碑十五篇、墓志八篇、祭文三篇、玄覽賦は頗る長篇にして筆力を見るに足る、皆な梁元帝集に收む、

採蓮賦　梁元帝

紫莖分文波、紅蓮分芰荷、綠房分翠蓋、素實分黃螺、於時妖童媛女、蕩舟心許、鶁首徐廻、傾羽杯、棹將移而藻挂、船欲動而萍開、爾其纖腰束素、遷延顧步、夏始春餘、葉嫩花初、恐沾裳而淺笑、畏傾船而斂袵、故以水濺蘭橈、蓮侵羅襪、菊澤未反、梧臺迥見、荇涇霑袗、菱長繞釧、泛柏舟而容與、歌採蓮於江渚、歌曰、碧玉小家女、來嫁汝南王、遊花亂臉色、荷葉雜衣香、因持薦君子、願裳芙蓉裳。

登城觀戰　同

落星依遠戍、斜月半平林、徵兵資瑛玉、壘鼓亂攙金、單醪投百米、芳餌下千尋、從軍所以樂、梁王有赤心、

忠臣傳死節篇序　同

自非識君臣之大體、鑒生死之弘分、何分能滅七尺之軀、殉一顧之感、然平路康衢、從容之道、進危途險徑、忠貞之節興、登平路者易爲功、涉險途者難爲力、從容之用、世不乏人、忠貞之槩、時難厲有、

五、江淹

江淹字は文通、濟陽考城の人なり、少より孤貧、好學沈靜にして交遊少し、嘗て郭彥文の事に連座して州獄に繫る、淹獄中より書を上る、宋の建平王景素、書を覽て即日之

を出し、尋て南徐州の秀才に擧げられ、對策上第たり、少帝の初、驍騎將軍と爲り、御史中丞を兼ね、頗る功蹟あり、後ち明帝、淹に謂て曰く、宋世以來復た殷明中丞あらざりしが君今日近世獨步と謂ふべしと、淹は諸官を歷任するも、常に詔册を參掌し、幷に國史を典れり、淹又往々先見の明を以て稱せらる、天監元年散騎常侍左衛將軍となり、臨沮縣開國伯に封ぜられ、邑四百戶を食む、淹乃ち子弟に謂つて曰く、吾本と素官、富貴を求めず、今の忝竊、遂に此に至る、平生止足の事を言ひ、亦以て備ふ、人生行樂のみ、富貴を須ふる何時ぞ、吾が功名既に立つ、正に身を草萊に歸せんと欲するのみと、其年疾を以て金紫光祿大夫に遷り、改めて醴陵侯に封ぜらる、四年卒す、時に年六十二、淹少より文章を以て顯はれ、晚節才思微しく退く、時人皆な之を才盡きぬと謂ふ。凡そ著述する所三百餘篇、自ら撰みて前後集と爲す、並に齊史十志あり、江醴陵集に載する所、賦二十八篇、詔二十一篇、敎五篇、表三十七篇、章九篇、符一篇、奏記一篇、牋三篇、啓六篇、上書一篇、書三篇、無爲論、頌十五篇、誄五首、誄一篇、袁叔明傳、自序傳、墓銘五篇、行狀一篇、祭文二篇、騷五篇、樂府七篇、詩卅一篇、雜體三十首、並序其他十一篇、明の張溥は江醴陵集に題して曰く、蓋文通之學、華少於宋、壯盛於齊、及梁則爲老成人矣、身歷三朝、

辭、該衆體、恨別二賦、音制一變、長短篇章、能寫胸臆、即爲文字、亦詩騷之意居多、余每私論江、任(彥升)二子、縱衡駢偶、不受羈勒、若使生逢漢代、舊其才、果上可爲枚叔谷雲、次亦不失馮敬通、孔北海、晚際江左、馳逐華采、卓爾不群、と、南史に江文通、任彥升、王僧孺、同傳三人、俱に長者行あり、時文新麗順挫、並に一時の傑なり、

江淹

訪道經區

百學兮異文、錦派兮綺分、珍君之言兮儼無際、悅子之道兮逈不群、澹深韻於白水、儼高意於浮雲、軌賢豪於後學、軼望識於前文、茲道兮可傳、可傳兮皓然、挾茲心兮赴絕國、懷此書兮座空山、空山隱嶙兮巖翠蔓、水散漫兮涵素壑、海外陰兮氣曇曇、江上月兮光灼灼、東南出兮不一山、西北來兮乃雙鶴、池中蓮兮十色紅、窓前樹兮萬葉落、四壁深兮乃沈寥、左右虛兮如寂寞、寂寞兮山室、德經兮道裘、盪魂兮刷氣、掩憂兮靜疾、信若人兮先覺、聊與子兮如一、

無錫員相送銜涕別　同

心遠路已迴、意滿辭未陳、曾風漂別蓋、北雲疎征人、杯酒憐歲暮、志氣非上春、若無孤鳥還、瀝泣何人所、因、

雜體三十首有序　同

夫楚謠漢風、既非一骨、魏製晉造、固亦二體、譬猶藍朱成彩、雜錯之變無窮、宮商爲音、靡曼之態不極、故蛾眉距同、貌而俱動、於魄芳草、寧共氣而皆悅、於魂、不其然歟、至於世之諸賢、各滯所迷、莫不論甘而忌辛、好丹而非素、豈所謂通方廣恕、好遠兼愛者哉、乃及公幹仲宣之論、家有曲直、安仁士衡之評、人立矯抗、況復殊於此者乎、又貴遠賤近、人之常情、重耳輕目、俗之恒蔽、是以邯鄲托曲於李奇、士季假論於嗣宗、此其效也、然五言之興、蓋非創古、但關西鄴下、既已罕同、河外江南、頗爲異法、故玄黃經緯之辯、金碧浮沈之殊、僕以爲亦各具（文選作合北）美兼善而已、今作三十首詩、數其文體、雖不足品藻淵流、庶亦無乖商確云爾。

古離別以下二十九首略

遠與君別者、乃至爲門關、黃雲蔽千里、遊子何時還、送君如昨日、簷前霧已開、
不惜蕙草晚、所悲道里寒、君在天一涯、妾身長別離、願一見顏色、不異瓊樹枝、
兎絲及水萍、所寄終不移、

陳繹曾沈を評して曰く、善觀古作、出盡心手之妙、其自作乃不能爾、故君子貴自立、不可隨流俗也と、

六、沈約

沈約字は休文、吳興武康の人なり、父璞誅せらる、約幼にして潛竄し、赦免に會ふ、既にして流寓孤貧、篤志好學、晝夜倦まず、母は其の勞を以て疾を生ぜんことを恐れ、常に油を減じ火を滅せしめ、晝の讀む所、夜暉ち之を誦し、遂に羣籍に博通し、能く文を屬す、諸官を經て中書郎と爲る、時に竟陵王も亦士を招く、約は蘭陵の蕭琛、琅琊王融、陳郡謝朓、南鄉范雲、樂安任昉等と皆な此に遊ぶ、當世號して人を得たりと爲しき、約は范雲等と共に高祖に親任せられ、偉績燦然たり、約性酒を飲まず、嗜欲少し、時に隆重に過ふと雖も居處儉素、宅を東田に立て、郊阜を矚望す、嘗て郊居賦を爲る、尋て特進光祿を加ふ、侍中少傅は故の如し、天監十二年卒す、時年七十三、謚して隱といふ、約は左目重瞳子、腰に紫志あり、聰明人に過ぎ、墳籍を好む、書を聚むる二萬卷に至る、京師比なし、約は三代に歷任し、舊章を該悉し、博物洽聞、當世則を取る、謝玄暉は善く詩を爲り、任彥昇は文章に工なり、約は兼て之を有す、然も過ぐる能はざるなり、自ら高才を負て榮利に味し、時に乘じ勢を籍り、頗る清談に累ふ、端撲に居るに及で稍〻止足を弘む、一官を進む每に、輒ち怨懟に退かんと請ひ、而も終に去る能はず、論者之を山濤に方ぶ、事を用ふること十餘年、未だ嘗て薦達するあらず、政の得失、唯唯するのみ、約

の著はす所、晉書百十卷、宋書百卷、齊紀二十卷、高祖紀十四卷、通言十卷、謚例十卷、宋文章志二十卷、文集百卷、又た四聲譜を撰ぶ、以爲らく、在昔の詞人、千載を累ねて寤らず、而して獨り胸衿を得て其の妙旨を窮む、自ら入神の作と謂ふ、高祖雅と好まず、帝、周捨に問ひて曰く、何をか四聲と謂ふ、捨曰く、天子聖哲これなりと、然も帝竟に遊用せざりき。史家の贊に曰く、至於范雲沈約參預締搆、贊成帝業、加雲以機警明贍、濟務益時、約高才博洽、名亞遷董、俱屬興運、蓋一代之英偉焉と。固より一代の英偉たるを失はずと雖も、身嘗て齊文惠の家令たるを忘れて梁武の篡位を翼贊せしは、人臣の節に於て全からざる所あり。沈隱侯集に收むる所、賦十一篇、詔三十二篇、勅三篇、制二篇、疏四篇、表二十四篇、章三篇、彈文七篇、啓十九篇、書九篇、序四篇、論、七賢論等十篇、義三篇、頌二篇、贊五篇、銘五篇、連珠二首、記二篇、碑七篇、哀策文一篇、謚議三篇、墓誌銘六篇、行狀三篇、文五篇、疏七篇、樂府百六首、詩百九篇あり。約は特に佛法を信奉せしが故に佛を贊するの作甚だ多し、當時佛を奉ずるは殆んど上下に通ぜる形勢なりしも、約の如きは蓋し其の尤ならん、賦は郊居賦最も誦すべし、序は梁武帝集序、內典序最も稱せらる、七賢論は晉の七士を品藻するものなり、其他、辨聖論、均聖論、答陶華陽、究竟慈悲論、形神論、神不滅論、難范縝神滅論等頗る思索に長ずるを見るべし、陳繹曾は約を評して、

佳處剽削、清瘦可愛、自拘聲病、氣骨蘭然、唐諸家聲律皆出此と曰へり。

齊竟陵王題佛光記、　沈約

夫理貫空寂、雖絡絡不能傳、業動因應、非形相無以感、是故日華月彩、炤曜天外、方區散彩、咫尺塵方、太祖皇帝、湛襟慧水、凝神淨域、厭世珍陛、遷靈寶池、竟陵王肇泣明臺之下、臨慟高山之方、遽華迸玉鑾、情殷雙樹、永惟可以炳發神功、崇高妙業、莫若式金寫好、資巧匠傳儀、以皇齊之四年日子、敬制釋迦像一軀、尊麗自天、工非世造、色符留影、妙越檀香、傳毅林之思、永旌於萬劫、用刊衛迹、式垂不朽云爾。

懺悔文　同

弟子沈約稽首、上白諸佛衆聖、約自今生已前、至於無始、罪業參差、固非詞象所算、識味往緣、莫由證舉、爰始成童、有心嗜慾、不識慈悲、莫辨罪報、以爲毛羣鱗品、事允庖厨、無對之緣、非惻隱所及、(中略)又追尋少年、血氣方壯、習累所纏、事難排豁、淇水上宮、誠無云幾、分桃斷袖、亦足稱多、此實生死牢窠、永易洗拔、灌志慘舒、性所同哀、遷怒過嗔、有時或然、厲色嚴聲、無日可免、又言語行止、曾不尋研、觸過斯發、動淪無紀、終朝紛擾、薄暮不休、來果昏頑、將由

此作、前念甫謝、後念復興、尺波不息、寸陰驟往、愧悔攢心、罔知云厝、今於十方三世諸佛前、見在衆僧、大衆前、罄心懺己、追自悔責、收遥前愆、洗濯今慮云云、

冠子祝文　同

鴻茲令日、元服肇加、成德既舉、童心自化、行之則至、無謂道賒、敦以秋實、食以春華、無亟下問、乃致高車、子孫千億、廣樹厥家、

湘夫人　樂府　同

潺湲風已息、沅澧復安流、揚蛾一含睇、嫵娟好且脩、捐玦置澧浦、解珮寄中洲、

貞女引　同　同

貞女信無矯、傍鄰也見疑、輕生本非惜、賤軀良足悲、傳芳託嘉樹、弦歌寄好詞、

少年新婚爲之歌　同

山陰柳家女、游言出田壁、丰容好姿顏、便僻巧言語、腰肢既軟弱、衣服亦華楚、紅輪映早寒、韡扇迎初暑、錦履並花紋、繡帶同心苣、羅裙金游凰、雲髮花釵聚、我情已繾綣、何用表崎嶇、託意眉間黛、申心口上朱、莫爭三春價、坐喪千金軀、盈尺青銅鏡、徑寸合浦珠、無因遂往意、欲寄雙飛鳧、裾開見玉趾、衫游映凝膚、

遂言趙飛燕、笑殺秦羅敷、自顧雖怜游、冠蓋曜城隅、高門列駟駕、廣路從驪駒、何慚鹿盧劍、詎減府中趨、還家問鄉里、詎堪特作夫、

別范安成　同

生平少年日、分手易前期、及爾同衰暮、非復別離時、勿言一樽酒、明日難重持、

宋書……沈約の撰する所にして十紀三十志、六十列傳より成る、齊の永明より韶を奉じ、何承天の書を本と爲し、旁ら徐爰の說を採りて此書を完成せり、記事頗る精密富贍なり、特に符瑞志の如きは約の創設に係り、荒誕不稽の說話を以て充され、能く當時の習俗の狀態を表するものあり、夫れ符瑞の起源は遠く先秦に在りて、漢魏の際にも妄誕なる瑞祥を示して俗を欺きし者少からざりき、然れども六朝間人心日に月に輕浮纖弱に流れ、迷信倍甚しくなれり、故に亂臣簒奪の時に際して巧に圖讖應符を籍りて其の志を成せり、符瑞志の創設亦時代の特徴を見るに足らん。

七、陶弘景、丘遲

陶弘景……字は通明、丹陽秣陵の人なり、幼より異操あり、年十歲のとき、葛洪の神

仙傳を得、晝夜研尋し、便ち養生の志あり、人に謂て曰く、青雲を仰ぎ、白日を觀る、遊しと爲すを覺えずと、長ずるに及で身長七尺四寸、神儀明秀、朗目疎眉、細形長耳、讀書万餘卷、琴棋を善くし、草隸に工なり、齊高帝、相と作れるとき、引て諸王侍讀と爲し、奉朝請に除す、朱門に在りと雖も、閉影して外物と交らず、唯披閱を以て務と爲し、朝儀故事、多く決を取る、永明十年上表して祿を辭し茅山に隱れ、中山に館を立て華陽隱居と號しき、名山を徧歷し、仙藥を尋訪し、澗谷を經る每に、必ず其間に坐臥し、吟詠盤桓して已む能はず、時に沈約は東陽郡守と爲り、其の志節を高しとして書を累ねて之を要むれども至らず、弘景人と爲り、圓通謙謹、出處冥會、心は明鋭の如く、物に遇へば便ち了す、言語煩舛なし、有れば亦暢く覺る、嘗て感ずる所あり、夢記を著はす、永元の初、更に三層樓を築き、弘景は其上に處り、弟子其中に居り、賓客其下に居り、物と遂に絶つ、唯一家の僮のみ其旁に侍へるを得たり、殊に松風を愛し、其の響を聞く每に、欣然樂を爲す、時ありて獨り泉石に遊ぶ、望見する者は以て仙人と爲しき、性著述を好み、奇異を尙び、光景を顧惜し、老いて彌〻篤し、尤も陰陽五行風角星算山川地理方圖產物醫術本草に明かなり、帝代年歷を著はし、又た嘗て渾天象を造る、天監四年、移つて

積金東澗に居り、辟穀導引の法を善くす、年八十を逾えて壯容あり、深く張良の人と爲りを慕ひて云ふ、古賢莫比と、大同二年卒す、時年八十五、詔して中散大夫を贈り、謚して貞白先生と曰ひき、陶隱居集あり、收むる所、水仙賦、雲上之仙風賦、解官表、啓六篇、答釋曇鸞書等七篇、本草序、登眞隱訣序等六篇、難鎭軍沈約均聖論、尋山誌、頌、華陽頌十五首、瘞鶴銘、碑五篇、文二篇、詩六篇あり、

丘遲……字は希範、吳興烏程の人なり、父靈鞠、才名あり、齊に仕へて官太中大夫に至る、遲八歲、便ち文を屬す、靈鞠常に謂へらく、氣骨我に似たりと、高祖即位せしとき、中書侍郎と爲り、詔を文德殿に待つ、時に高祖、連珠を著はし、群臣に詔し繼作する者數十人、遲の文最も美なり、後ち司徒從事中郎と爲り、天監七年官に卒す、年四十五、丘司空集あり、賦二篇、表五篇、啓二篇、敎一篇、與陳伯之書、硯銘、誄一篇、詩十一篇、與陳伯之書最も世に稱せらる、

八、任昉

任昉字は彥升、樂安博昌の人なり、身の長け七尺五寸、性至孝なり、其の父樹鄉を嗜みて常俗と爲す、臨終の際、に亦之を求む、而して多く口に適はず、昉深く以て恨と爲し

て、終身檀櫸を嘗めざりき。梁に事へて驃騎記室參軍と爲り、專ら文翰を主る、初め武帝の未だ志を得ざりしとき、從容として昉に謂て曰く、我れ三府に登らば當さに卿を以て記室と爲すべしと、昉も亦た帝の騎馬を善くするを以て戲れて曰く、我れ若し三事に登らば當さに卿を以て騎兵と爲すべしと、是に至て昉を引て昔日の言を踐めり、後ち新安太守と爲りて官に卒す、太常を追贈し、謚して敬子と曰ふ昉少時常に五十に滿たざるを恐れしが、果して四十九にして卒せり、性交遊を好みて士友を奬進し、當時に顯達せし者少からざりしといふ。

任昉集に收むる所、賦三篇、詔七篇、禪梁璽書、禪梁冊、令三篇、敎一篇、表十三篇、彈文四篇、啓五篇、牋三篇、書五篇、策文一篇、序二篇、齊明帝謚議、哀策文、碑二篇、墓銘二篇、行狀二篇、弔文一篇、詩二十一篇、聯句あり。

贈王僧孺

王僧孺、由治書侍御史、出爲唐令、初僧孺與昉文學友合、及是昉之歿、昉時、

惟子見知、惟余知子、觀行視言、要終猶始、敬之重之、如闕如茫、形應影隨、曩行今止、百行之首、立人斯著、子之有之、誰毀誰譽、侈名既立、老至何遽、

[illegible]

任昉

[illegible]

九、王僧孺

王僧孺字は僧孺東海郯の人なり、六歲能く文を屬す、既に長じて學を好む、[illegible]

[illegible]

て、終身横槊を事めざりき。梁に事へて驃騎記室參軍と爲り、專ら文翰を主る、初め武帝の未だ志を得ざりしとき、從容として防に謂て曰く、我れ三府に登らば當さに卿を以て記室と爲すべしと、防も亦た帝の騎馬を善くするを以て戲れて曰く、我れ若し三事に登らば當さに卿を以て騎兵と爲すべしと、是に至て防を引て昔日の言を踐めり、後ち新安太守と爲りて官に卒す、太常を追贈し、謚して敬子と曰ふ、防少時常に五十に滿たざるを恐れしが、果して四十九にして卒せり、性交遊を好みて士友を奬進し、當時に顯達せし者少からざりしといふ。

任中丞集に收むる所、賦三篇、詔七篇、禪梁璽書、禪梁冊、令三篇、教一篇、表十三篇、彈文四篇、啓五篇、牋三篇、書五篇、策文一篇、序二篇、齊明帝謚議、哀策文、碑二篇、墓銘二篇、行狀二篇、弔文一篇、詩二十一篇、聯句あり。

贈王僧孺

王僧孺山法曹侍御史、出爲唐令、初僧孺與防文學友會、及是將之、縣、防贈詩、

惟子見知、惟余知子、觀行視言、要終猶始、敬之重之、如蘭如芷、形應影隨、
遲行今止、百行之首、立人斯著、子之有之、誰毀誰譽、脩名既立、老至何遽、

任防

誰其執鞭、吾爲子御、劉翠班蟲、成志苟錄、伊昔有懷、交相欣最、下帷無倦、
升高有屬、嘉爾晨燈、惜余夜燭、

同

吊劉文範文

余與先生、雖年世相接、而荆吳數千、未嘗膝行下風、承餘論、豈值發憤當年、固亦恨深終古、然叔夜之敘、論嵇韓卓之聖、亘伸、未必接光塵、承風彩、正復希向遊理、長想千載、然其人自高、假使横經擁帚、日夜掃門、會不睹千仞之一咫、萬頃之洞澈、終於對面、萬古莫能及門、故以此弭千載之恨、

九、王僧孺

王僧孺字は僧孺、東海郯の人なり、六歲能く文を屬す、既に長じて學を好む、家貧しく常に傭書して以て母を養ふ、寫す所既に畢れば諷誦亦通ず、齊に仕ふ、尚書僕射王晏深く相賞好す、又た竟陵王の西邸に遊ぶ、任防等と文學を以て友會す、後ち中書郎に昇し著作を領し、復た文德省に直し、中表雜及び起居注を撰す、高祖詔して春秋明志時五百字を製し、在朝の人沈約已下に勅して同作せしむ、高祖、僧孺の詩を以て工と爲しき、普通三年卒す、時に年五十八、僧孺墳籍を好む、聚書萬餘卷に至る、率ね異本多し、

沈約任昉の家書と相埒す、少より篤志精力、書に於て覩ざる所なし、其の文麗逸、多く新事人の未だ見ざる者を用ふ、世、其の富を重んず、僧孺、十八州譜七百一十卷、百家譜集抄十五卷、東南譜集抄十卷を集む、文集十卷、兩盡卿事、集内に入らざるもの五卷、及び東宮新記あり、王左丞集に收むる所、賦體、表六篇、牋一篇、啓五篇、敎一篇、書三篇、序二篇、碑二篇、墓誌銘、傳、誄、祭文各一篇、禮佛唱導發願文、懺悔禮佛文、初夜文、樂府六篇、詩三十一篇、

白馬篇　王僧孺

千里生冀北、玉鞘黃金勒、散蹄去無已、搖頭意相得、豪氣發西山、雄風擅東國、
飛鞚出秦隴、長驅繞岷棘、承讌若有神、京算良不惑、灞汨河水黃、參差幃雲黑、
安能對兒女、垂帷弄毫墨、豪弱不稱雄、後得方爲特、此心亦何已、君恩良入塞、
不許誇天山、何由報皇德、

十、陸倕

陸倕字は佐公、吳郡吳の人なり、少より勤學、善く文を屬す、宅内に於て兩間の茅屋を起し、往來を杜絶し、晝夜讀書、此の如きもの數載、讀む所一遍、必ず口に誦す、嘗て人に

謗書を借り、五行志四卷を失ひ、乃ち暗寫して之を還し、略遺脫なし、幼より外祖張岱の異とする所と爲る、岱嘗て諸子に謂て曰く、此兒は汝家の陽元なりと、竟陵王に招かれて英俊に交はる、倕は任昉と友とし善し、昉已賦を爲りて以て昉に贈る、高祖雅と倕の才を愛す、乃ち敕して新漏刻銘を撰ばしむ、其文甚た佳なり、太子中舍人に遷る、東宮書記を管す、又た詔して石闕銘記を爲りて之を奏す、敕して曰く、太子中舍人陸倕の製する所の石闕銘は辭義典雅、佳作と爲すに足ると、太常卿中正と爲る、普通七年卒す、年五十七、陸太常集あり、賦三篇、表五篇、章一篇、敎三篇、書二篇、啓四篇、銘三篇、碑一篇、墓誌銘一篇、祭文二篇、詩三篇あり。

以詩代書別後寄贈京邑僚友　陸倕

余本水鄉士、閉門江海隅、時逢世道衰、蹇足步高衢、名成宦雖立、效微功日疎、
入仕乘肥馬、出守擁高車、關門遊昔吏、遷亭有故書、江派資賢牧、宗英出建旗、
不勞王布鼓、無煩露田車、彌政非貴實、求名已課虛、長卿病猶在、修齡疾未祛、
詎知亭長肉、寧挂府丞魚、不能未能止、內訟慚諸己、僶俛從王事、綱舟出淮泗、
朋故遊追尋、暝宿清江陰、明旦一分手、翻飛各異林、歸舟隨岸曲、猶聞歌棹音、

行者日超遠、離見別離心、夕次洌洲岸、明登慈姥岑、水流多廻復、余歸良未尋、
江關寒事早、夜露傷秋草、心屬姑蘇臺、目送邯鄲道、霞華日若蒼、親知慎早涼、
劉兄消渴病、休攝戒無良、殷弟癲眩疾、行止避風霜、劉侯有餘冷、宜飾陟蠻方、
伏子多風咳、門冬幸易將、率更愛雅體、體弱思自强、吏曹勉玉潤、諷讀最金相、
比部多暇日、奚用肆龍章、建德何爲者、無賢無人鄉、記室朋從暇、露蝸附行商、
識曹坐朝罷、尺板嗣微芳、雙栖成獨宿、俱飛忽異翔、眷言思親友、沉思結中腸、
追惟疇昔時、朝府多歡暇、海華座埃靜、飛蓋遙相迓、李郭或同舟、潘夏時方駕、
娛談終美歌、敷文永清夜、促膝豈異人、成成昔朋婭、今者一乖離、濯然心事差、
山川望猶近、便似隔天涯、玉躬子加護、昭質余未虧、八行思自勉、一札望來儀、

十一、劉峻

劉峻字は孝標、平原の人なり、年八歲、人の略する所と爲り、中山に至る、中山の富人劉實は峻を愍み、束帛を以て之を贖ひ、教ふるに書學を以てす、魏人、其の江南に成屬あるを聞き、更に之を桑乾に徙す、峻は學を好みて家貧、人の廡下に寄り、自ら讀書を課し、常に麻炬を燎し、夕より旦に達す、時に或は昏睡して其の髮を爇き、既に覺めて復

た讀み、終夜寐ねず、其の精力此の如し、齊の永明中に桑乾より還るを得、自ら謂へらく、見る所博からずと、更に異書を求む、京師に有する者を聞けば、必ず往きて借らんとを祈む、清河の崔慰祖、之を書淫と謂へり、安成王秀は峻の學を好む、荆州に遷るに及で引て戶曹參軍と爲し、其の書籍を給し事類を抄錄せしめ、名けて類從と曰ふ、未だ成るに及はず、復た疾を以て去る、因て東陽紫巖山に遊び、室を築きて居る、山栖志を爲る、其の文甚だ美なり、高祖、文學の士を招く、高才あるものは多く引進せらる、擢づるに不次を以てす、峻は性に率て動き、衆に隨て浮沈する能はず、高祖頗る之を嫌ふ、故に任用せず、峻乃ち辨命論を著はし以て懷を寄す、又嘗て自序を爲りて馮敬通に比す、東陽に居りしとき、吳會の人士多く其の學に從ふ、普通二年卒す、年六十、門人、謚して玄靖先生と曰ふ、劉戶曹集あり、送橘啓、書六篇、序二篇、東陽金華山栖志、辨命論、廣絕交論、詩四篇あり、山栖志及び論文最も筆力を見るに足る、

送橘啓　　劉峻

南中橙甘、青烏所食、始霜之旦、採之風味、照座霧之香、霧嚼人、皮薄而味珍、脈不粘膚、食不留滓、甘踰萍實、冷亞氷壺、可以蒸神、可以芼鮮、可以漬蜜、可以鄉之果、寧有此耶、